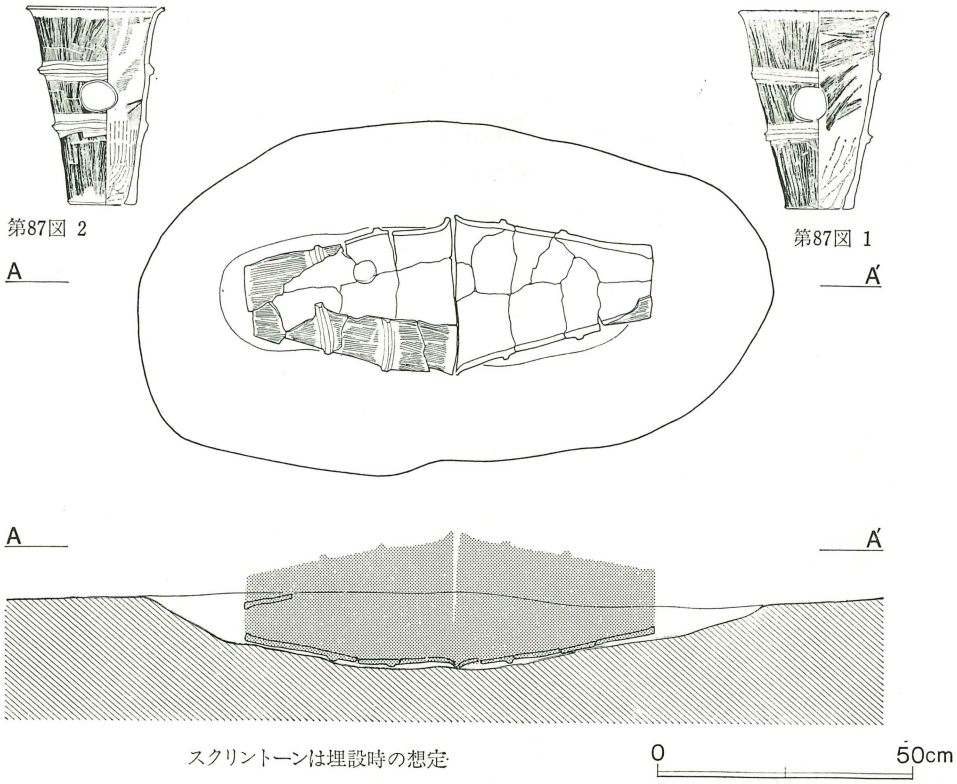
第28号土壙（第97図）

第７号住居跡に隠接し、83—Ａグリッドに位置する。また、本跡は第４号古墳跡の墳丘を穿って構築されていることから、切り合い関係を整理すると、第７号住居跡→第４号古墳跡→第28号土壙の順で理解される。

確認プランは楕円形、規模は東西2.60ｍ、南北1.30ｍ、深さ0.60ｍを測る。壙底面は起伏があり立ち上がりも不明瞭。出土遺物は外面ヘラミガキを施した壺形土器の小片が少量散漫に出土。覆土は５分割が可能。第８層　黒褐色土。第９、10層　明褐色土。第11層　暗褐色土　ローム多量混入第12層　黄褐色土。

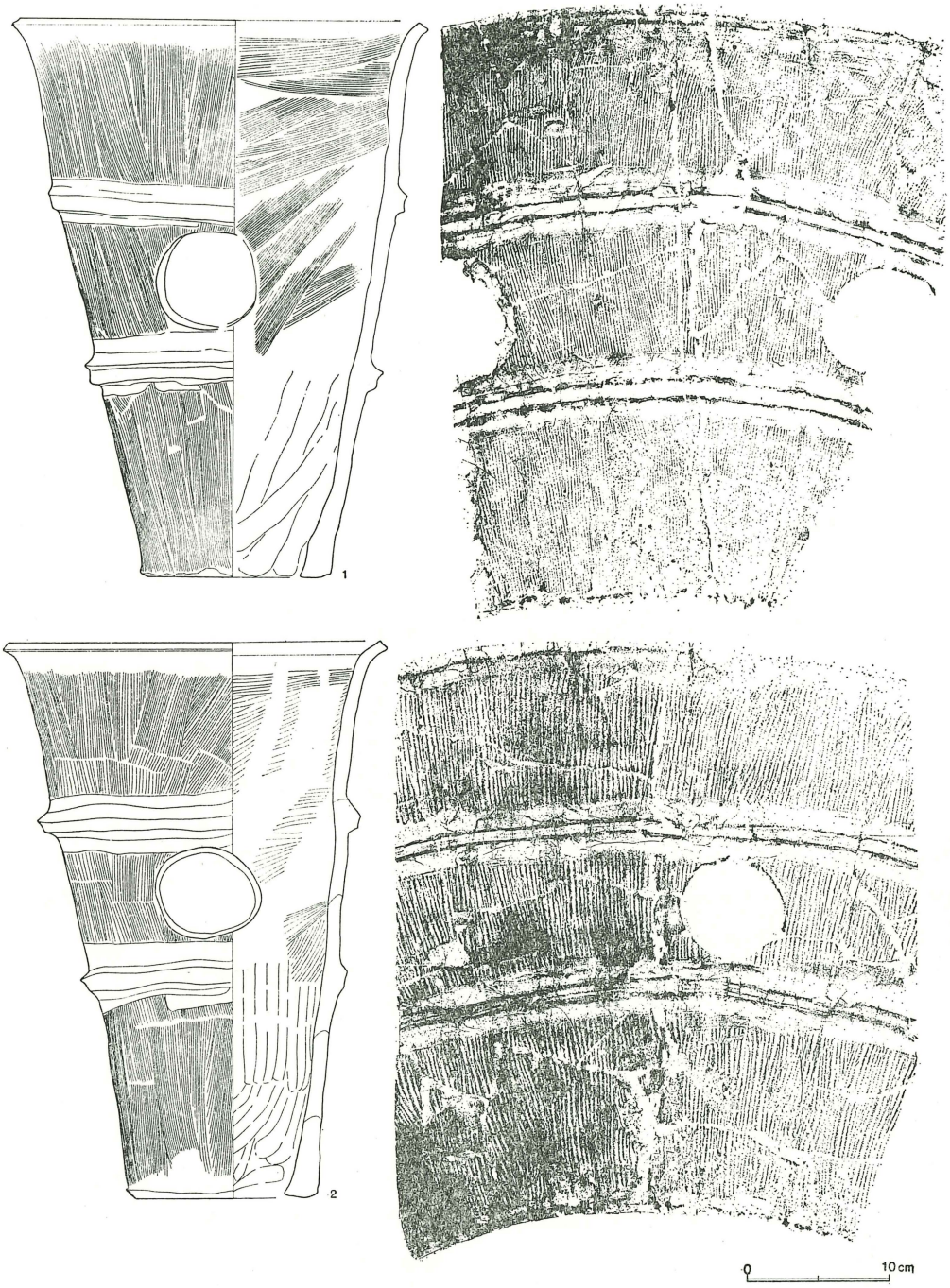


第86図　第215号土壙実測図

第216号土壙＜埴輪棺＞（第86、87図）

第７号古墳跡の周堀東側40㎝の位置で検出、Ｂ区30、31—Ｌに位置する。土壙の形状は不整楕円規模は東西0.68ｍ、南北1.26ｍ深さ0.16ｍを測る。壙底面は起伏に富み、立ち上がりは不明瞭である。埋置されていたのは普通円筒埴輪２箇体で、土壙の長軸と同じ軸線上に口縁部を合わせた所謂「合わせ口」状を呈している。埴輪の遺存は、確認面の低さから本来の½ほどの深度であると思われるが、比較的良好で原位置を保っているものと考えられる。また、幸運なことに第87図の２の上半は土圧により内側へ陥没したことから⅔ほどが遺存している。覆土はロームを少量混入した褐色土であるが、第86図のセクション図を見る限り、他の土砂、粘土により閉塞した痕跡は認められない。出土遺物（埴輪棺以外の）は皆無である。

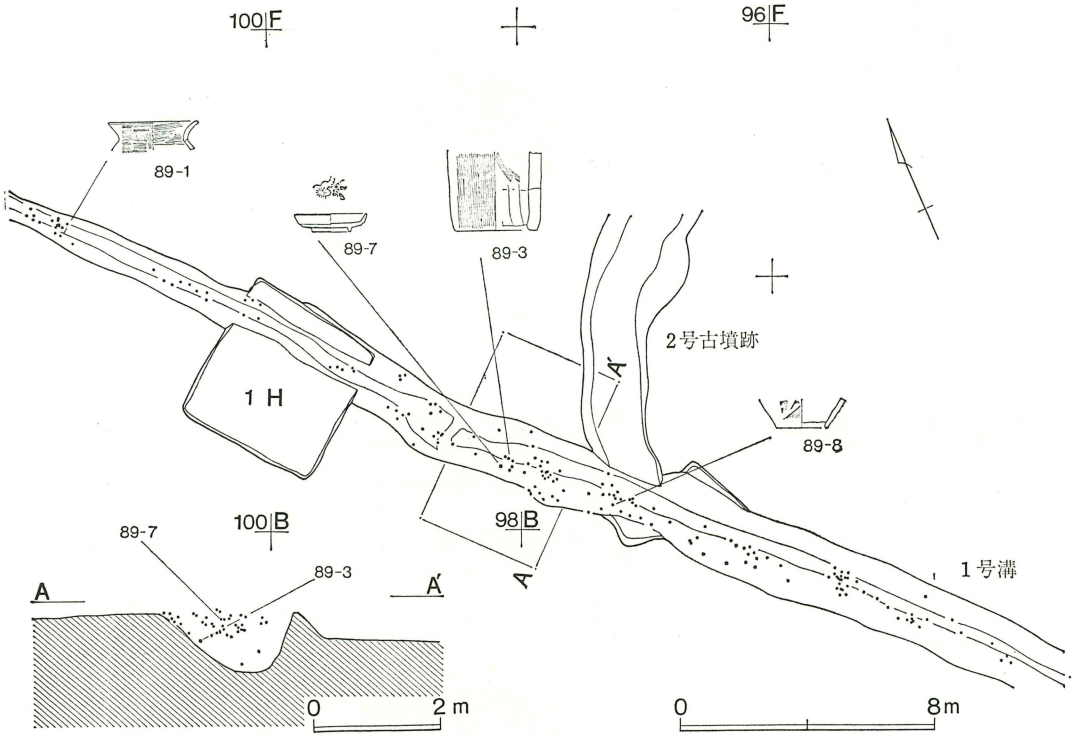
最後に、第７号古墳跡との位置関係を検討してみると、周堀の東側から40㎝の距離、土壙の主軸方位は、周堀に平行して存在するなど第７号古墳跡に付帯して構築された感がある。確認面の低さから考えると、周堀内に含まれるか、接して穿たれていたものと推測される。



第87図　第215号土壙出土埴輪実測図

第21表　第216号土壙出土埴輪（第87図）観察表

図版番号	器高	器径	器厚	器質	突帯	透孔	外面調整	内面調整	備考
87-1	h 31.7 a 11.6 b 9.5 c 10.6	口 23.8 底 10.8	a 0.6 b 0.7 c 0.7 d 0.7 e 1.7	色 淡褐色 胎 角岩礫 酸化鉄 焼 良好	B_2C_2 タイプ 一凸 1.0•1.8/1.0 二凸 1.0•1.7/0.7	形状 円形 a 5.3 b 5.7	縦刷毛ナデ 刷毛 15／本2cm 刷毛右廻り整紋 口縁上位ヨコナデ	上半斜位刷毛ナデ 刷毛 15本／2cm 刷毛下→上へ 下半指による斜位ナデ	½欠 口縁部 A_1 タイプ 底部 Aタイプ
87-2	h 31.4 a 12.6 b 8.6 c 10.2	口 21.8 底 10.9	a 0.5 b 0.7 c 0.7 d 0.7 e 1.6	色 褐色 胎 多い 角岩礫 石英 酸化鉄 焼 良	B_2 C_2タイプ 一凸 1.0•1.9/0.7 二凸 0.8•2.0	形状 略円形 a 5.2 b 5.1	縦刷毛ナデ 刷毛 15本／2cm 刷毛右廻り施紋 口縁上位ヨコナデ	上半横、斜刷毛ナデ 刷毛 12本／2cm 刷毛下→上下半縦、斜位指によるナデ	½欠 口縁部 A_1タイプ 底部 Aタイプ

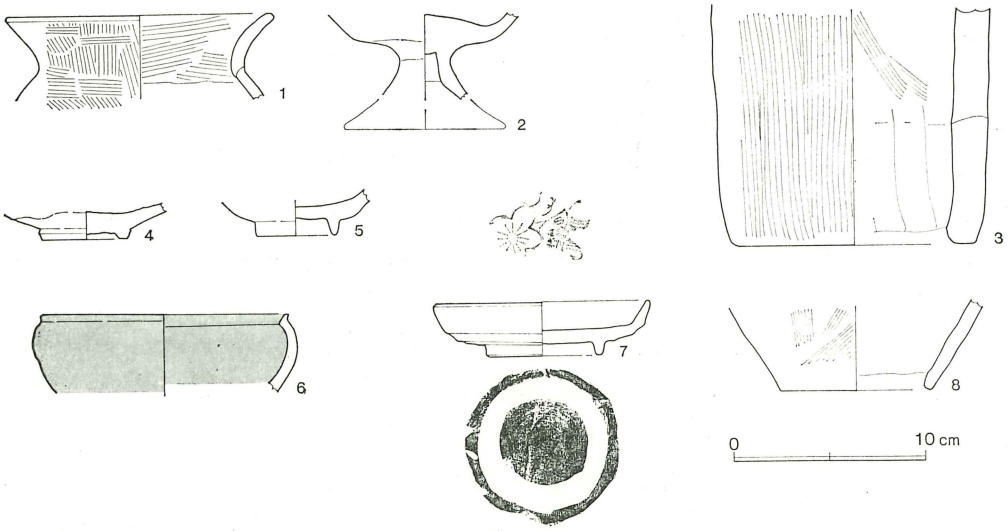


第88図　第１号溝跡実測図

(5)　溝状遺構

第１号溝跡（第88図）

調査区の全容は第８図の通り、ほぼ磁北を指向し、直線的に掘り込まれている。溝の断面形は略箱薬研を呈し、幅は2.2m、深さ1.0m（最深部）を測る。切り合い関係は、第２号古墳跡、第１号住居跡との間にあり、全て本跡が切っており新しい。遺物は比較的少ないが、いくつかのまとまりをもって分布する。垂直分布を見る限り西方からの流入が顕著である。出土遺物は古墳時代前期より近世代のものまで含まれているが、まとまりをもつ遺物分布箇所からは、埴輪片、古墳時代後期の甕、甑類の破片が集中することから大略この遺物の時期を廃絶期に当てて考えることにした。



第89図　第１号溝跡遺物実測図

第22表　第１号溝跡出土遺物（第89図）

器種	番号	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
甕	1	口径(1335)	口縁部は「く」の字に強く外反。口唇部は丸い。	内外面共刷毛ナデ。内面は横位外面は縦刷毛後部分的に横刷毛、刷毛単位は短かい。	⅔欠　暗茶褐色　胎土角岩礫含。
高　坏	2		体部下端に強い稜をもち立ち上がる。坏部は裾部の広い円垂状。	外面はヘラミガキ、脚部内面は横ヘラケズリ。	¼欠　橙褐色、胎土　良。
普通円筒埴輪	3	底　径12.8	開きは小さく直線的に立ち上がる。器壁は2.0cm	内外面刷毛縦ナデ、刷毛幅７本12cm、内面下半は縦位指ナデ。	⅕欠　淡橙褐色、胎土角岩礫、焼成良
瀬戸皿	4	高台径 4.5	低い、断面台形の高台、浅く低い皿部。	ロクロ整形、内面および外面口縁、上半灰釉。	坏部欠、灰褐色、胎土良
青磁椀	5	高台径 4.2	断面台形、端部丸い高台、体部は半球状。	台部端を除く全面薄い青磁を塗彩。	坏部上半欠青灰褐色。
坏	5	口径(13.2)	体部は半球状、口縁部は内傾し端部で外傾、口縁部内稜。	内外丁寧なヘラミガキ、赤色塗彩。	⅗欠　暗赤褐色、胎土良
瀬戸皿	7	口径　11.4 台部径 5.0 器高　2.8	皿部は浅く、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。台部は垂直に貼付。	ロクロ整形、皿部内面に６葉の草花の描絵。	口縁部⅕欠灰褐色、胎土良。
甑	8	底径（8.0）	穿孔は焼成前一孔。	外面刷毛ナデ、内面ナデ調整。	⅔欠

2　歴史時代以降の遺構と遺物

1　井戸跡（第90～95図）

調査区全体で17基が検出された。その分布は第２、３号周溝墓周辺に集中し、周溝の溝中に位置するものも少なくない。また、覆土は大略黒褐色土であり、周溝覆土に酷似しており、確認は井戸跡の下半である場合が多い。出土遺物の多くは、焙烙の破片で図示可能なものは第３、８井戸跡出土の資料に過ぎない。

第１号井戸跡（49—F）開口部は径2.4ｍの円形、底径90㎝、深さ1.95ｍを測る。断面形は開口部から90㎝の深さまでロート状にそこから円筒状に掘り込まれていたものと思われるが、中間に位置する砂礫層の崩落により大きくえぐられている。出土遺物はない。

第２号井戸跡（49—F）開口部径東西2.0ｍ、南北1.92ｍの略円形プラン、底径65㎝、深さ2.20ｍを測る。断面形は開口部から50㎝までがロート状、それ以下は本来円筒状に底まで掘り込まれていたものと考えられるが、中間の砂礫層は貫流する地下水により崩落し大きくふくらむ。出土遺物は検出されなかった。

第３号井戸跡（48—D）開口部東西径2.40ｍ、南北2.60ｍの略円形プランである。底径は61㎝、深さ1.30ｍを測る。開口部から90㎝までロート状、以下円状を呈してフラットな底に至る。遺物は皆無である。

第４号井戸跡（78—D、E）上半は第２号周溝と同質の黒褐色土のため未確認であるが、下半は円筒状を呈し１ｍを測る。確認プランは円形。覆土は第１、２層は黒褐色土、第３層　ローム混入の明褐色土。遺物は皆無である。

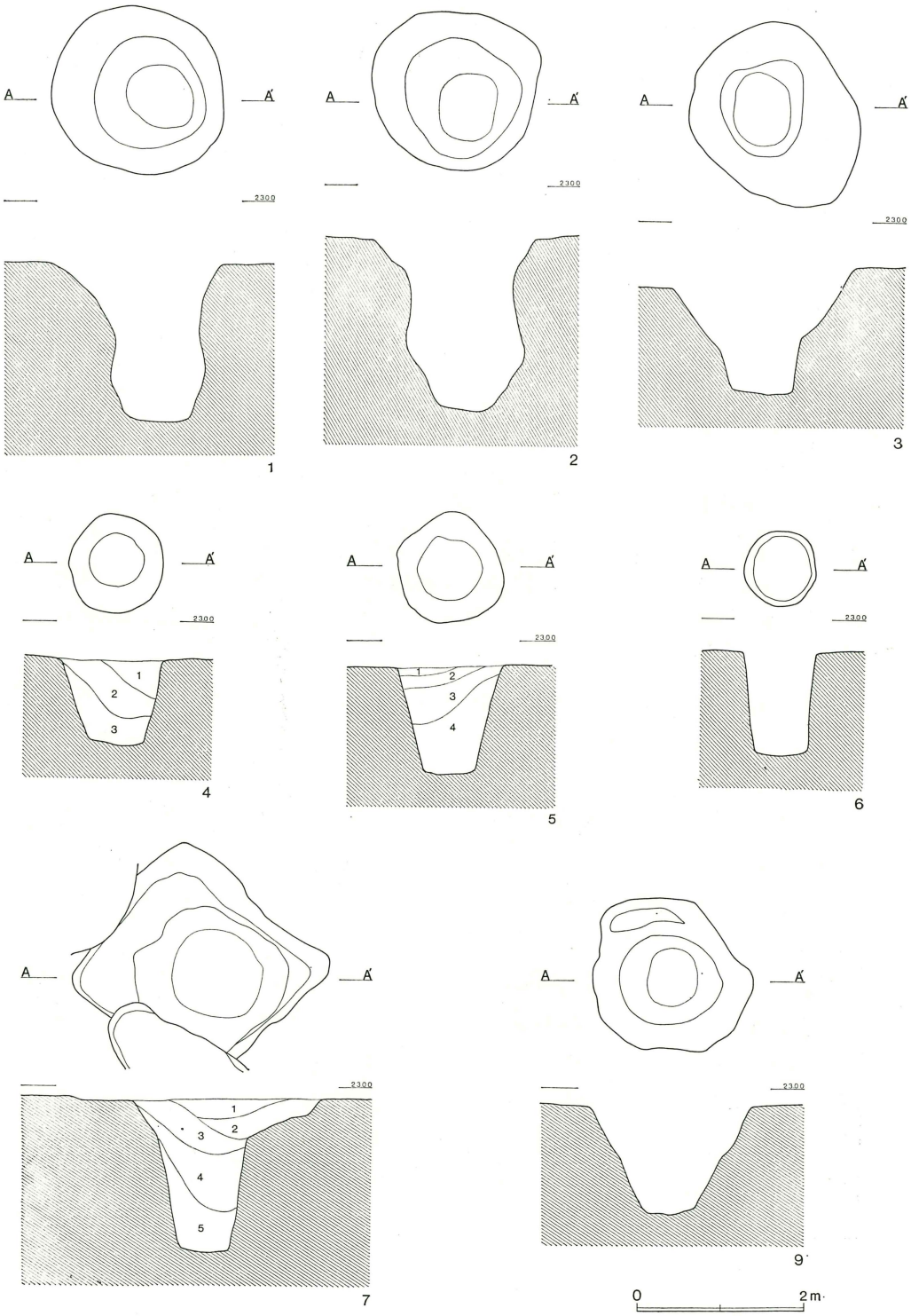
第５号井戸跡（77—C）第２号周溝墓の北側周溝内で検出。確認プランは略円形で径1.20ｍを測る。底部へは緩やかにすぼまり底径78㎝を測る。覆土は４層に区分できる。第１層　黒褐色土。第２層　黒色土。第３層　黒色土　第４層　暗褐色土である。遺物は４層中より多量の焙烙片が出土したが図示可能なものはない。

第６号井戸跡（76—B）第２号周溝墓北西コーナ付近で検出。確認プランは円形で径0.84ｍを測る。掘り込みは円筒状で深さ1.25ｍを測る。底部はフラットで0.72ｍを測る。出土遺物はない。

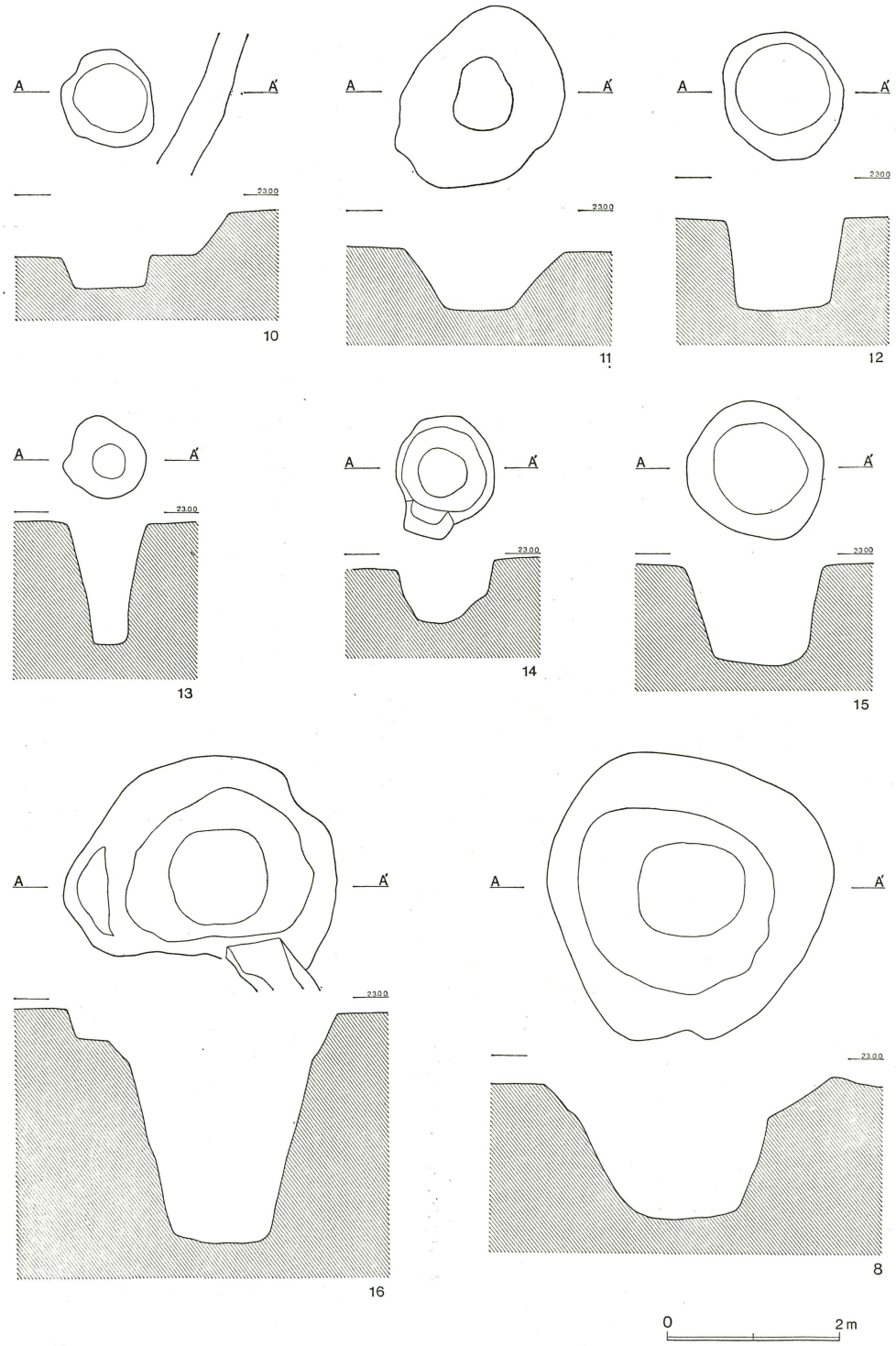
第７号井戸跡（74—E）第104号土壙を切って存在する。プランは東西2.40㎝、南北2.20ｍの方形を呈し、20㎝下は1.80ｍの円形プラン、深さは1.80ｍ、底径0.82ｍを測る。覆土は５分割が可能である。第１、２層は黒褐色土　第３、４層　黒色土　第５層褐色土である。出土遺物は焙焙に限られ、内耳、外耳等多数出土している。（遺物説明は第22表参照）

第８号井戸跡（70、71—E）第３号周溝墓北側溝中より検出。確認プランは3.30ｍの略円形プランである。深さ現高1.60ｍ（推定2.40ｍ）、底径1.20ｍを測る。上半はロート状に、下半は円筒状を呈し、底部はフラットな作りである。出土遺物は、焙焙片を多量に混入するが、底部に接して板碑が出土している。（第23図および観察表参照）

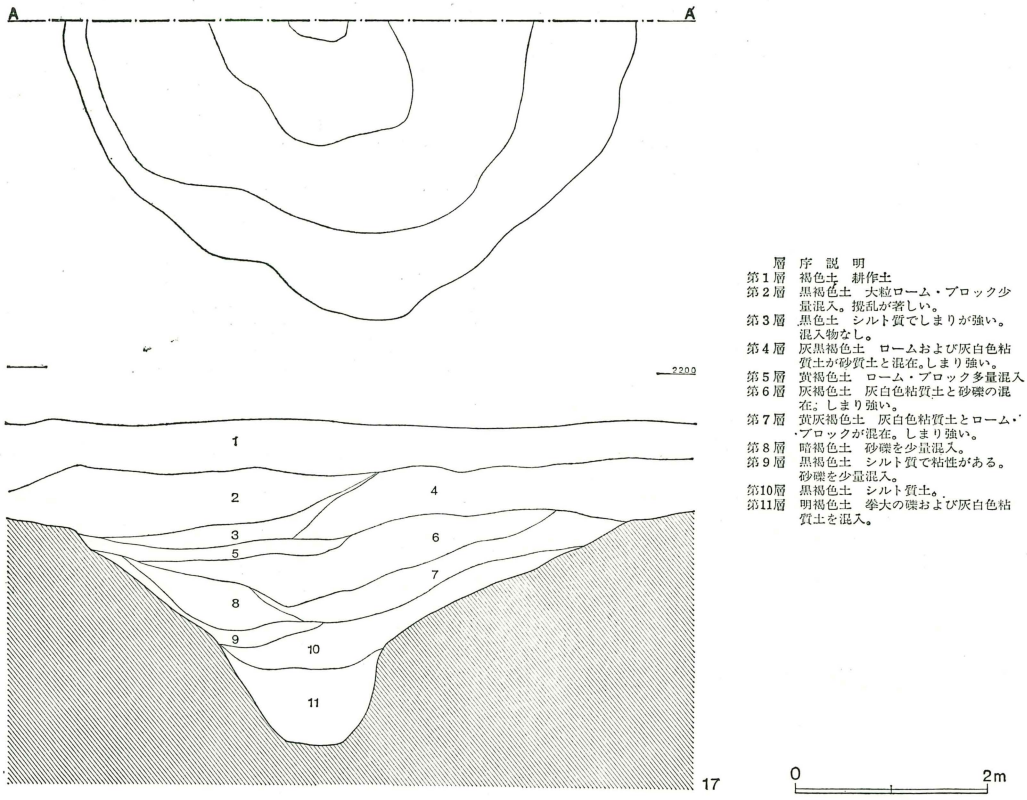
第９号井戸跡（73—D、E）第３号周溝墓の内区で検出。プランは略円形。東西2.0ｍ南北1.80ｍ



第90図　井戸跡実測図(1)



第91図　井戸跡実測図(2)



第92図　第17号井戸跡実測図

深さ1.40ｍを測る。上半はロート状、下半は台形状に掘り込む。底面はフラットである。出土遺物はない。

第10号井戸跡（73—D）第３号周溝墓西側溝中央で検出。確認プランは略円形、径1.10ｍ、底径0.84ｍ、深さ0.40ｍ（復元深度1.20ｍ）を測る。掘り込みは円筒状、底面はフラットである。出土遺物は多量の焙烙片である。

第11号井戸跡（78—A）第２号周溝墓西側溝中で検出。確認プランは円形、規模は東西1.70ｍ、南北2.20ｍ、底径は0.80ｍの不整円形、深さ0.64ｍを測る。掘り込みは逆台形状である。出土遺物は皆無。

第12号井戸跡（75—E、F）第３号周溝塞内区で検出。開口部プランは円形、規模は開口部形14.0ｍ、底部径1.10ｍ、深さ1.05ｍ、掘り込みは円筒状である。遺物は皆無。

第13号井戸跡（69、70—E）第３号井戸跡E第号井戸跡北側の立ち上がり部分で検出。開口部プランは略円形、規模は開口部径0.95ｍ、底部径0.38ｍ、深さ1.45ｍ、断面形は逆台形を呈する。底面はフラットである。遺物は最下位で焙烙片で少量出土。

第14号井戸跡（69、70—F）第３号周溝墓の北側で検出。開口部のプランは円形、規模は開口部径1.16ｍ、底部径0.60ｍ、深さ0.60ｍを測る。断面形は擂鉢状で、底面は丸く形状は不整である。遺物の検出はない。

第15号井戸跡（28—M）第８号古墳跡の西側３ｍで検出。開口部プランは整った円形、規模はロ

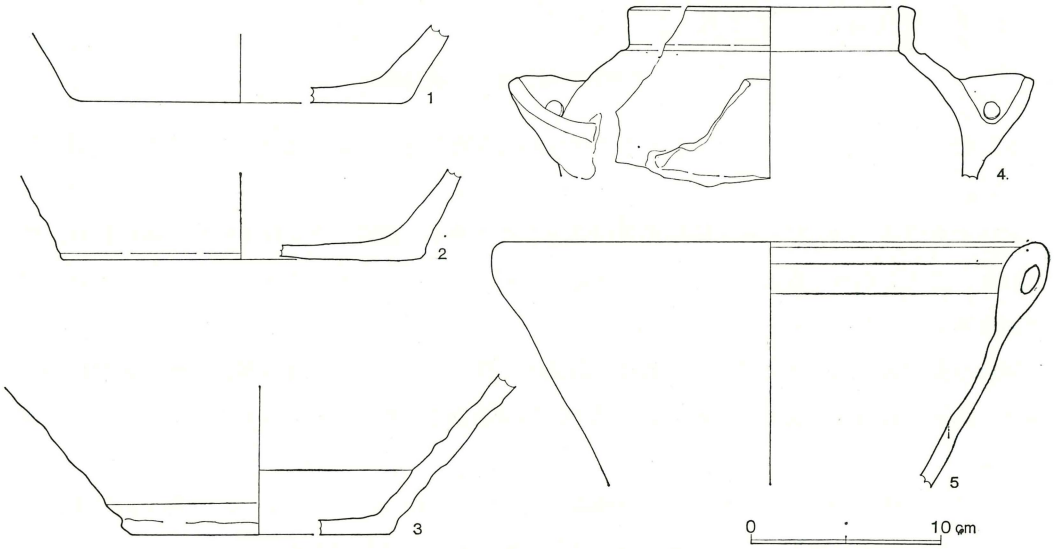
部径1.60m、底部径1.10m、深さ1.15mを測る。断面形は逆台形、底面はフラットである。遺物は、焙烙の内耳鍋少量が出土した。現在でも湧水は豊富である。

第16号井戸跡（78、79—A）第2号周溝墓の西側で検出。この周囲は、76グリッド列により段状に80cmほどは起伏がある。遺物は上半で焙烙片が少量出土したに過ぎない。

第17号井戸跡（63～66—A）群在する土壙の中央に位置するが、ほぼ半分が路線外に含まれると思われる。

開口部プランは略円形、規模は径6.1m、底部径0.7m、深さ2.20mを測る。掘り込みの形状は掘り込まれており平坦な部分が続いている。井戸跡はこの平坦部の中央に位置するものと考えられるが調査区外に含まれるため全体を窺い知ることはできない。平坦部の井戸周辺は堅くしまっており土間あるいは常時仕事場として使用された場所であることは間違いなかろう。

井戸跡開口部のプランは不整円形、開口部は径東西2.15m、南北3.20m、底部径1.20m、深さ2.65mを測る。断面形は開口部から60mほどがロート状に、その下は逆台形に掘られている。底面1.40mの深さまで傾斜角の緩いロート状、下半は急にすぼまり、底部は比較的な小さな規模となる覆土の堆積状況は、分層が容易なほど異質な土砂が交互に堆積することからやや長期にわたる埋没が考えられる。出土遺物は、拳大の小石が大量に混入しており、緑泥片岩も少量認められる。時期決定可能な遺は焙烙片が少量出土したに過ぎない。



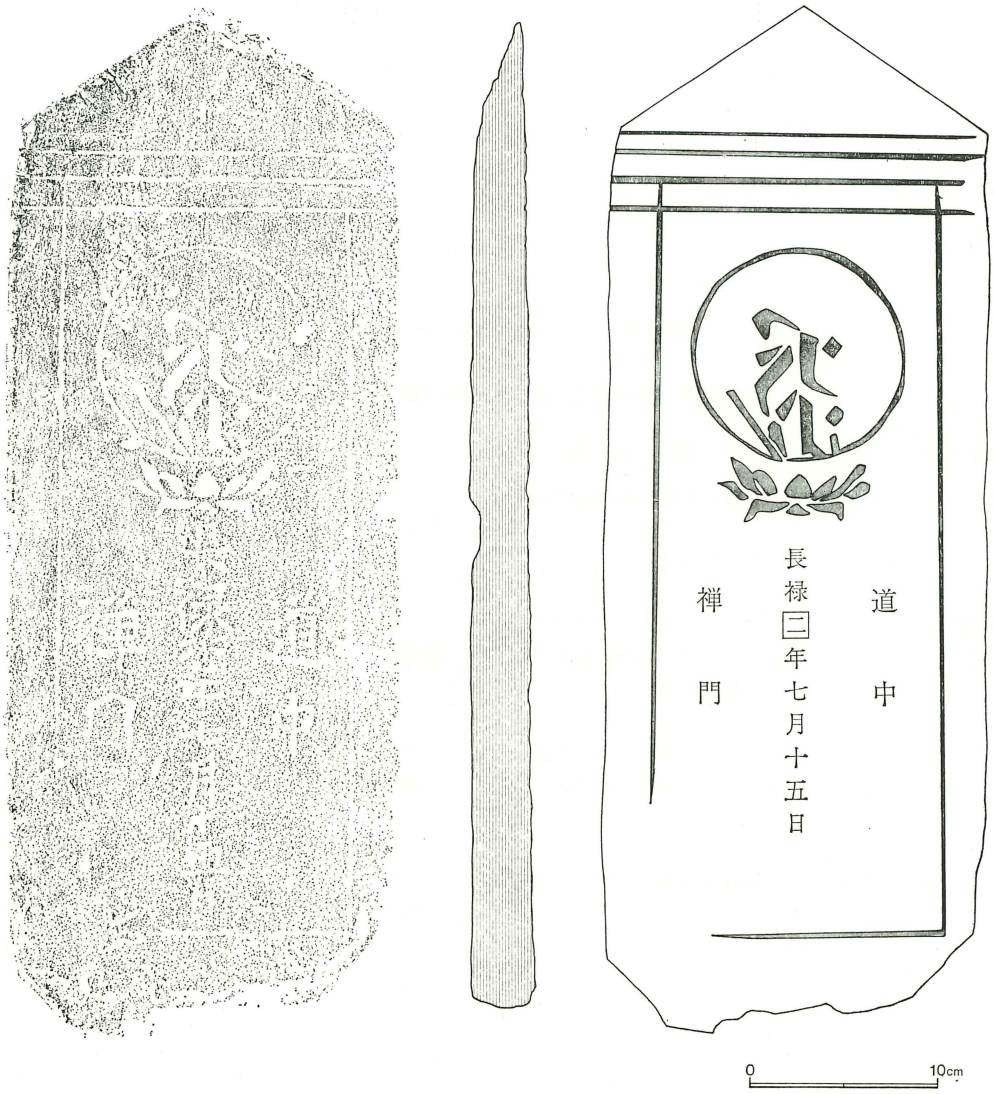
第93図　第3号井戸跡出土遺物実測図

第3号井戸跡出土遺物（第93図）

全て覆土の最下位で出土したが、器形全体を窺えるものはない。出土遺物は内・外耳の鍋である

1～3・5は内耳鍋の底部で、½～⅓ほどの破片である。1・2は底径18cm前後、3は13.6cmを測るが、1・2は浅め、3・5はやや深めの作りである。器壁は5を除いて厚く、粘土帯の接合痕を明瞭に残すものが多い。胎土は精撰されたものを用い、焼成も良い。色調は総じて暗灰褐色である。

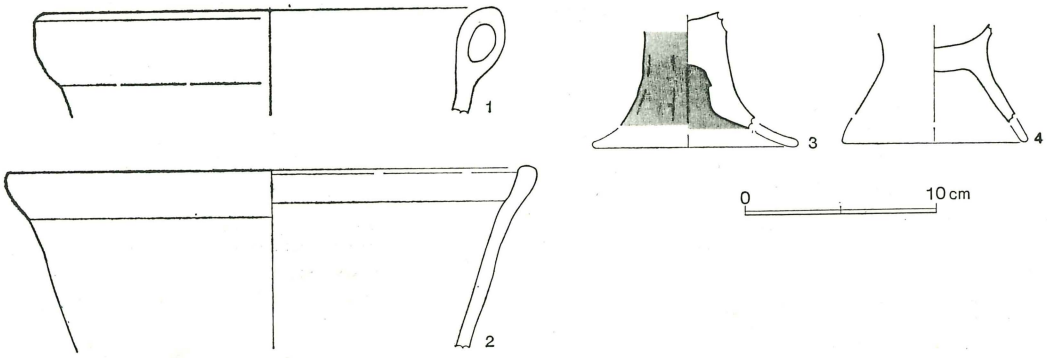
4は外耳釜の大形破片で、実測値の⅓ほどの残である。体部下半を欠く。口縁部は直立、口径15㎝を測る。体部をもち、最大径を有する胴部中位に、13×7㎝、高さ5㎝の台形状の耳を貼り付けている。この耳に径1㎝の孔を垂直に穿っている。色調は褐色。胎土、焼成共に良好である。



第94図　第8号井戸跡出土板碑実測図

第8号井戸跡出土板碑（第94図）

現高51.8㎝、幅20.4㎝、厚さ3.2㎝を計る。表面は、山形部の下に4条の線刻がみられる。内、上位の2条は二条線、下位の2条は長方形に全体を区画する線刻と一体をなし鳥居を表現する。種子は主尊の阿弾陀、月輪、蓮台が確認される。偈の部分は、左に「禅門」、右に「道中」の文字が、中央には「長禄二年七月十五日」の記年銘が認められる。材質は緑泥片岩。



第95図　第８号井戸跡出土遺物実測図

第23表　第８号井戸跡出土遺物（第95図）観察表

器種	番号	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
焙烙内耳鍋	1	口径　24.5	体部の立ち上がりは急、口縁は丸みをもって立つ。かけ口は３孔断面は長楕円。	口縁部はヨコナデ、体部はナデ整形。	1/3欠　暗灰褐色　胎土微砂多含
焙烙内耳　鍋	2	口径(27.5)	かけ口は欠失。口縁部は丸みをもって立つ。体部直線的。深い作り。器壁は薄い。	口縁部はヨコナデ。体部はナデ整形。	3/5欠　暗灰褐色　胎土微砂多含
高　坏	3		脚部は急激に立つ。裾部は広く低く開く。器壁は肥厚。	外面は丁寧なヘラミガキ、内面は横位のヘラケズリ、内外面赤色塗彩。	裾部欠　暗赤褐色　胎土焼成　良好
台付甕	4		脚部は直線的に開く。器壁はやや肥厚。	外面は箆によるナデ後、部分的なナデ。内面ナデ調整。	台部端欠　暗褐色　胎土砂粒多量混入

(2)　土　壙（第96～113図）

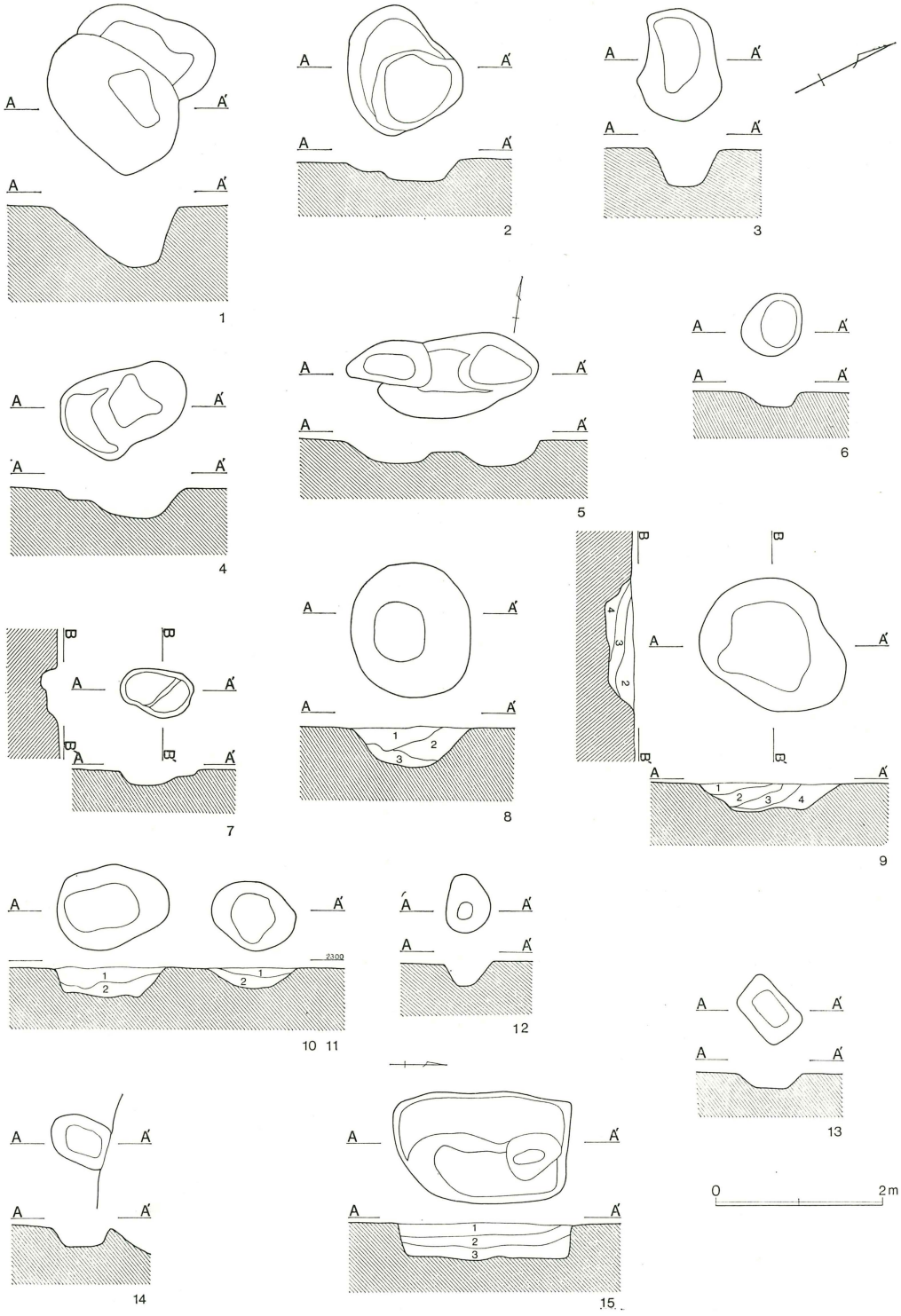
検出した土壙の総数は243基をかぞえる。分布の密度は様々であるが、空白となる箇所はなくほぼ調査区全域にわたって検出された。特に集中する部分はA区74～88グリット列の間、B区48～60グリット列の間で、全体の½がこの空間に群集していることになる。この様な傾向は、溝、畦状遺構、井戸跡などにも同様なことが指摘できるばかりでなく、土壙の群集する空間とオーバーラップして占地することは単なる偶然とは思えない。さらに、A区についていえば、他の遺構の遺存の悪さは先にも述べたが、多くのピット状の落ち込みが確認されている。当初、住居跡のピットではないかと考えたが、該当するものは南に認められるものの、北側に属するものは明らかに異質な配置

を示していた。これらは、当然土壙群、畦状遺構と有機的なつながりをもつものと考えられる。

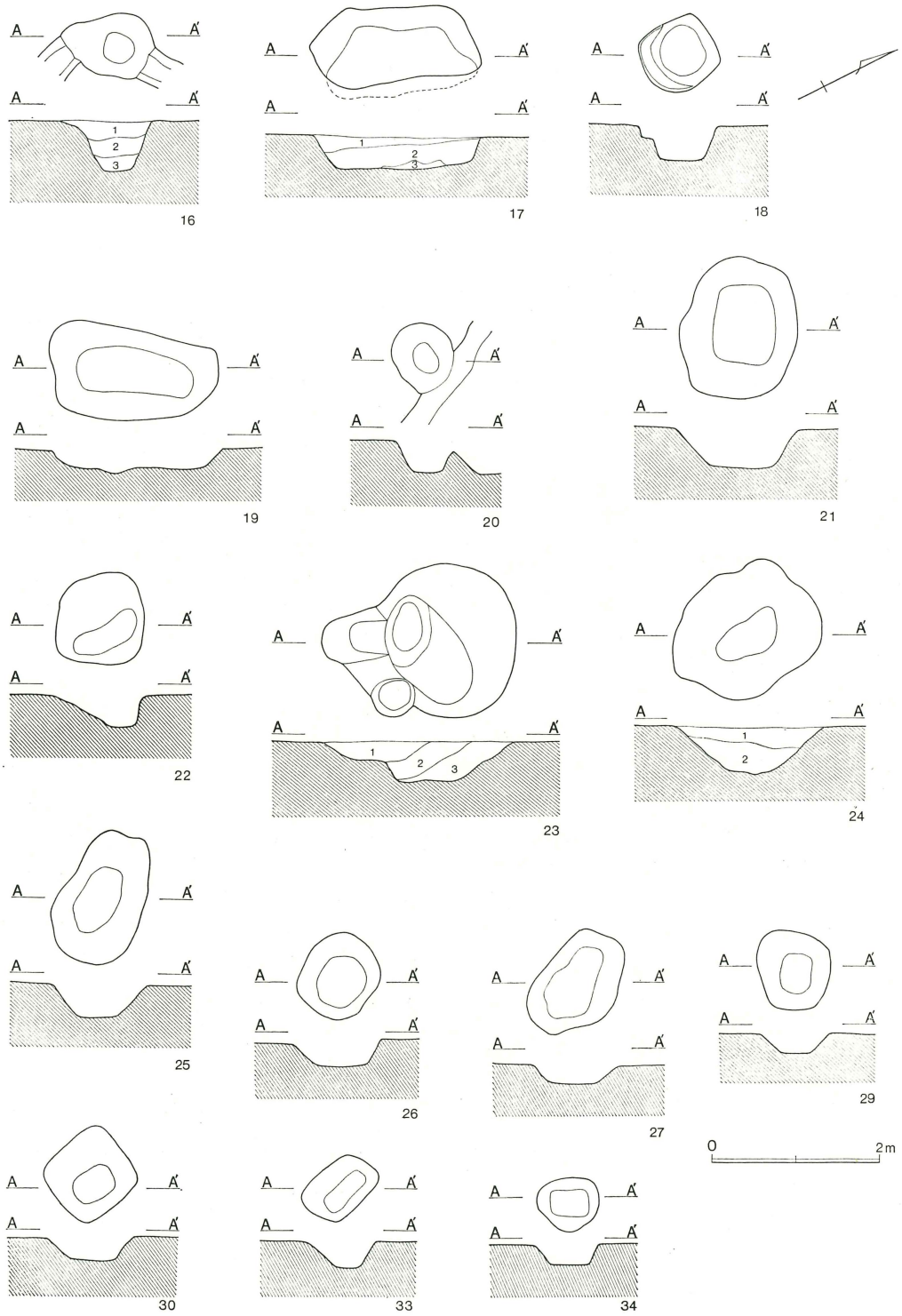
所産時期が明らかで、しかも性格が明らかなものは、1、266号土壙の6世紀の比較的古い段階のものである。時期的に新しいものでも遺物および出土状態がしっかりしたものは極めて少ない。

土壙から出土した遺物の時間幅は、上限が古墳時代後期、下限は近世まで各時代にわたって認められるが、古墳時代に属するものは僅かである。

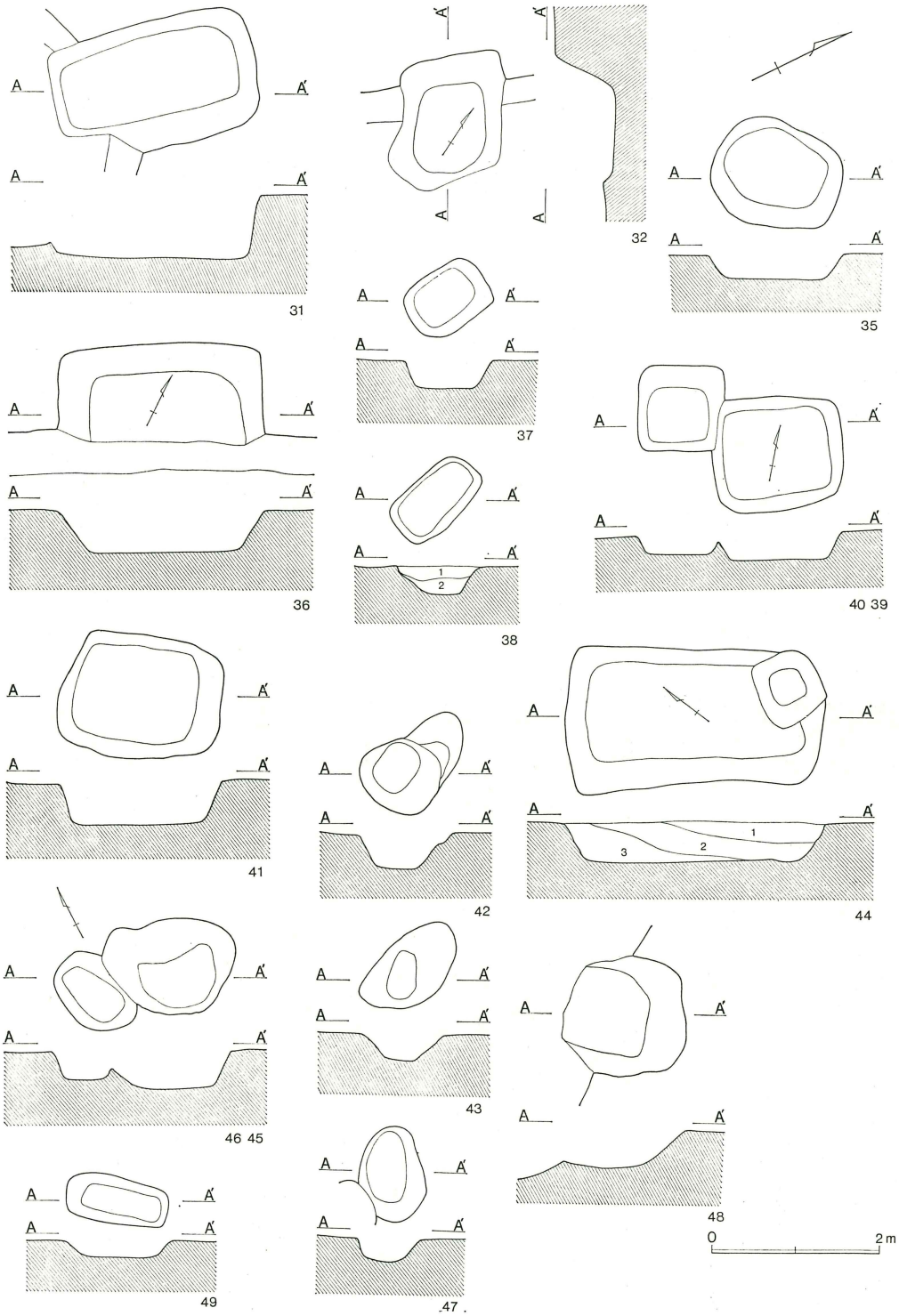
覆土は大略単一層であり、特に層序説明を加えたもの以外は例外なくローム・ブロック（量の多少はあるが）を含む褐色土系の土を充塡している。なお、主軸方位（長方形、楕円形プランに属するもの）、規模、形状については別表を参照されたい。



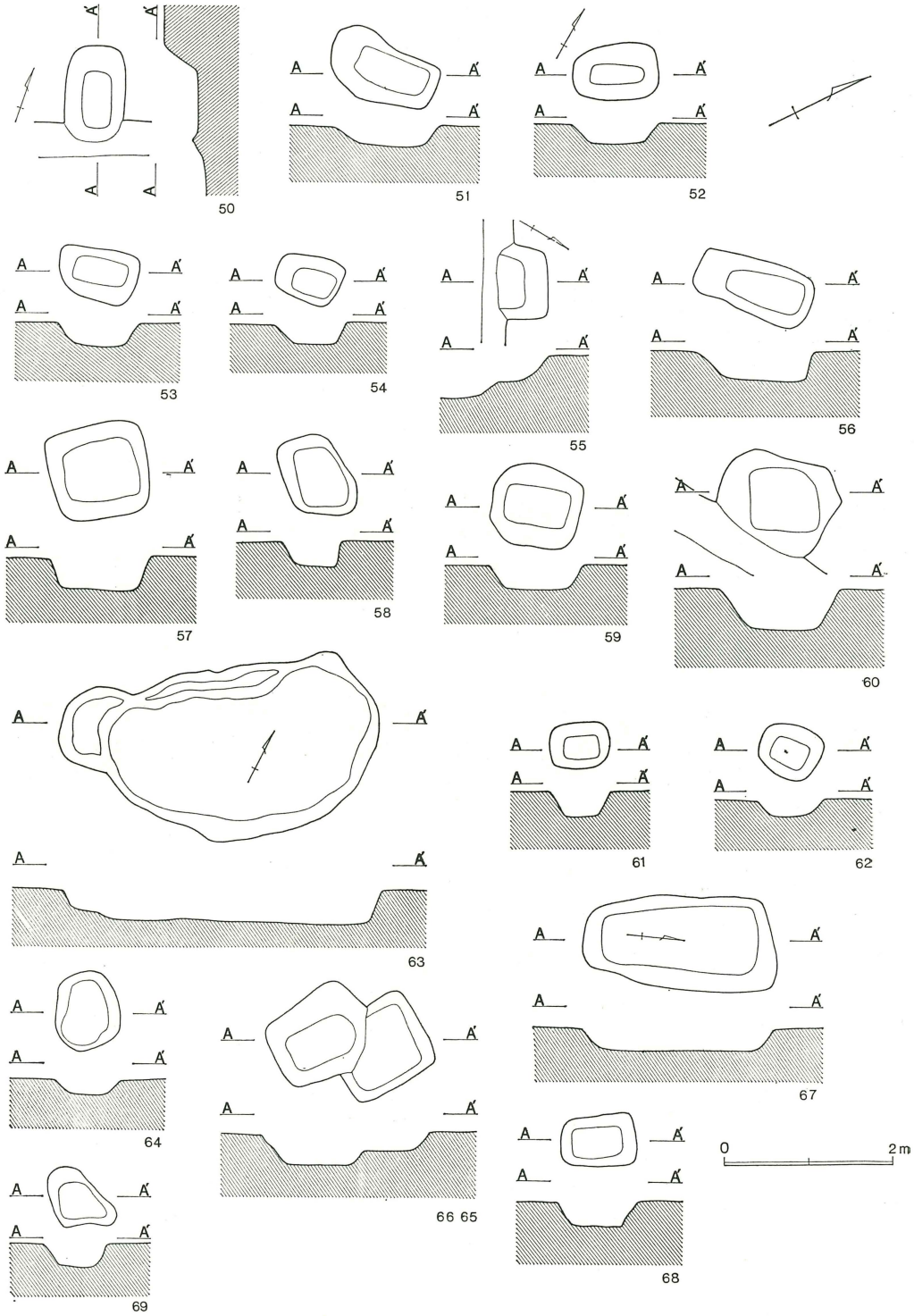
第96図　土壙実測図(1)



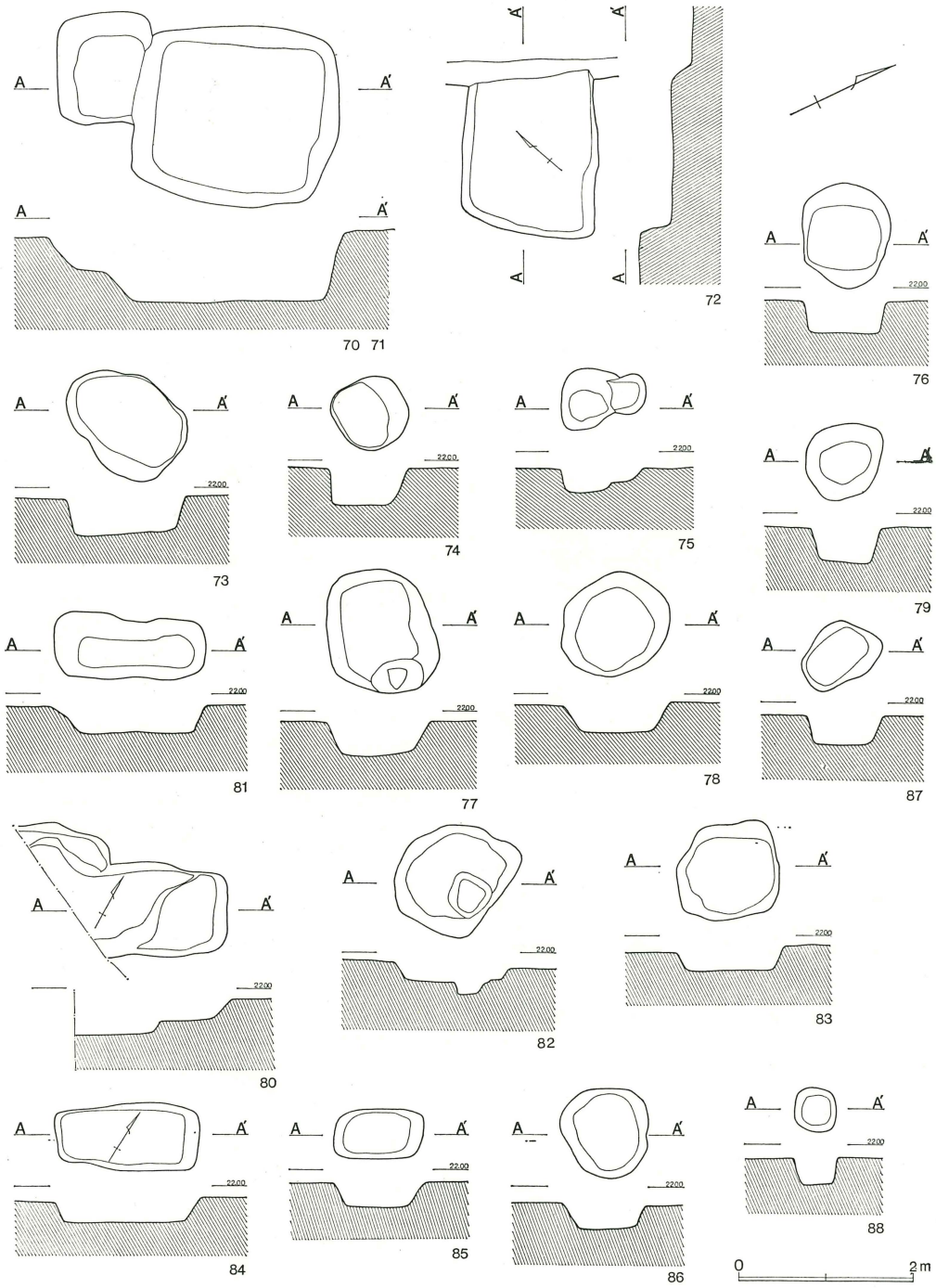
第97図　土壙実測図(2)



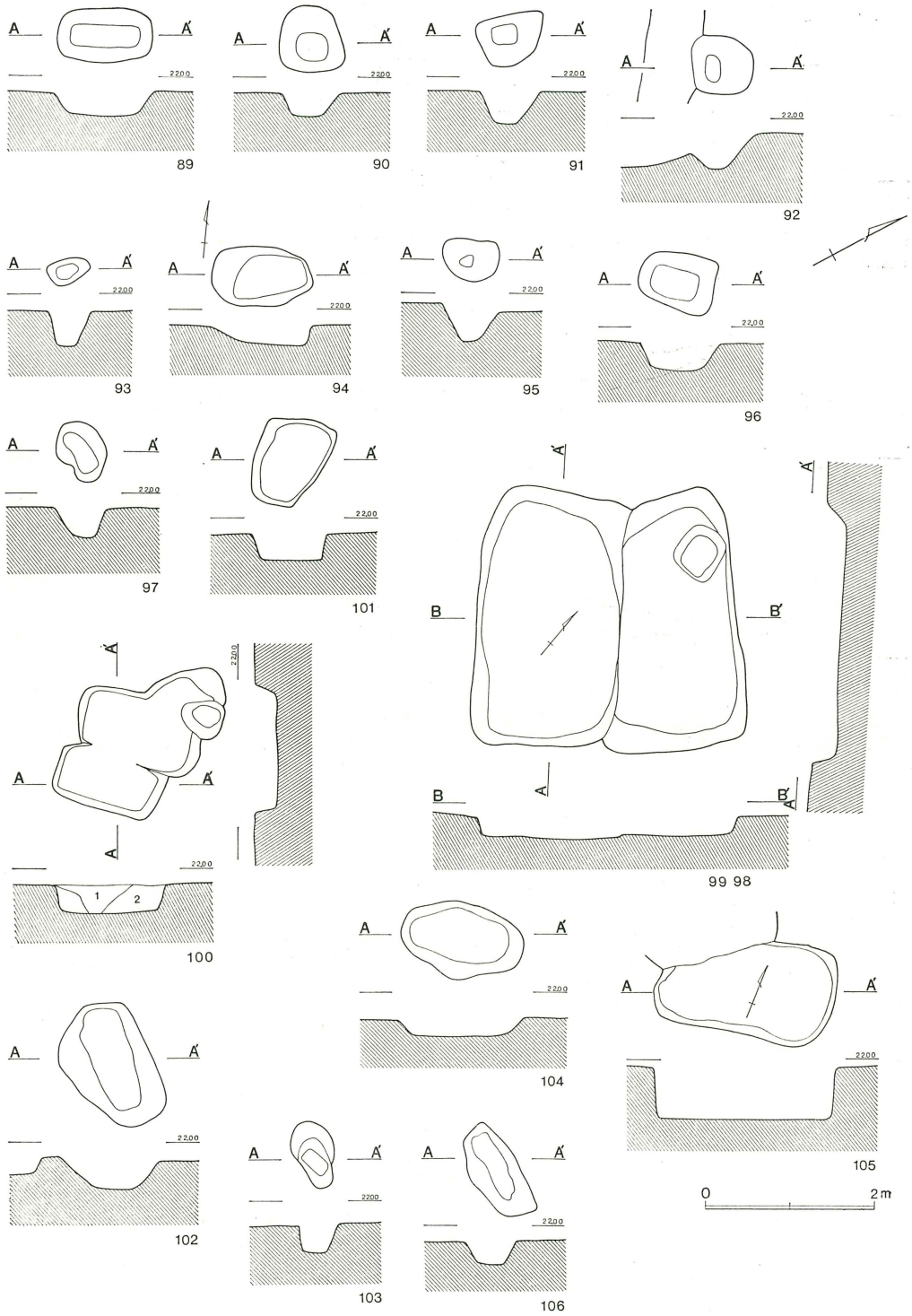
第98図　土壙実測図(3)



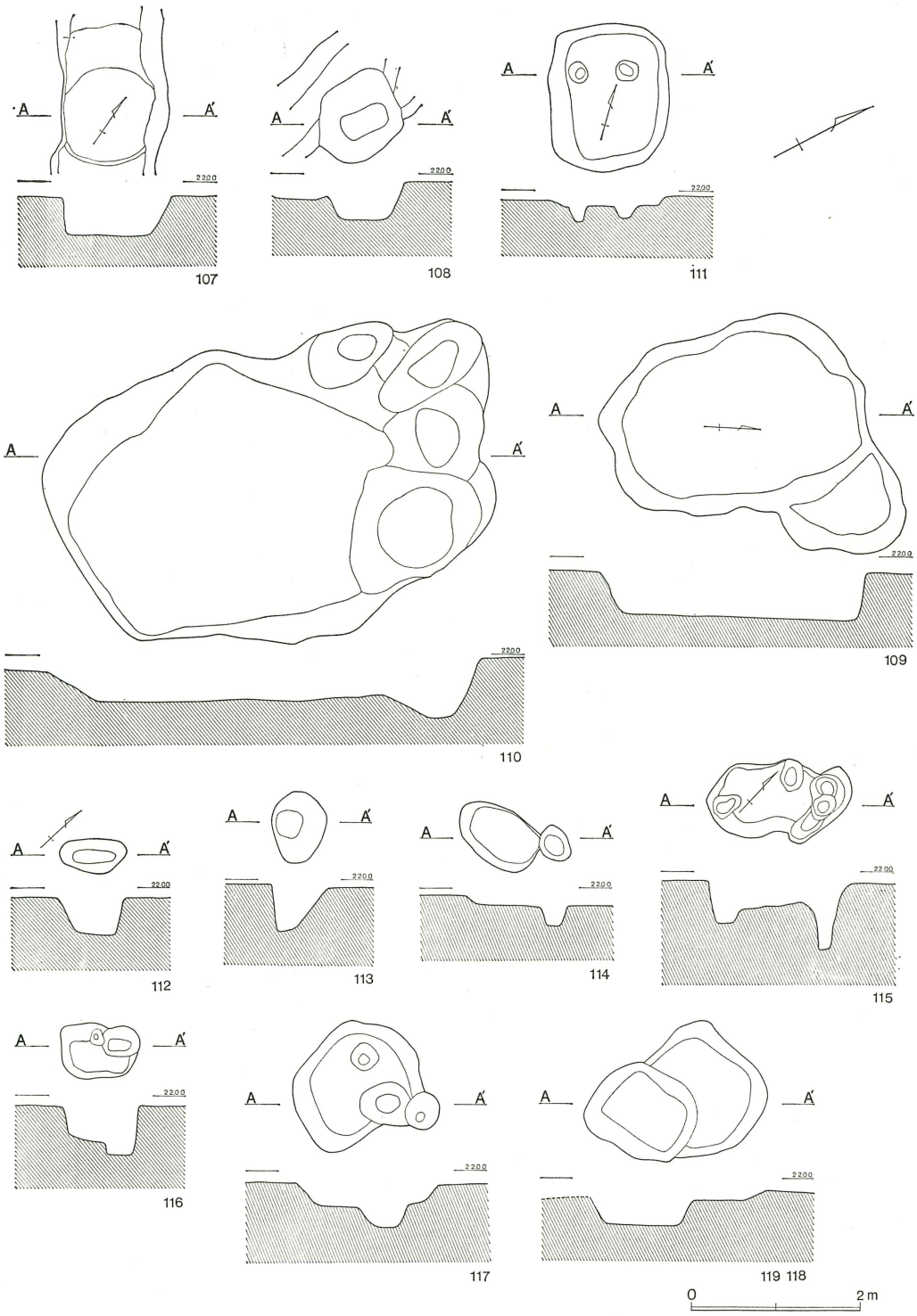
第99図　土壙実測図(4)



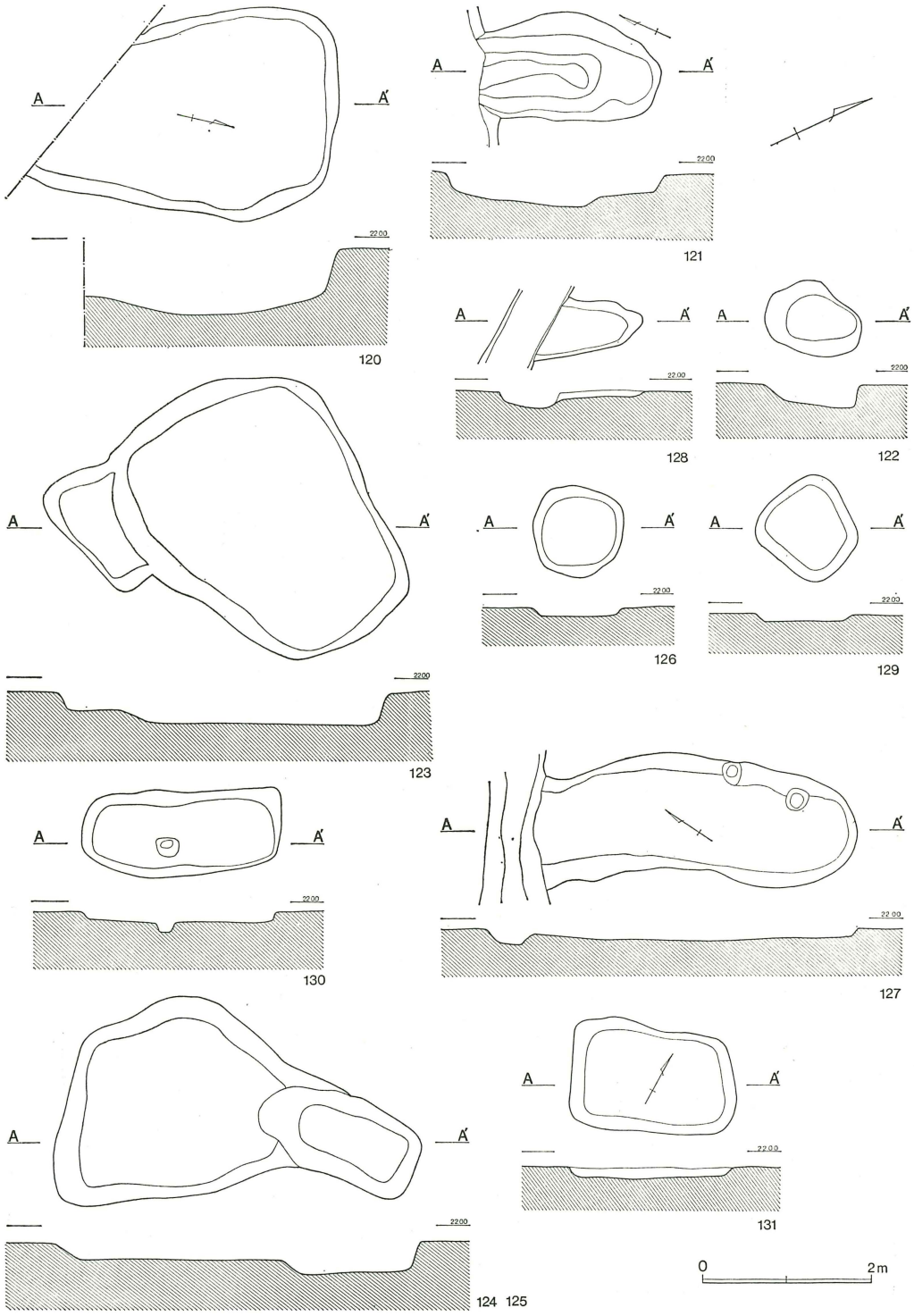
第100図　土壙実測図(5)



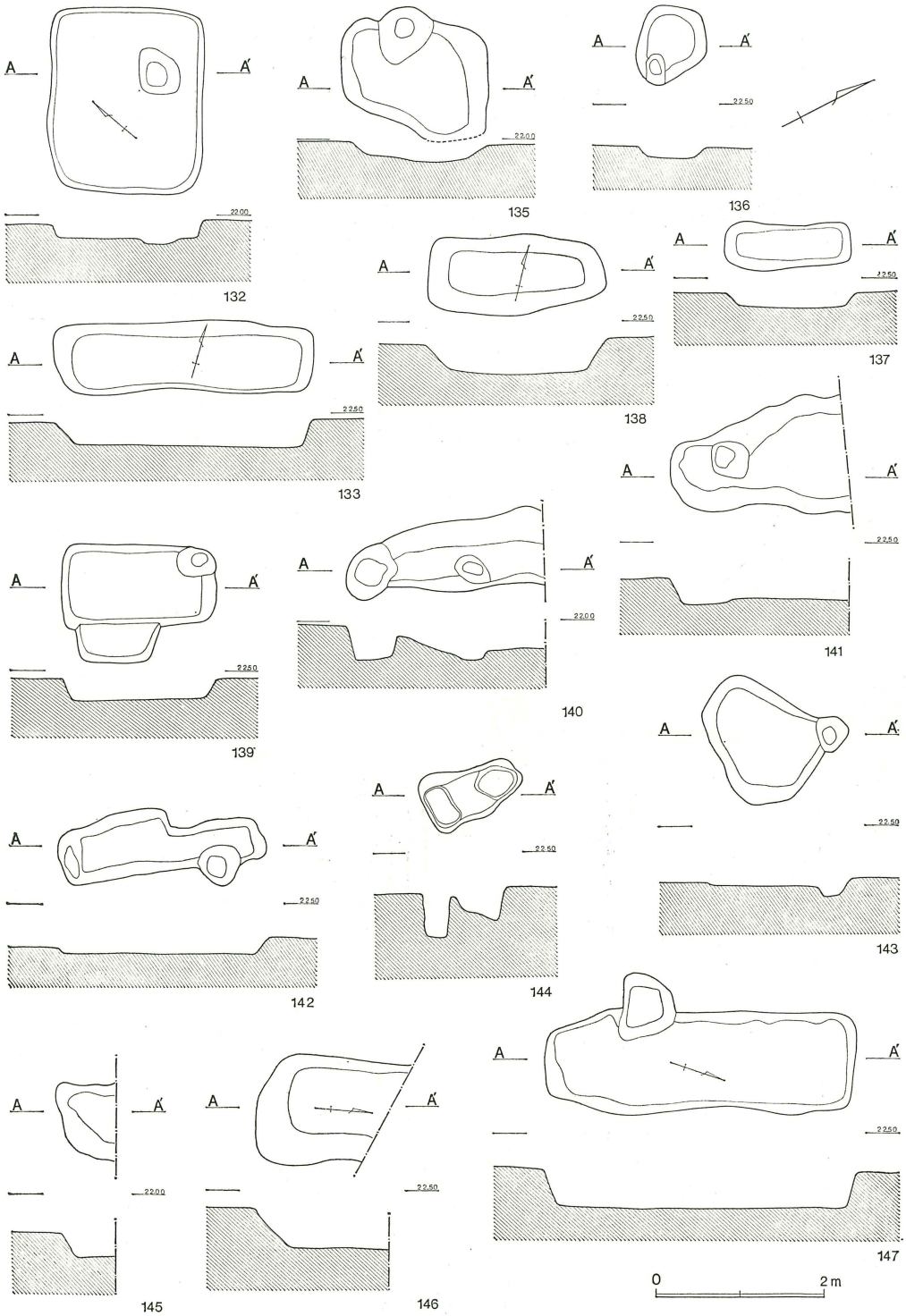
第101図　土壙実測図(6)



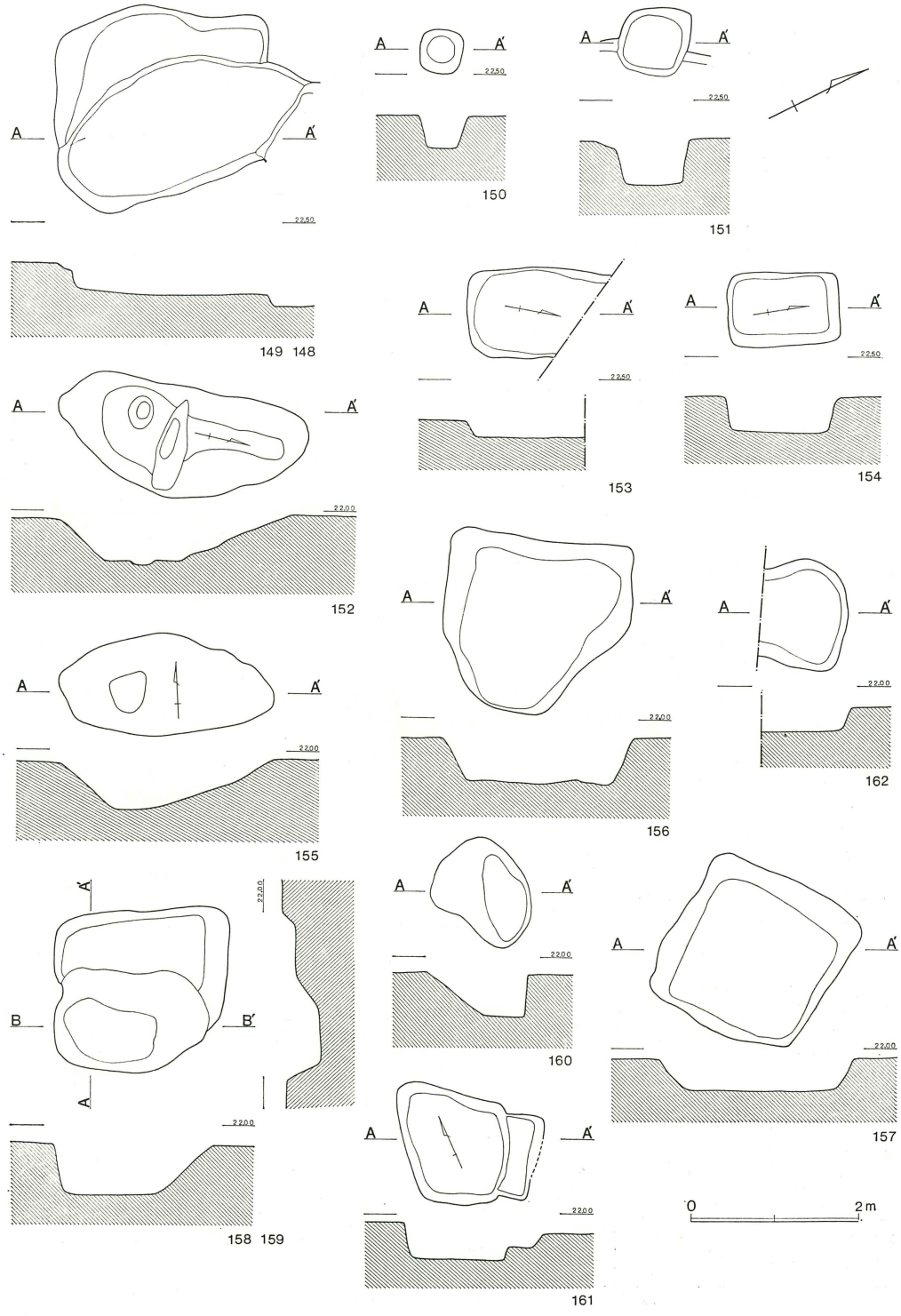
第102図　土壙実測図(7)



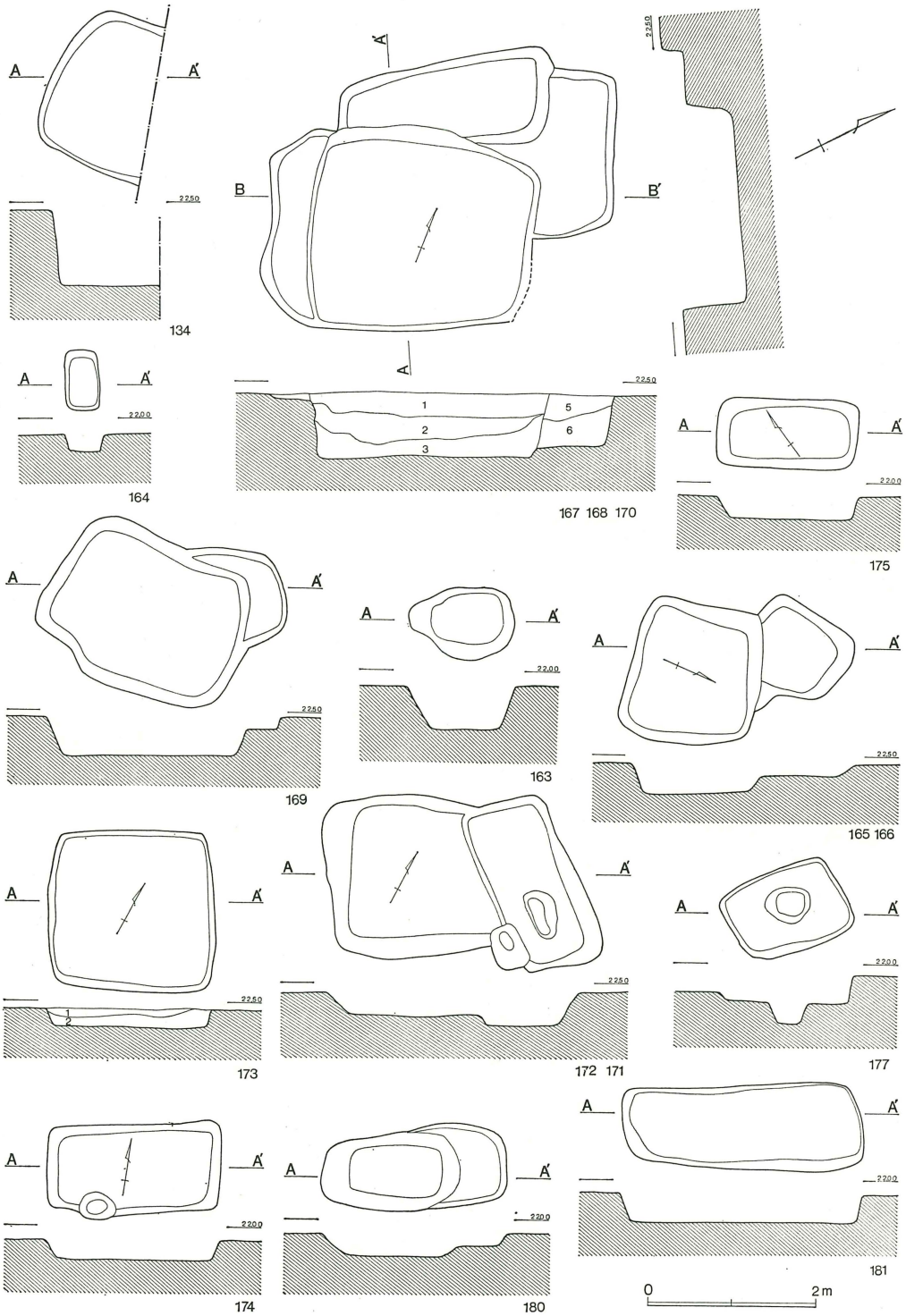
第103図　土壙実測図(8)



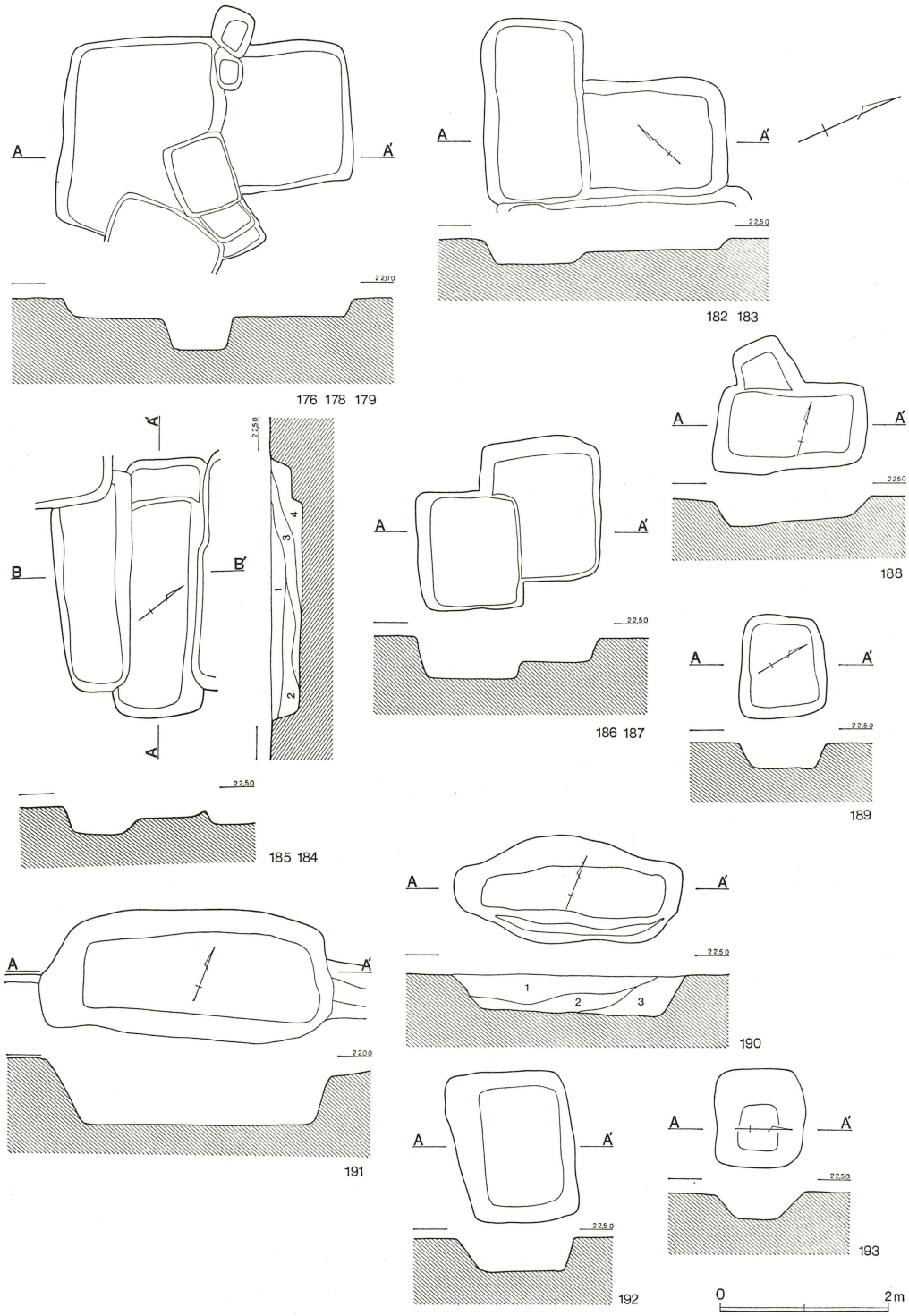
第104図　土壙実測図(9)



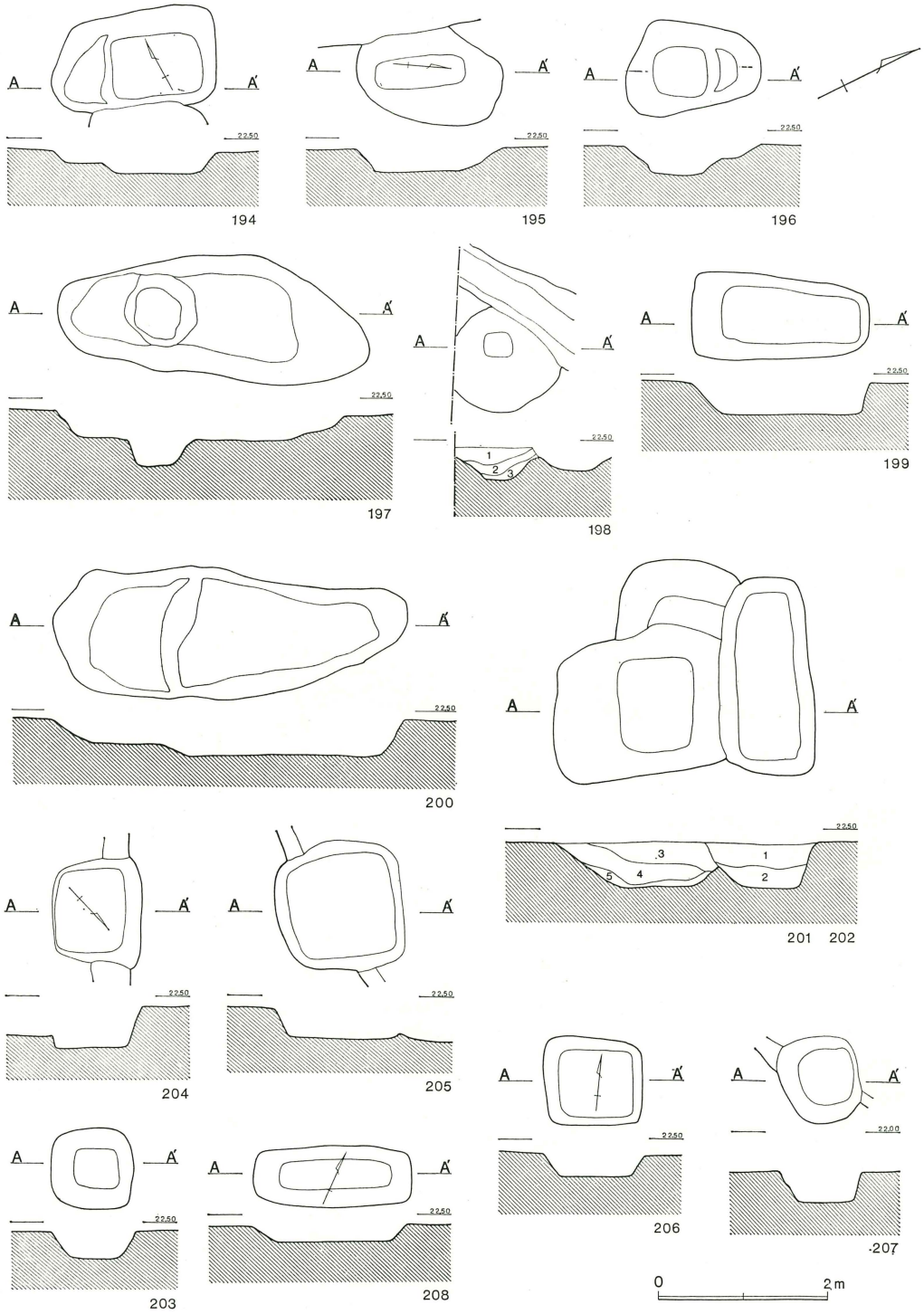
第105図　土壙実測図(10)



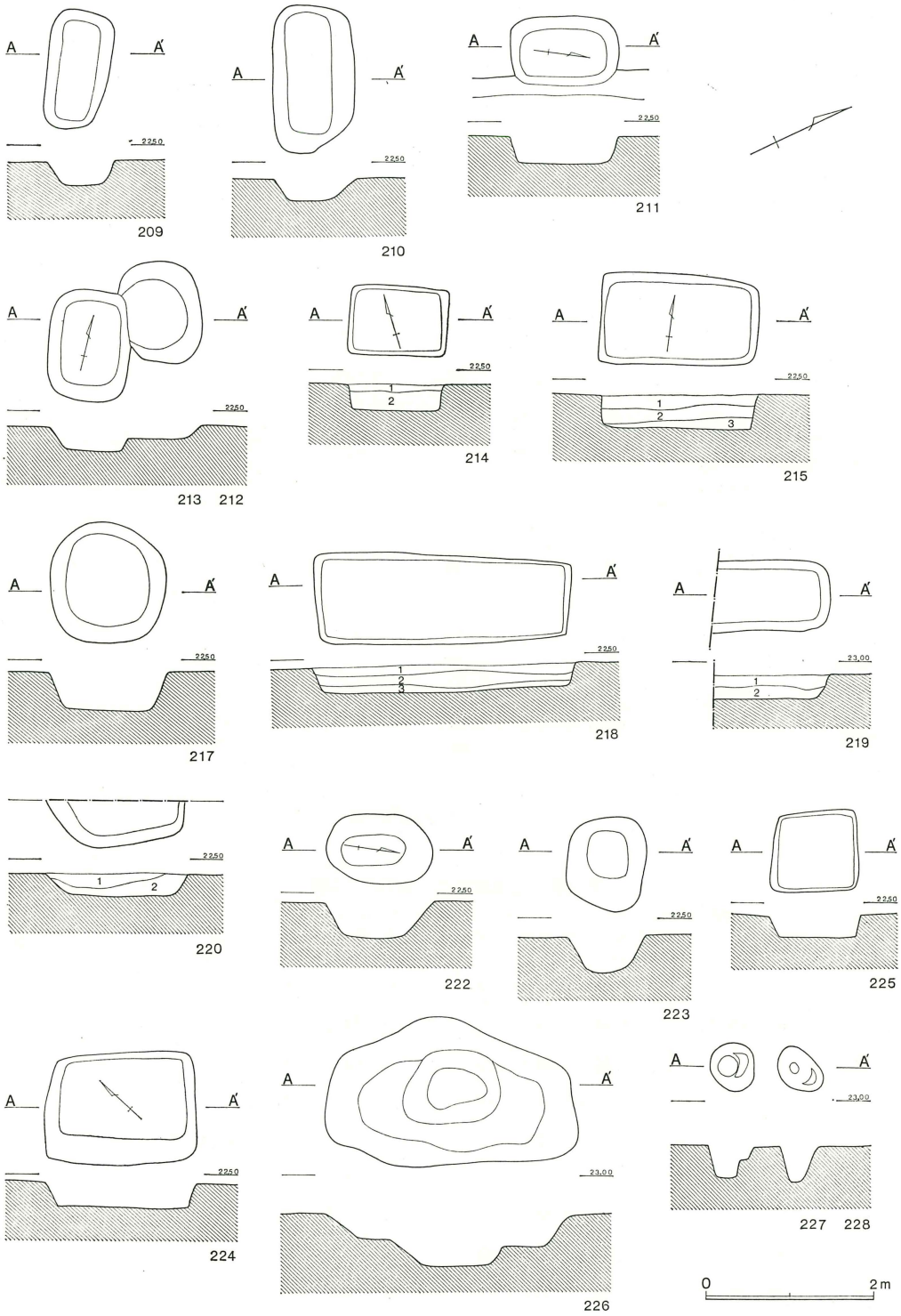
第105図　土壙実測図(11)



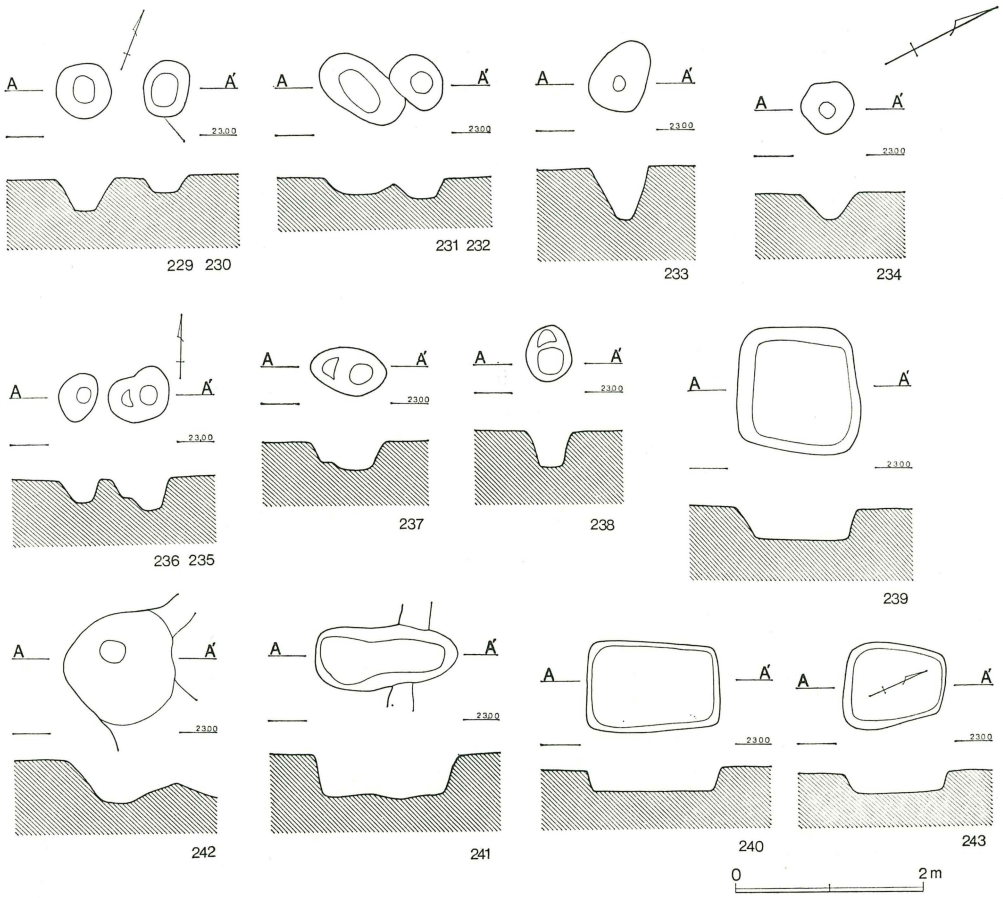
第107図　土壙実測図(12)



第108図　土壙実測図(13)



第109図　土壙実測図(14)



第110図　土壙実測図(15)

第24表　土壙観察表（第96～110表）

ナンバー	形　　状	東西・南北・深度(単位m)	主(長)軸方位	備　　考
1	楕　円	1.82×1.28×0.73	N—79.5°—E	
2	不整（楕円）	1.48×1.38×0.25	N—87.5°—W	
3	〃	1.30×1.08×0.45	N—58.5°—W	
4	〃	1.03×1.57×0.35	N— 8° —E	
5	〃	1.02×1.57×0.32	N—72.5°—E	内耳鍋片
6	〃	0.67×0.82×0.18	N— 62° —W	
7	〃	0.83×0.86×0.19	N—27.5°—E	
8	正楕円	1.16×1.53×0.47	N— 78° —E	
9	不整（楕円）	1.84×1.54×0.34	N— 60° —E	
10	〃	1.27×1.33×0.35	N—38.5°—E	
11	〃	1.03×0.87×0.25	N— 34° —E	

ナンバー	形　　状	東西・南北・深度(単位m)	主(長)軸方位	備　　考
12	〃	0.65×0.59×0.28	N—55.5°—W	
13	方　形	0.78×0.52×0.18	N—72.5°—W	
14	不整（楕円）	0.8. ×0.68×0.23	N— 66° —E	第112図10、12
15	不整（方形）	1.76×2.08×0.45	N— 55° —E	第112図11
16	不整形	1.03×0.97×0.62	N— 33° —E	
17	〃	1.27×1.78×0.41	N— 32° —E	
18	不整（方形）	0.88×0.92×0.43	N— 37° —E	
19	〃	1.18×1.98×0.30	N— 47° —E	
20	円　形	0.82×0.83×0.38		
21	不整（方形）	1.58×1.58×0.48	N— 68° —W	
22	〃	1.15×1.13×0.39	N— 75° —E	
23	不整形	1.84×2.07×0.49	N— 44° —E	
24	円　形	1.48×1.88×0.58		
25	不整（楕円）	1.61×1.02×0.53	N— 45° —W	
26	不整隅丸方形	0.52×1.02×0.42	N—8.5° —W	
27	不整（楕円）	0.94×1.39×0.42	N— 19° —W	
28	楕円形	2.60×1.30×0.60	N— 18° —W	
29	円　形	0.93×0.94×0.35		
30	隅丸方形	0.98×0.94×0.37	N— 5° —W	
31	長方形	1.54×2.49×0.88	N— 14° —E	
32	不整方形	1.54×1.91×0.80	N— 1° —E	
33	長方形	0.60×0.86×0.45	N— 14° —W	
34	円　形	0.65×0.84×0.31		
35	不整方形	1.37×1.50×0.40	N— 50° —E	
36	長方形	2.46×1.18×0.64	N— 64° —E	
37	〃	0.73×1.02×0.45	N—9.5° —W	
38	〃	0.71×1.50×0.43	N— 20° —W	
39	隅丸方形	1.58×1.39×0.42	N—75.5°—E	第112図4、6、7
40	〃	1.03×1.04×0.34	N— 80° —E	内耳鍋片
41	長方形	1.90×1.49×0.66	N—36.5°—E	第112図1、2
42	不整形	1.41×0.96×0.55	N—18.5°—W	
43	不整（楕円）	1.32×0.77×0.47	N— 12° —W	
44	不整（方形）	3.14×1.80×0.54	N— 36° —W	第112図3、第113図1、2
45	不整形	1.48×1.18×0.56	N— 84° —W	
46	〃	0.70×1.07×0.43	N—29.5°—W	
47	不整（楕円）	0.80×1.15×0.38	N— 62° —W	

ナンバー	形　　状	東西・南北・深度(単位 m)	主(長)軸方位	備　　考
48	不整方形	1.47×1.45×0.55	N—41.5°—E	
49	長方形	1.25×0.58×0.29	N—40.8°—E	
50	隅丸方形	0.73×1.15×0.50	N— 18° —E	
51	不整（方形）	1.36×0.87×0.37	N— 58° —E	
52	〃	1.04×0.68×0.30	N—59.5°—W	
53	〃	0.98×0.63×0.39	N— 44° —E	
54	〃	0.79×0.58×0.36	N—50.5°—E	
55	〃	0.61×0.89×0.39	N—61.5°—E	
56	〃	1.44×0.67×0.47	N— 48° —E	
57	隅丸方形	1.19×1.12×0.51	N— 14° —E	
58	不整方形	0.80×1.16×0.42	N—68.5°—E	
59	不整方形	1.07×1.02×0.37	N—37.5°—E	
60	〃	1.49×1.43×0.65	N— 35° —E	
61	隅丸方形	0.74×0.52×0.39	N—25.5°—E	
62	〃	0.73×0.62×0.29	N— 53° —E	
63	不整形	3.85×2.06×0.70	N—63.5°—E	
64	〃	0.78×0.97×0.37	N— 50° —W	
65	方　形	1.00×1.16×0.44	N—12.5°—W	
66	不整方形	1.05×1.28×0.60	N— 9° —W	
67	不整（長方形）	1.09×2.36×0.52	N— 1° —E	
68	隅丸方形	0.63×0.92×0.52	N— 25° —E	
69	不整形	0.97×0.60×0.35	N— 65° —E	
70	方　形	1.28×1.02×0.62	N— 69° —W	
71	方　形	2.40×2.04×0.98	N—30.5°—E	第111図1～3、7
72	〃	1.80×1.57×0.55	N— 49° —E	
73	不整形	1.46×1.09×0.56	N—61.5°—E	内耳鍋片
74	〃	0.82×0.83×0.51	N— 4° —W	
75	〃	0.68×1.05×0.47	N— 2.5° —E	
76	円　形	1.17×1.13×0.53		
77	方　形	1.51×1.24×0.52	N— 88° —E	
78	円　形	1.13×1.30×0.44		
79	〃	0.88×0.98×0.59		
80	長方形	1.08×1.86×0.54	N—63.5°—E	
81	〃	0.76×1.76×0.45	N— 25° —E	
82	不整形	1.27×1.55×0.48	N— 7° —E	
83	〃	1.11×1.20×0.40	N— 17° —E	

ナンバー	形　　状	東西・南北・深度（単位 m）	主（長）軸方位	備　　考
84	長方形	1.67×0.79×0.41	N—58.7°—E	
85	不整方形	0.56×1.03×0.43	N— 27° —E	
86	不整形	1.04×1.01×0.48	N—71.5°—W	
87	〃	0.72×0.89×0.48	N— 18° —W	
88	隅丸方形	0.56×0.53×0.47	N—74.5°—E	
89	長方形	0.65×1.14×0.48	N—29.7°—E	
90	不整方形	0.90×0.84×0.47	N— 74° —E	
91	〃	0.62×0.83×0.56	N— 2.5° —W	
92	〃	0.81×0.77×0.60	N— 71° —W	
93	不整（楕円）	0.31×0.51×0.63	N— 8.6° —E	
94	不整（楕円）	0.72×1.22×6.43	N— 27° —E	
95	〃	0.68×0.53×0.58	N—61.8°—E	
96	不整方形	0.92×0.69×0.52	N— 45° —E	
97	不整形	0.77×0.56×0.53	N—86.5°—E	
98	長方形	1.42×3.05×0.40	N— 48° —W	
99	〃	1.71×3.07×0.45	N— 35° —W	
100	不整形	1.60×1.93×0.53	N— 36° —W	内耳鍋片
101	不整方形	0.90×1.02×0.32	N—36.6°—W	
102	不整形	1.53×1.03×0.39	N—84.5°—W	
103	〃	0.63×0.50×0.34	N—80.5°—W	
104	不整（楕円）	1.44×1.40×0.21	N— 36° —E	
105	不整形	1.68×2.23×0.64	N—29.5°—E	
106	不整形	1.12×0.59×0.28	N—85.5°—E	内耳鍋片
107				
108	不整方形	0.95×1.07×0.47	N— 46° —W	
109	不整（楕円）	2.38×3.28×0.54	N—38.5°—E	
110	不整形	3.87×5.59×0.71	N— 37° —E	第111図４～６、８
111	方　形	1.75×1.82×0.27	N— 25° —W	内耳鍋片
112	不整形	0.61×0.72×0.44	N—44.5°—E	
113	不整（楕円）	0.79×0.73×0.55	N—44.1°—W	
114	不整方形	1.05×0.78×0.86	N—63.8°—E	
115	不整形	1.34×1.20×0.82	N—45.5°—E	
116	不整方形	0.94×0.93×0.58	N— 71° —E	
117	不整形	1.67×1.67×0.53	N—12.5°—W	
118	不整方形	1.47×1.51×0.09	N— 58° —W	
119	隅丸方形	1.24×1.25×0.41	N—27.8°—E	

ナンバー	形　　状	東西・南北・深度(単位m)	主(長)軸方位	備　　考
120	不整形	2.70×3.19×0.82	N— 39° —W	
121	〃	1.52×2.02×0.41	N— 34° —W	
122	〃	1.07×1.11×0.28	N—127.6°—W	
123	方　形	3.65×2.88×0.39	N—49.5°—E	
124	不整形	2.55×3.33×0.20	N— 4° —E	
125	〃	1.85×1.32×0.37	N—50.8°—E	内耳鍋片
126	円　形	1.13×1.13×0.11		
127	不整形	1.58×2.58×0.19	N—20.5°—W	
128	〃	0.73×1.13×0.21	N— 3° —E	
129	方　形	1.15×1.12×0.08	N—63.7°—W	
130	不整方形	1.22×2.43×0.25	N—7.7°—E	
131	方　形	2.15×1.37×0.14	N—84.5°—W	
132	〃	2.57×2.61×0.27	N— 90° —E	
133	〃	3.15×0.87×0.33	N— 87° —E	
134	方形?	1.95×1.97×0.89	N—73.5°—W	
135	不整形	20.3×1.78×0.21	N— 67° —E	
136	〃	0.85×1.02×0.14	N— 19° —W	
137	方　形	0.81×1.40×0.19	N— 41° —E	
138	〃	2.13×1.02×0.41	N— 89° —W	
139	〃	1.61×1.92×0.26	N— 54° —E	
140	不整形	1.08×2.46×0.41	N—1.5°—E	
141	不整形	2.12×2.26×0.33	N—45.5°—E	
142	〃	1.00×1.43×0.17	N—32.6°—E	
143	〃	1.52×1.19×0.21	N— 88° —W	
144	〃	0.93×1.16×0.55	N—25.8°—E	
145	〃	1.22×0.75×0.29	N— 82° —E	
146	〃	1.35×1.57×0.47	N—36.5°—W	
147	不整方形	1.27×3.32×0.47	N—32.5°—W	
148	不整形	1.68×2.92×0.37	N— 5° —E	
149	〃	?×2.67×0.08	N— 6° —E	
150	方　形	0.57×0.58×0.39	N—11.5°—W	
151	〃	0.86×1.01×0.56	N— 10° —W	
152	不整形	0.87×3.04×0.57	N— 7° —W	
153	〃	1.19×1.52×0.21	N—39.8°—W	
154	長方形(整)	0.91×1.36×0.43	N—35.5°—E	
155	不　整	2.53×1.22×0.59	N—81.5°—W	

ナンバー	形　　状	東西・南北・深度(単位 m)	主(長)軸方位	備　　考
156	〃	1.90×2.42×0.57	N— 11° —W	
157	方　形	2.08×2.57×0.38	N—12.5°—E	
158	不整形	1.54×1.86×0.62	N— 24° —E	
159	不整方形	2.03×2.19×0.62	N— 57° —E	
160	不整形	1.32×1.12×0.52	N—88.6°—W	
161	不整方形	1.42×1.57×0.46	N— 17° —W	
162	〃	1.41×1.20×0.29	N— 85° —E	
163	不整形	0.95×1.22×0.53	N—41.5°—E	
164	長方形	0.77×0.44×0.21	N— 87° —W	
165	方　形	1.78×1.60×0.37	N— 60° —W	
166	不整形	1.25×1.09×0.14	N—45.5°—E	
167	方　形	2.87×2.52×0.78	N—35.5°—E	
168	不整方形	2.42× ? ×0.78	N— 80° —E	
169	〃	2.53×2.56×0.46	N— 82° —E	
170	〃	? ×? ×0.78		
171	方　形	1.32×1.32×0.41	N—72.5°—W	
172	方形（?）	2.52×2.11×0.29	N—78.5°—W	
173	方　形	2.16×2.19×0.21	N— 73° —W	
174	〃	2.10×1.10×0.24	N— 55° —E	
175	隅丸方形	1.67×1.02×0.27	N—74.8°—W	
176	不整方形	?×2.18×0.24	N— 27° —W	
177	〃	1.23×1.39×0.60	N— 35° —E	
178	隅丸方形	0.98×0.78×0.63	N— 56° —E	
179	不整方形	? ×? ×0.22	N— 34° —E	
180	〃	1.35×1.67×0.27	N— 16° —E	
181	〃	1.78×2.76×0.34	N—43.5°—E	
182	隅丸方形	2.07×1.95×0.32	N—76.5°—E	
183	方　形	1.78×2.09×0.15	N— 82° —W	
184	不整方形	? × ?×0.13		
185	〃	1.55×1.22×0.33	N— 39° —W	
186	方　形	1.53×1.37×0.51	N— 70° —E	
187	不整方形	1.99× ? ×0.29	N— 72° —E	
188	〃	1.80×1.07×0.34	N—46.5°—E	
189	方　形	1.32×1.13×0.32	N— 23° —W	
190	不整形	2.52×1.32×0.50	N— 78° —E	
191	不整方形	3.38×1.65×0.78	N—50.7°—E	

ナンバー	形　　状	東西・南北・深度(単位 m)	主(長)軸方位	備　　考
192	方　形	20.8×1.43×0.41	N— 69° —E	
193	〃	1.19×1.09×0.33	N— 52° —W	
194	不整方形	1.67×1.27×0.27	N— 72° —E	
195	不整形	？　×1.75×0.28	N— 12° —W	
196	〃	1.17×1.64×0.35	N— 16° —E	
197	〃	1.33×3.75×0.65	N— 40° —E	
198	〃	1.23×　？　×0.38	N—70.8°—E	
199	方　形	1.50×2.13×0.38	N— 49° —E	
200	不整形	1.82×4.13×0.42	N— 24° —E	
201	不整方形	2.03×　？　×0.53	N— 22° —W	
202	方　形	2.03×1.28×0.53	N— 84° —W	
203	〃	1.03×1.02×0.33	N— 73。—E	
204	不整方形	1.42×1.38×0.49	N— 8° —E	
205	方　形	1.70×1.58×0.37	N— 62° —E	
206	〃	1.18×1.03×0.27	N— 53° —W	
207	不整方形	1.12×0.97×0.37	N— 70° —E	
208	隅丸方形	1.65×0.81×0.19	N— 82° —E	
209	〃	1.01×0.92×0.29	N—31.5°—W	
210	不整方形	1.42×1.12×0.27	N— 39° —W	
211	隅丸方形	0.84×1.32×0.33	N— 20° —E	
212	不整方形	0.91×1.32×0.15	N—46.6°—W	
213	隅丸方形	0.98×1.34×0.31	N— 41° —W	
214	長方形	1.29×0.89×0.32	N—75.5°—E	
215	方　形	1.92×1.10×0.41	N—67.5°—W	
216				
217	不整（楕円）	1.52×1.47×0.47	N—87.5°—E	
218	方　形	1.27×3.12×0.33	N—42.7°—E	
219	〃	？　×？　×0.29		
220	不整方形	？　×14.3×0.27		
221				
222	不整（楕円）	0.85×1.29×0.44	N—18.5°—E	
223	〃	1.14×1.07×0.44	N—77.5°—E	
224	不整方形	1.93×1.83×0.30	N—78.5°—W	
225	方　形	1.23×1.05×0.27	N— 17° —W	
226	不整形	2.15×2.98×0.63	N— 11° —E	
227	円　形	0.59×0.56×0.39	N— 89° —W	

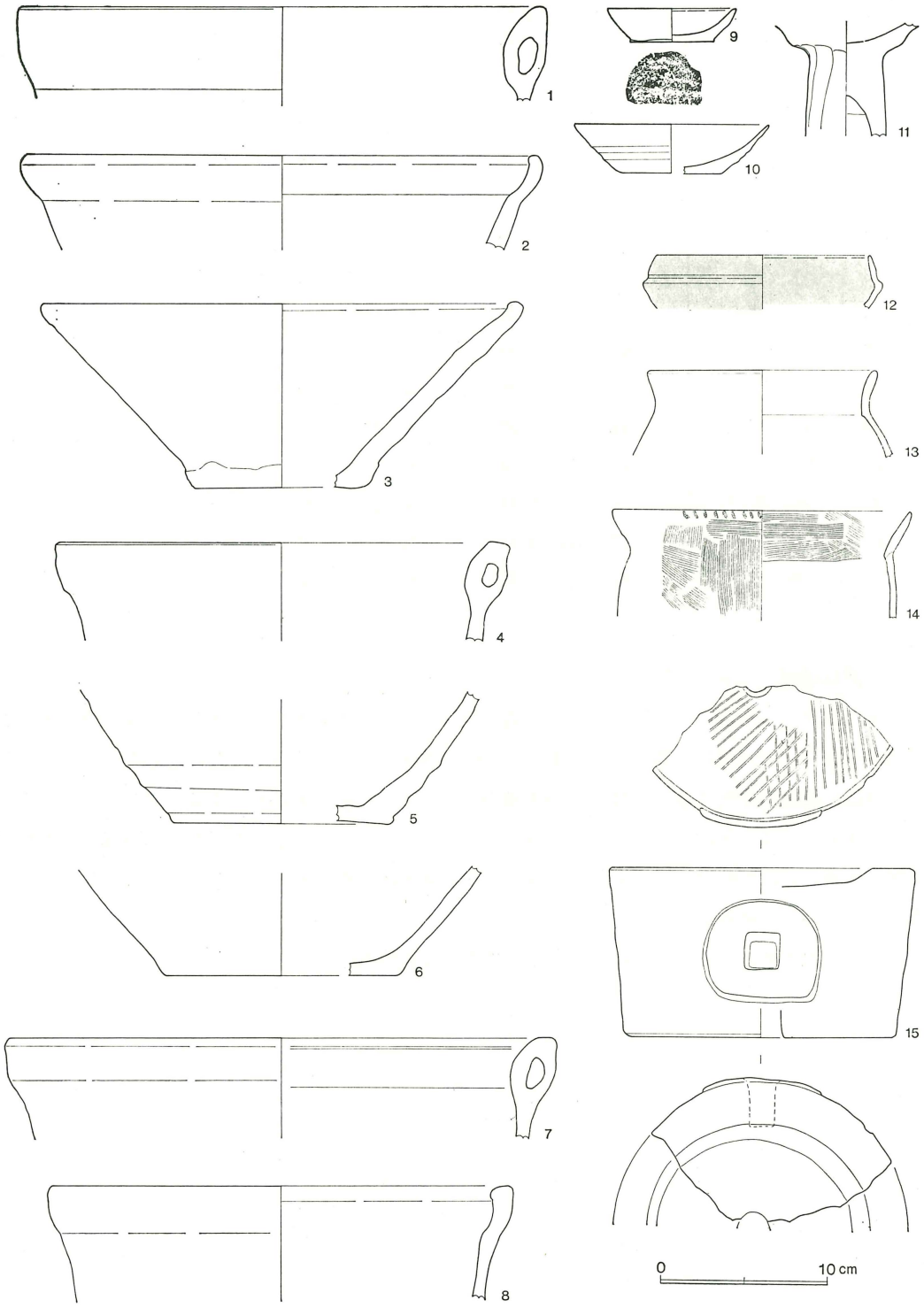
ナンバー	形　　状	東西・南北・深度(単位 m)	主(長)軸方位	備　　考
228	不整（楕円）	0.63×0.47×0.42	N— 80° —E	
229	円　形	0.59×0.58×0.34		
230	不整（楕円）	0.47×0.62×0.18	N—13.5°—E	
231	〃	0.98×0.61×0.18	N— 62° —E	
232	〃	0.62×0.50×0.23	N— 85° —E	
233	〃	0.61×0.80×0.57	N— 14° —W	
234	不整形	0.55×0.55×0.29	N— 88° —W	
235	〃	0.32×0.28×0.17	N—55.5°—E	
236	不整（楕円）	0.41×0.52×0.26	N— 17° —E	
237	〃	0.67+0.71+0.31	N— 32° —E	
238	〃	0.53+0.49+0.39	N— 53° —W	
239	不整方形	1.62+1.47+0.35	N	77.5°—E	
240	方　形	1.42+1.53+0.24	N—58.5°—E	
241	不整（楕円）	0.78+1.47+0.48	N—20.5°—E	
242	不整形	1.17+1.22+0.47	N— 38° —W	
243	不整方形	0.93+1.21+0.22	N— 8° —W	

(3) **溝状遺構**（第6～8図）

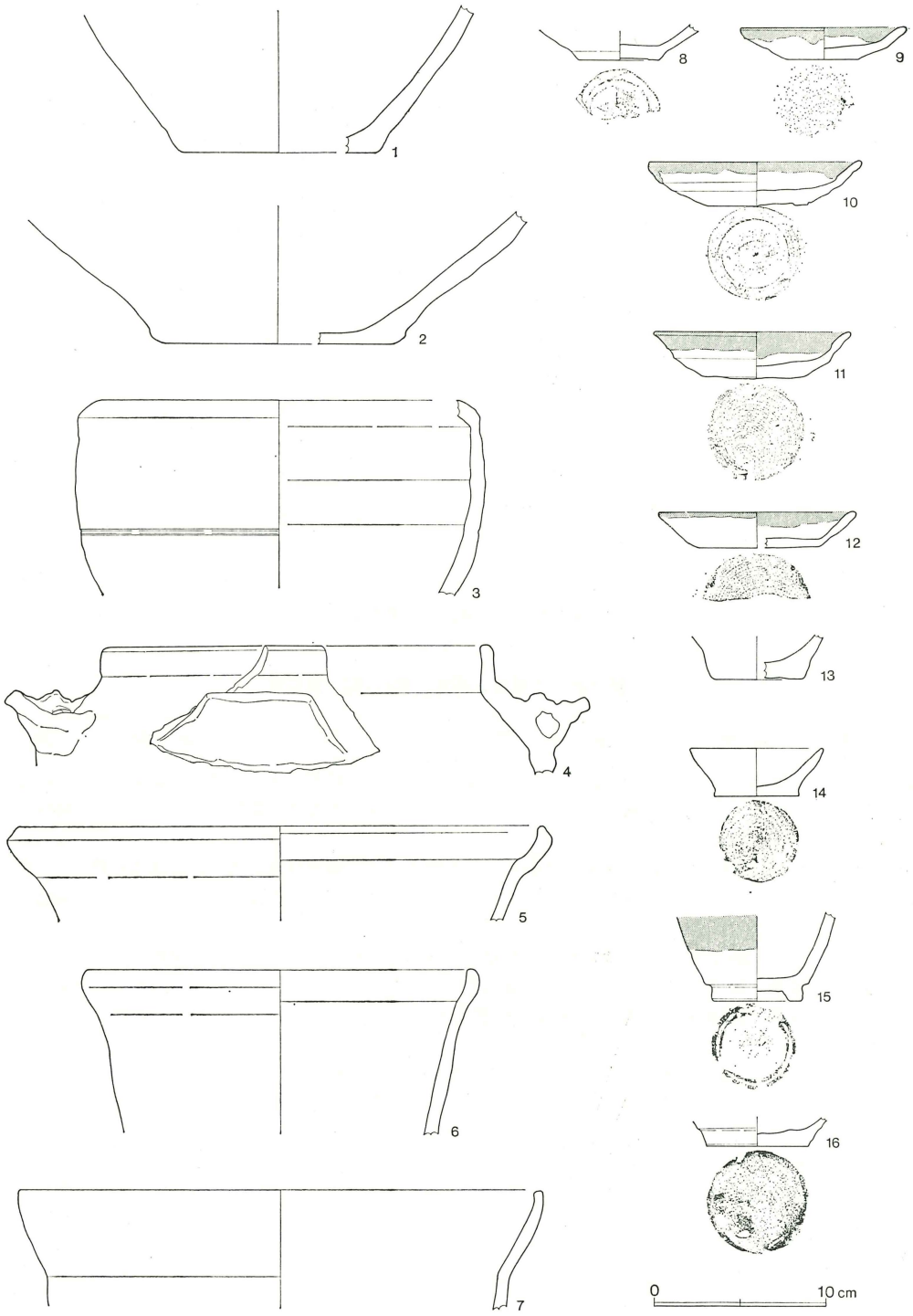
明確な掘り込みをもつものは少なく、畦状の浅いものが一般的である。また、周囲の畑の地割を概観する限り、ほぼ対応することから本跡も同様の用途として使用されたものと考えられる。地割り方向は、磁北に指向する南北溝が計15条認められ、これに直交する形で8条までが確認できる。

溝の覆土からは、現代の所産遺物は皆無で、近世代の焙烙内耳鍋他、瀬戸皿、常滑甕、不明鉄製品等比較的古い段階の遺物が出土している。出土状態は特に集中する箇所もなく、散漫かつ浮遊するものが大半を占める。

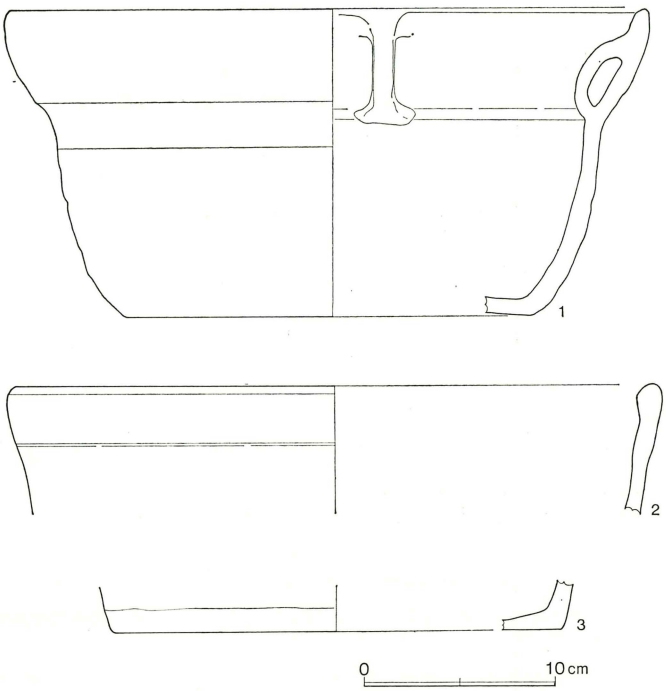
規模は、幅1 m、深さ0.4 mほどが最も一般的な計測値である。



第111図　土壙出土遺物実測図(1)



第112図　土壙出土遺物実測図(2)



第113図　土壙出土遺物実測図(3)

第25表　土壙出土遺物（第111図）観察表(1)

器種	番号	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
瓦質内耳鍋	1	口径(32.2)	体部は外傾し、段をもって直立する口縁部に至る。	口縁部はヨコナデ、体部は内外面丁寧なナデ調整。	2/3欠　淡黒褐色
瓦質内耳鍋	2	口径(31.6)	体部は外傾、段をもって内彎する。口縁部に至る。	口縁部はヨコナデ、体部は内外面丁寧なナデ調整。	3/4欠　灰黒褐色
瓦質土器鉢	3	口径　29.2 底径　10.6 器高　10.8	底部および体部下半肥厚、体部は外傾しながら口縁部に至る。口唇部は丸い。口縁部は内稜をもつ。	内外面共丁寧なナデ調整。	1/2欠　暗灰褐色
瓦質内耳鍋	4	口径(27.6)	体部は外傾し、段をもって直立する口縁部に至る。	口縁部はヨコナデ。体部は内外面共丁寧なナデ調整。	2/3欠　灰黒褐色
瓦質内耳鍋	5	底径(13.4)	輪積み痕顕著、体部下端から外傾して立ち上がる。	丁寧なナデ調整。	2/3欠　暗灰褐色
瓦質内耳鍋	6	底径(14.4)	体部下端より外傾して立ち上がる。底平はフラット、器壁は薄い。	丁寧なナデ調整。	3/4欠　灰黒褐色
瓦質内耳鍋	7	口径(33.4)	体部は外傾し、段をもって直立する口縁部に至る。かけ口は不整楕円形を呈する。	口縁部はヨコナデ、内外面共丁寧なナデ調整。	3/5欠　暗灰褐色

器種	番号	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
瓦質内耳　鍋	8	口径　28.0	体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は段をもって垂直に口唇部に至る。肥厚。	口縁部はヨコナデ。体部は内外面丁寧なナデ調整。	½欠　灰黒褐色
土師質皿	9	口径　8cm 底径　5cm 器高　2cm	口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は丸い。肥厚。	ロクロ使用の水挽き成形。底面はスダレ状の圧痕。	完形　褐色胎土　焼成良好。
土師質坏	10	口径　12.0 底径　6.2 器高　3.0	体部端部から急激に開く。口唇部は丸い。底部は肥厚。	ロクロ使用。	½欠　淡褐色。胎土焼成良好。
高　坏	11		体部下端に稜をもち、外傾しながら立ちあがる。脚部は直線的作。	坏部はヘラナデ調整。脚部は縦位のヘラケズリ。内面は横位ヘラケズリ。	口縁部上半裾部欠失。
坏	12	口径(13.0)	体部は半球状、受部の段は強い稜をもち、口縁部は内傾して立つ。	口縁部はヨコナデ。体部は丁寧なヘラナデ。内外面赤色塗彩。	⅔欠　暗赤褐色
甕	13	口径(14.0)	口縁部は緩やかに外反。端部は丸い。胴部は球形と考えられる。	口縁部はヨコナデ。胴部はヘラナデ整形。内面はナデ調整。	⅔欠　暗黄褐色
甕	14	口径(18.0)	口縁部は内彎しながら開く。胴部は余りふくらみをもたない。	口唇部外面は木口による連続押圧、外面は縦、横位の刷毛ナデ。内面は口縁部が横位刷毛ナデ。下位はナデ調整。	⅗欠　暗黄灰褐色

第26表　土壙出土遺物（第112図）観察表(2)

器種	番号	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
瓦質内耳　鍋	1	底径(11.4)	底部から外傾して立ち上がる。器壁は肥厚。輪積み痕明瞭。	内外面共丁寧なナデ調整。	⅔欠　灰黒褐色。
瓦質内耳　鍋	2	底径(14.2)	底部から外傾して立ち上がる。器壁は肥厚。	内外面共丁寧なナデ調整。	⅘欠　灰黒褐色
瓦質手あぶり	3	口径　23.6	口縁部から下位に直線的に移行下端周辺は若干すぼまり脚部を有する底面に至ると思われる。	内外面共丁寧なナデ調整。外面胴部下半に横位の沈線が一条一周する。	⅓欠　淡灰黒褐色。
瓦質外耳　鍋	4	口径(23.0)	口縁部は直立し、胴部は球形を呈する。舌状に取り付けられた把手、かけ口が貼り付けられる。	丁寧なナデ調整。把手は鋭角的な作り。	⅞欠　淡黄褐色。
瓦質内耳　鍋	5	口径(32.0)	体部は外傾し、口縁部は段をもち、内傾しながら立ち上がる。	内外面共丁寧なナデ調整。	¾欠　淡灰褐色。

器種	番号	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
瓦質内耳　鍋	6	口径　23.4	体部は外傾し、口縁部は段をもち、内傾しながら立ち上がる。	内外面共丁寧なナデ調整。	½欠　淡灰黒褐色
瓦質内耳　鍋	7	口径(31.0)	体部は外傾し、口縁部は段をもち、内傾しながら立ち上がる。	内外面共丁寧なナデ調整。	⅔欠　灰褐色
土師質皿	8	底径　4.6	底面は円板状で肥厚、緩やかに立ち上がる。	ロクロ使用の水挽き成形。底面は回転糸切り後周縁部回転ヘラケズリ。	口縁部欠失淡黄橙褐色
瀬戸皿	9	口径　9.8 底径　4.5 器高　1.8	緩やかに外傾し、口縁部で若干内彎。口唇部は丸い。底面はやや肥厚。	ロクロ使用の水挽き成形。底面は回転糸切り後再調整なし。釉	完形　暗灰白色
瀬戸皿	10	口径　12.6 底径　5.8 器高　2.7	緩やかに外傾し。口縁部で内彎し立ち上がる。口唇部は丸い。底面はやや肥厚。	ロクロ使用の水挽き成形。底面は回転糸切り後周縁部の回転ヘラケズリ調整釉はどぶづけ風に口縁部の施釉。	完形　暗灰白色
瀬戸皿	11	口径　11.5 底径　5.8 器高　2.7	緩やかに外傾し、中位で稜をもち外彎して立ち上がる。口縁部は丸い。底面はやや肥厚。	ロクロ使用の水挽き成形。底面は回転糸切り後再調整なし。口縁部のみどぶづけ風に施釉。	口縁部⅓欠失　暗灰褐色
瀬戸四	12	口径　11.5 底径　7.0 器高　2.0	底径がやや底い。緩やかに外傾して立ち上がる。口縁部は丸い。	ロクロ使用の水挽き成形。底面は回転糸切り後再調整なし。口縁部は多量のススが付着。	½欠　暗灰褐色
土師質坏	13	底径　5.2	底面は円板状で肥厚。急激に立ち上がる。	ロクロ使用の水挽き成形。底面は回転糸切り後再調整なし。	⅔欠　淡橙褐色
土師質坏	14	口径　8.0 底径　5.0 器高　2.8	底面は円板状をなし、若干肥厚外傾して立ち上がり口縁部で内彎口縁部は丸い。	ロクロ使用の水挽き成形。底面は回転糸切り後再調整なし。	完形　淡橙褐色　胎土焼成　良好
天目茶碗	15	底径　5.4	体部は若干外傾し、直線的に立ち上がる。高台は断面コの字状を呈し、外傾して取り付けられる。	ロクロ使用の水挽き成形。底面は回転糸切り後高台貼付。口縁部はどぶづけにて施釉。	⅓欠　暗灰白色
土師質坏	16	底径　6.0	底面は円板状をなし、肥厚する体部は急激に外傾して立ち上がると思われる。	ロクロ使用の水挽き成形。底面は回転糸切り後、スノコ状の圧痕を明瞭に残す。	⅙欠　淡橙褐色

第27表　土壙出土遺物（第113図）観察表

器　種	番号	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
瓦質内耳　鍋	1	口径　34.4 底径　21.6 器高　16.6	体部は若干外傾して立ち上がり口縁部で段をもち、内彎して口唇部に至る。かけ口は3箇所貼付。	かけ口を貼付した後、丁寧なナデ付けおよびヨコナデ。体部全面ナデ。	2/5欠　暗灰褐色　胎土砂粒多量混入　焼成　良好
瓦質内耳　鍋	2	口径(35.0)	体部は外傾し、段をもって若干内傾する口縁部に至る。口唇部は丸いやや肥厚。	口縁部はヨコナデ。体部は丁寧なナデ調整。	2/3欠　暗灰褐色
瓦質内耳　鍋	3	底径(23.8)	体部は直線的に外傾して立ちあがる。	丁寧なナデ調整。	3/4　暗灰褐色

石臼（第111図）

⑮は砂岩質製の粉挽き臼で、1/4ほどが残存。上臼と思われる。各部位の計測値は、上面の径18.5cm、下面の径16.4cm、高さ10cmを計り、断面台形を呈する。側面は隅丸方形を呈する厚さ2mm程度の削り出し部分があり、その中心に一辺2cm、深さ2.6cmる方形の掘り込みを有する。また上面は、深さ1cmほどの浅い皿状に削り込み、その中央は軸棒が挿入される径2cmほどの円形の穿孔部をもつ。裏面は14条を単位に太い沈線状のきざみをもつ。

3　出土石器（第114図）

石器と認識できるものは、図示した8点であるが、大半は原位置を保っておらず中・近世の土壙あるいは井戸跡等に流入したものである。

1　砥石　第80号土壙出土（78—Dグリッド）両端部の側面を除く4面を使用。特に左端に図示した面は使い込んでいる。大きさは、幅6.5cm、長さ18.5cmを計る。材質はシルト質の凝灰岩である。

2　砥石　第8号井戸跡出土（74—Eグリッド）欠損品　両端部を除く4面使用。使用した主体は図示した左側。現存幅2.8cm、長さ7.8cmを計る。材質はシルト岩である。

3　砥石　第80号土壙（78—Eグリッド）欠損品　端部を除く2面使用。左側に図示した面中央は、幅5mm、深さ2mmの使用痕が認められる。材質は硬質砂岩である。

4　砥石　第2号周溝墓（76—Cグリッド）欠損品　端部を含む5面（1面は欠損部）を使用。素材は略円柱状をなしていたと思われる。現存幅5.2cm、長さ14.6cmを計る。材質は凝灰岩である。

5　石皿　第80号土壙（78—Eグリッド）縁辺部の小片、凹部へは緩やかに移行。熱を受け赤変現存幅10cm、長さ22.5cmを計る。材質は礫岩（跡倉層）である。

6　磨石　第3号周溝墓（76—Eグリッド）完形品　縁辺部の使用痕顕著。大きさは、9.8cm×

第114図　石器実測図

8.3㎝、幅4.7㎝を計る。材質は硬質砂岩である。

7　磨石　第3条住居跡（98—Aグリッド）縁辺部は磨石としてよく使用され、両面は凹み石として使用。幅4.3㎝、長さ16㎝を計る。材質は蛇紋岩である。

8　石皿　第3号井戸跡下層　25%残存　皿状の面は浅くなめらかである。くぼみは皿部に2ヶ所裏に4ヶ所認められる。熱を受け赤変。材質は礫岩（跡倉層）である。

4　グリッド出土の遺物

1　縄文土器（第115～117図）

古凍根岸裏遺跡出土の縄文時代の遺物はグリッド内より出土したものである。ここで言うグリッドとは古墳の周溝内及び、中近世の土壙内より出土したものをも一括している。特に土器を一括した関係上個々の土器については出土遺構、グリット地点は説明を避けた。

縄文土器の出土している地域を概観すると、特に調査区域をA区とした地域、つまり台地縁辺部より出土したものが大部分を占めている。この地区は周溝墓、古墳址、住居址などの遺構が集中している事から、先人達より生活場として古くから好まれてきたと考えられる。

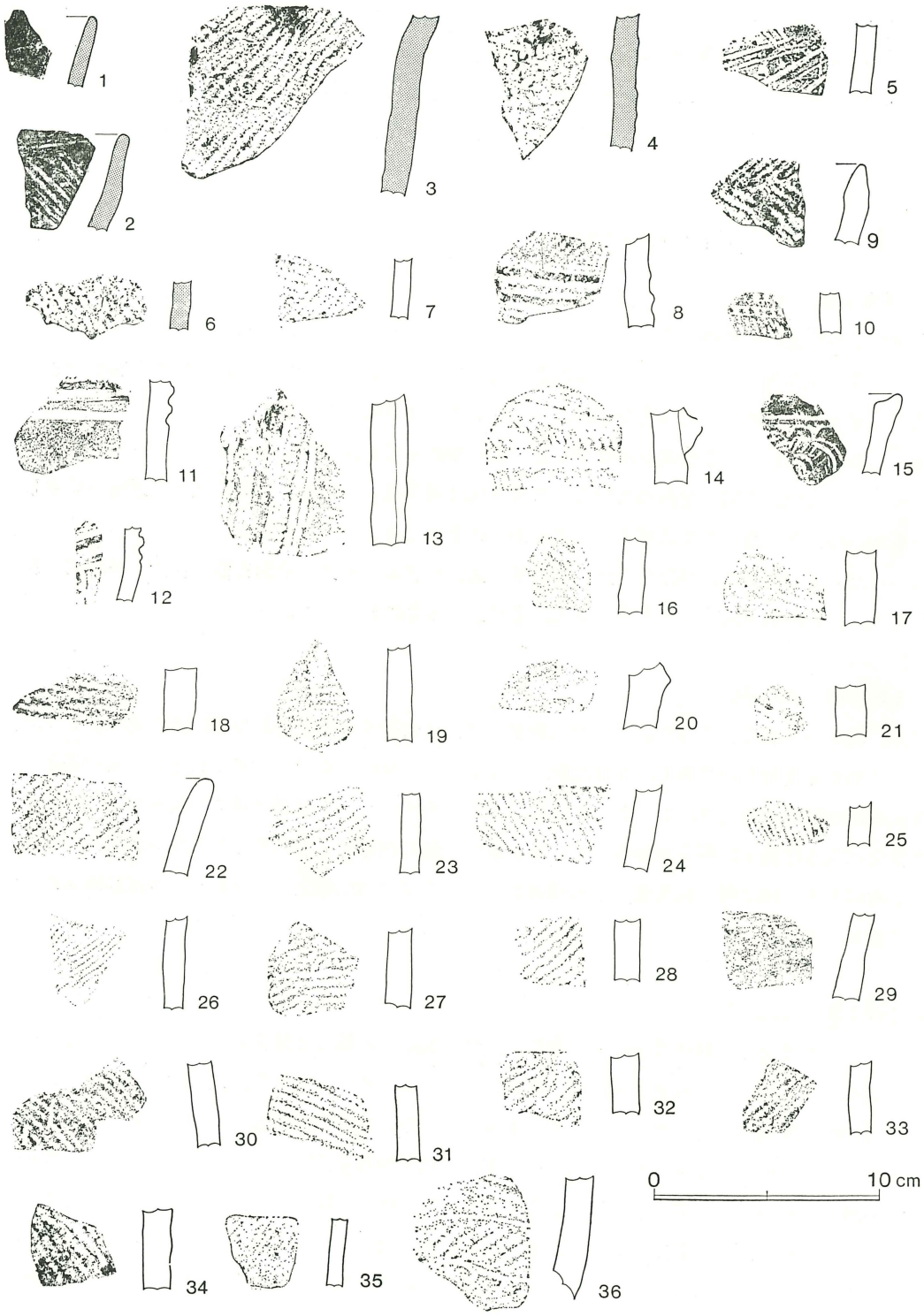
出土した土器の時期は、早期芽山式、前期黒浜式、諸磯a、b式、中期五領ヶ台式、勝坂式、加曾利E式、後期称名寺式、堀之内Ⅰ～Ⅱ式、安行式と多期にわたっている。

第1群土器（第115図）

早期、前期の土器を一括した。1、2は条痕、3、4は縄文が施文される芽山式である。いずれも胎土に繊維を含むものである。5は沈線のみによって文様構成を成す。6は胎土に少量の繊維を含み胴部には縄文が施文される。5、6は黒浜式比定されよう。7は羽状縄文を構成する。8は3条の横位に巡る浮線文に縄文が施されている。9は口縁部破片で二つの原体の異なる施文具で羽状縄文を構成する。10は縄文施文後、半截竹管文によって2段の爪形文が施される。8は諸磯a式、10は諸磯b式である。

第2群土器（第115図）

中期の土器群である。11は3条の平行沈線が横位に巡る。沈線文は無文を成している。五領ヶ台に比定されよう。12、13は隆帯を巡らし、その隆帯にそってキャタピラ文、及び角押文が施されている。14は楕円区画文を構成する隆帯に刻目を巡らすもの。15は口縁部破片で沈線のみで文様構成を形成している。12、13は勝坂Ⅰ式、14は勝坂Ⅱ式、15は勝坂Ⅲ式にそれぞれ比定されよう。16～19、21～28、30～35、はいずれも加曾利E式である。いずれも口縁部下、胴部に斜縄文が施施されるものである。EⅠ式～EⅡ式に当たると思われる。20は隆帯に伴なう無文部分のである。（第116図1）は「U字」型の隆起線によって区画された部分に縄文が施文されるものである。2、3は縦位に巡る隆起線によって縄文と無文帯が区画される土器である。4は口縁部破片で口唇部に縄文が施されている。5は欠損しているものであるが把手の部分だと思われる。7、10、11、16はいずれ



第115図　縄文土器拓影図(1)

第116図　縄文土器拓影図(2)

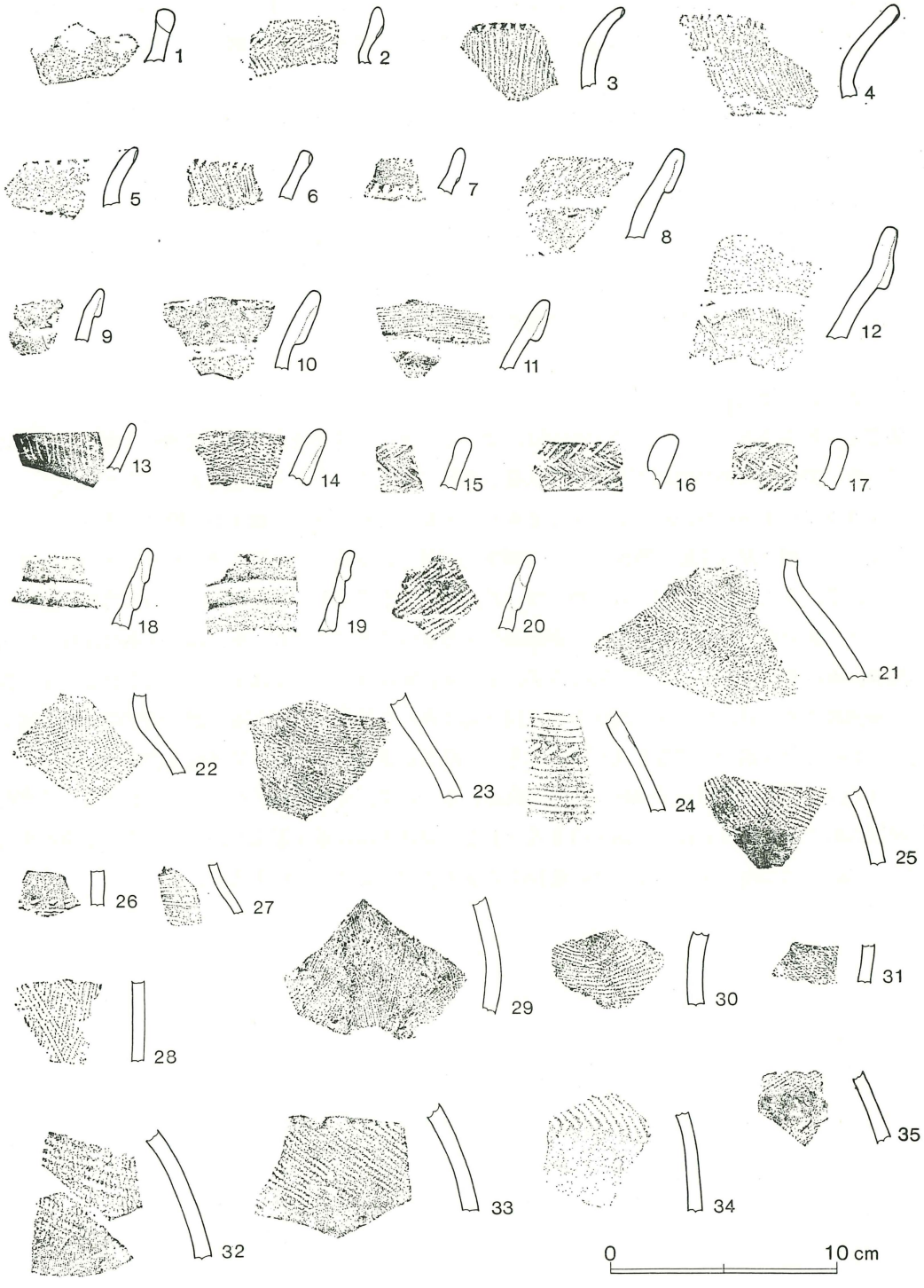
第117図　縄文土器拓影図(3)

も胴部にかけて縦位に巡る沈線によって縄文が施文される。とりわけ16は31と同様無文帯の幅を広く形成する土器であると思われる。6は微隆起によって縄文が施文される。15、18、27、28は縄文施文後に1条、又は2条の縦位に巡る沈線を施している。20は沈線間に磨り消し縄文が施文される。19、24、25、29は2条の沈線によって区画された縄文が施文される。8は1条の曲線的な沈線によって縄文が施され、12は細い曲線の沈線によって楕円形のモチーフを描いている。楕円形内は無文帯となっている。9は口縁部破片で隆帯によって縄文と無文帯を区分している。12は口縁部が無文帯を成し、1条の沈線が横位に巡り、その直下に「Ω」字型を成す沈線内に縄文が施されている。23は口縁部下が無文帯を形成し微隆起線下より縄文が施文される。17も口縁部が欠損しているが23と同様であると思われる。(第115図) 29、32、33は無文帯を形成している胴部破片である。

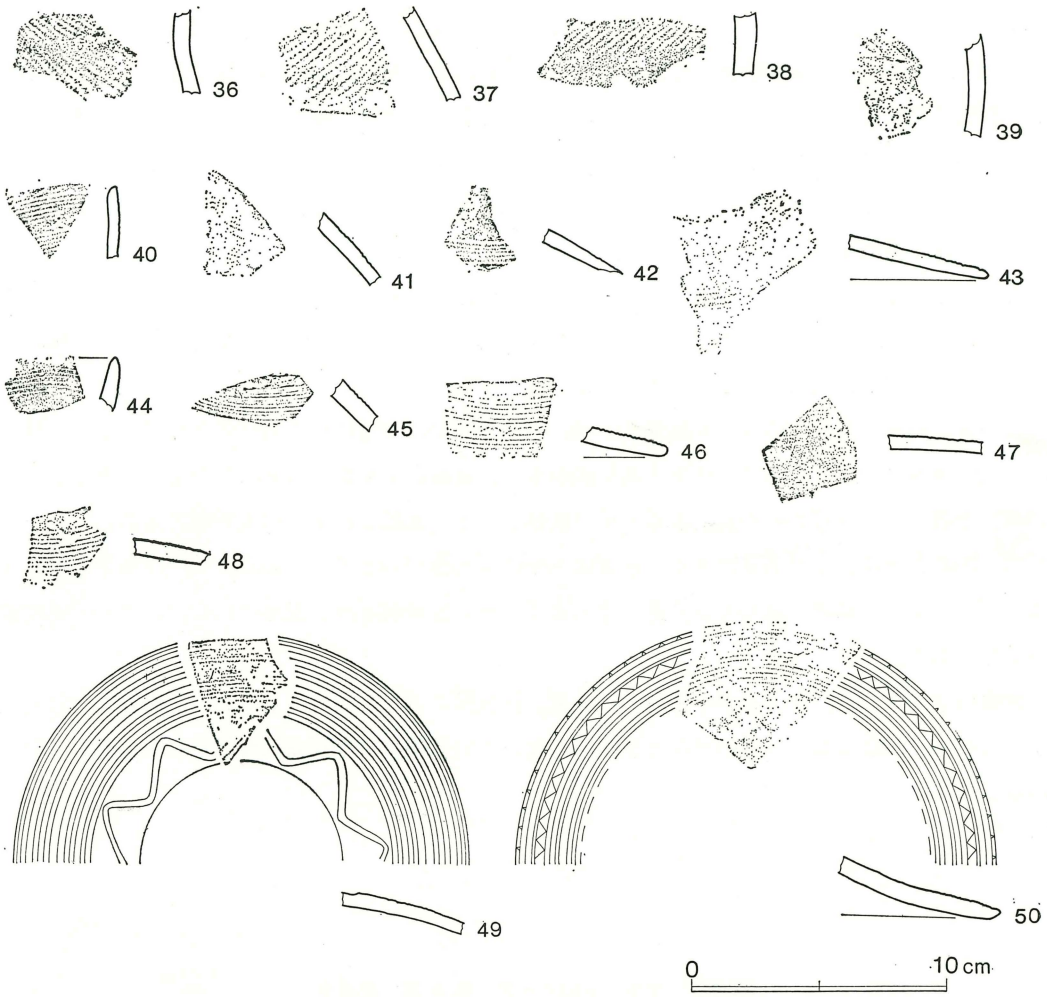
以上1～33は加曽利EⅡ式もしくはEⅢ式に当たる。

第3群土器(第117図)

後期の土器群である。1、及び(第115図)36、4、8、12は2条の曲線の沈線間に縄文を施文されている。32は無文の口縁部下に1条の沈線が巡る。以上はいずれも称名寺式に比定されよう。6 7は口縁部下に1条の横位に巡る沈線が施される土器である。6は口縁部が内彎し、7はゆるやかに外反する。16は無文土器で横位にかけて調整痕が見られるが表面は荒くザラザラしている。2～3、5、7、9、11、13、14、17～26、28、33は堀之内Ⅰ式でも、沈線のみによって文様が構成されている。沈線のみでも縦位、横位、曲線的に巡るものに分けられる。9、13は1条の沈線が縦位に巡り、3、18、23、24は2条、19は3条、2、5、20は4条もしくはそれ以上施される。7、25は曲線的に1条、11、17、26、33は2条、14は切り合って沈線が施される。28は横位に2条沈線が巡る。15は注口土器でうず巻き状の隆帯にそって縄文が施される。29、31は縄文施文後、29はうず巻き状の沈線、31は直線及び曲線の沈線が施される。いずれも堀之内式に当たる。27は2つの平行沈線間に磨り消し縄文を持つ。堀之内Ⅲ式である。30は波状口縁を形成し、口唇部下に小突起を有する。又磨り消し縄文を配しその中に沈線による入組文配をす。安行Ⅰ式であろう。



第118図　グリッド出土弥生土器拓影図(1)



第119図　グリッド出土弥生土器拓影図(2)

弥生式土器拓影図説明（第118、119図）

弥生時代の遺構は、調査区の南側で検出された一部の住居跡、土壙等にその可能性を密めたものが存在するが、出土遺物が極めて貧弱であることから接極的に規定できるものはない。弥生時代の遺物は、調査区全域で検出されたが、周溝墓、古墳跡が群在する南、北の調査域にやや濃密な分布を認めることができる。ここに掲載したものは、その代表的なものである。

1は宮ノ台期後半の甕形土器で、口唇部は指頭による交互の押圧。2～5は刷毛甕形土器で2～4は木口による連続の刻みが、5は原体による刻みが施される。7～12、14は、複合口縁の形態をとる壺形土器である。7は接合部に原体押圧が連続に施紋。8～12は、複合部が単節縄文、刷毛目網目状縄文を横転施紋により充塡され、内面は丁寧な篦磨きがなされる。13、15～17は、小形壺形

土器の口縁部である。13は篦寧きした後、縦位の暗紋が、15～17は、篦描きによる綾杉状あるいは羽状の文様により充塡。18～20は吉ケ谷式土器の口縁部で、20は単節ＬＲが施紋。21～23は、８、12、14の形態に対応する頸胴部と考えられ、細いＲＬにより充塡。24、26、27は壺形土器胴部片で平行線紋の間を列点により充塡する例で、表面はよく磨かれ焼成も極めて良い。25、32～39は吉ケ谷式土器の甕および壺形土器頸部および胴部上半の破片である。全て撚りのきつい単節ＲＬの横転施紋により充塡されているが、33、35、37、38の様に磨り消して残す例も認められる。胎土は総じて砂粒の混入度が高い。

29は刷毛甕形土器でアトランダムな施紋。30は細い撚りのＲＬを縦位に施紋、31はその交叉する部分であろう。28は焼成の極めて良い大形の壺形土器であり、表面を丁寧に篦磨でした後、棒状工具による斜位の平行沈線が施される例である。

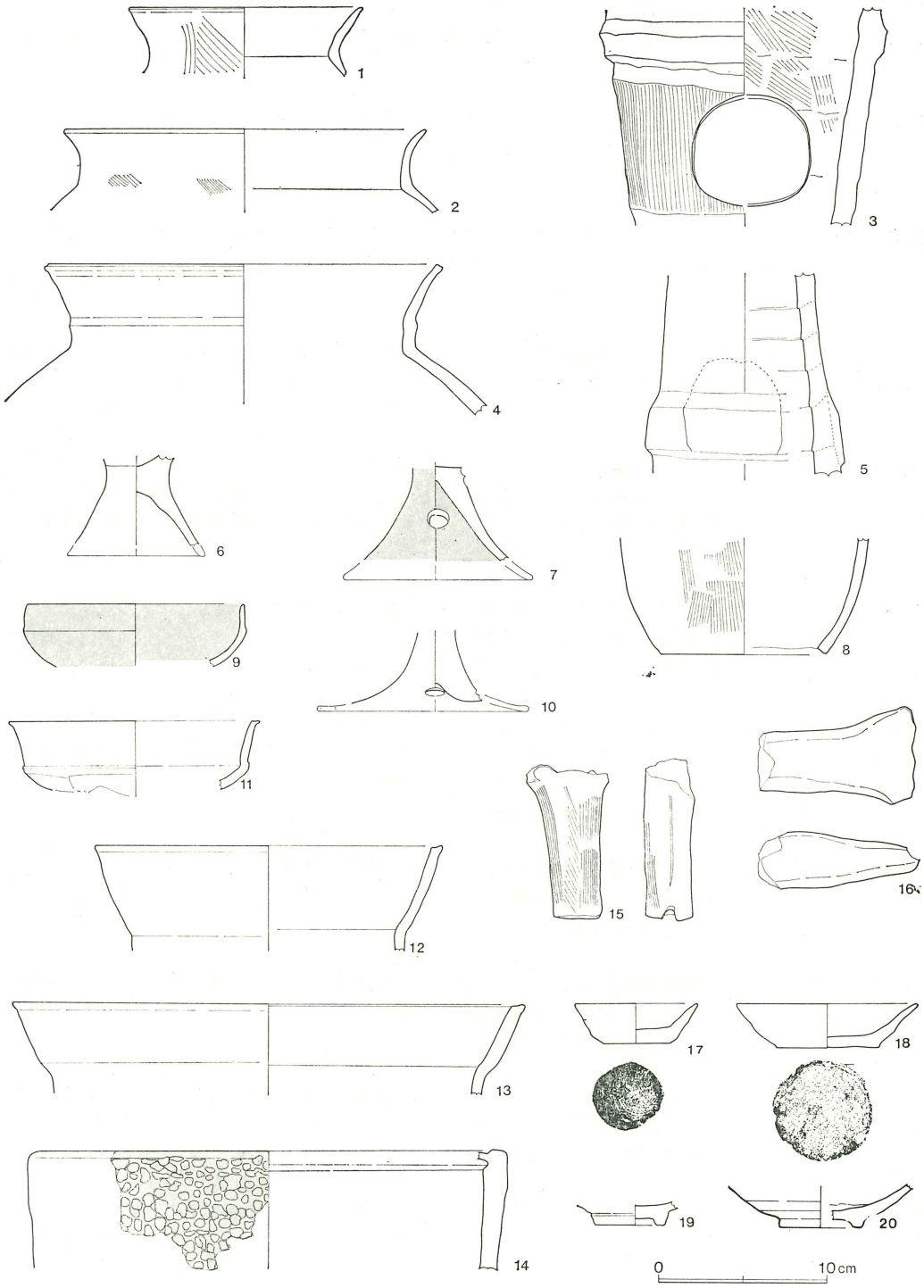
40～50は高坏形土器である。口縁部は、40、44の２点のみで他は全て脚部の破片である。口縁部は、10㎝未満の小形のもので、体部下端に稜をもち、直線的に外傾するタイプのものと考えられる40の文様構成は、端部から列点、６本１組の沈線が交互に施紋される。44も同様である。

41～50の脚部は、全て径が大きく、裾部は水平に低く開がるタイプである。胎土は微砂をやや多量に混入するが、焼成は極めて良く堅い感じを受ける。文様構成は、重層で同心円状にめぐる沈線が主体である。

沈線の単位は、６、８、９本と平均しない他、沈線間に列点を埋めるもの43、鋸歯紋により充塡するもの46、50最も端に破線が描かれる例50の他、太い沈線により鋸歯紋が描かれる例など多彩である。

第28表　グリッド出土土器（第120図）観察表

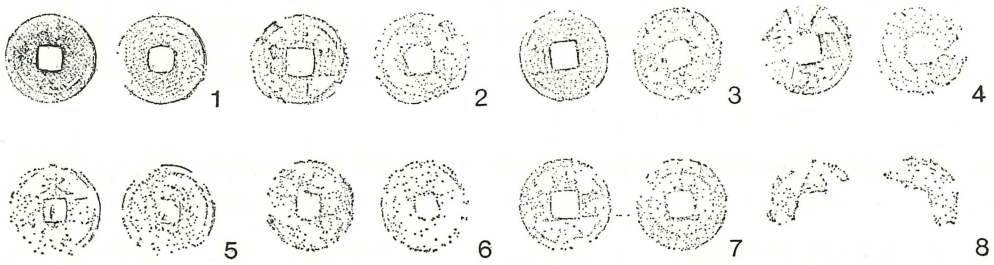
器種	番号	法　量(㎝)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
甕	1	口径(14.2)	頸部肥厚、口縁部緩やかに外反口縁部端は丸い。	縦あるいは斜位の荒い刷毛ナデ刷毛６本／２㎝　内面は丁寧なナデ調整。	⅔欠　淡褐色　角岩礫含焼成良好
甕	2	口径(21.6)	頸部肥厚、口縁部略コの字状に外反、口唇部端は丸い。	斜位の刷毛ナデ後丁寧なナデ調整が加わる。内面ナデ。	⅔欠　暗黄褐色　胎土焼成　良好
円筒埴輪	3		凸帯は低い台形1.2×2.8、高さ0.6㎝、透孔は6.2×7.0㎝の略円形、器壁は1.2㎝を計る。	縦刷毛ナデ、刷毛10本／２㎝、凸帯部の上下はしっかりナデ付けられる。	⅓欠　暗橙褐色　胎土角岩礫、酸化鉄
甕	4	口径　24.2	口縁部は、中位で段をもち緩やかに立ち上がる。胴部は球形、器壁は厚い。	口縁部内外面ヨコナデ、胴部は丁寧なナデ調整。	⅗欠　淡黄橙褐色　胎土焼成良好



第120図　グリッド出土土器実測図

器種	番号	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
太刀形埴輪？	5		勾金の装着部分は、幅4cm、厚さ0.5mmの粘土紐を貼付する。内面は輪積み痕を明瞭に残す。	すべて指等によるナデにより整形調整される。	1/5欠　暗褐色　胎土角岩礫混入
高　坏	6		脚本は高く、裾部の開きも小さい。接合部は肥厚。	外面は縦位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデ。	脚端部欠　橙褐色　胎土焼成　良好
高　坏	7		細い接合部から円垂状に直線的に開き、裾部でさらに外傾、接合部肥厚　3孔（径1.2cm）	内外面共丁寧なヘケミガキ後、赤色塗彩。	裾部端欠　暗赤褐色　胎土焼成　良好
甑形埴輪？	8	穿孔部径（10.0）	直線的な胴部から丸みをもってつづまり底部に至る。器壁は比較的薄い。	外面は縦位の刷毛ナデ、刷毛11本／2cm、内面ナデ調整。	2/3欠　淡橙褐色　胎土焼成　良好
坏	9	口径　13.2	体部は半球形、受部は弱い稜をもち、口縁部は内傾して立ち上がる。器壁は極めて薄い。	内外面ヨコナデ、体部は横位のヘラケズリ後、ナデ調整、内面は荒いヘラミガキ、内外面共赤色塗彩。	1/3欠　暗赤褐色　胎土焼成　良好
高　坏	10		細い接合部から円垂状に広がり裾部は水平に広く開く。肥厚、中位に3孔（径1.2cm）	内外面丁寧なナデ調整。	裾部欠　淡褐色　胎土焼成　良好
坏	11	口径(15.0)	体部は半球形、受部は鋭い段をもち、口縁部は直線的に立ち上がり、途中で外傾、口唇部は中心が沈線化している。器壁は薄い。	口縁部はヨコナデ。体部は横位のヘラケズリ。内面は丁寧なナデ調整。	2/3欠　褐色　胎土焼成　良好
瓦質内耳　鍋	12	口径　20.4	口縁部は緩やかに立ち上がり、端部で突出。体部は直線的に底部へ移行。器壁は薄い。	口縁部はナデ、体部は内外面丁寧なナデ調整。	1/3欠　暗灰褐色　砂粒多含　焼成　良好
瓦質内耳　鍋	13	口径(31.0)	口縁部は強い稜をもって外傾、端部は外側に突出、体部は直線的に下位へ移行、口縁部やや肥厚。	口縁部ヨコナデ、体部内外面丁寧なナデ調整。	3/5欠　暗灰褐色　砂粒多量混入
手あぶり	14	口径(28.8)	口縁部から体部下半へ垂直に移行、口縁部内側にはかえりをもちその下に浅い沈線がめぐる。	表面は油滴天目状の紋様がリンズにより施紋。	4/5欠　淡黒褐色
動物埴輪　足	15		鋭角的な面取りがなされ細く仕上げられ足裏面はヒズメ様の太いスリットがある。	篦による面取りの後刷毛ナデ調整。	鹿等の足部　淡橙褐色　酸化鉄
人物埴輪　手	16		指は3本までが認められる。手の平の部分のみ扁平に仕上げる。	篦による整形。	橙褐色　胎土焼成　良好

器種	番号	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
土師質土器皿	17	口径　7.2 底径　4.2 器高　2.3	体部下半で一段稜をもち、直線的に口縁部に至る。口縁部は丸い底部は肥厚。	ロクロ使用の水挽き成形。底面は回転糸切り。再調整なし。	完形　淡橙褐色　胎土焼成　良好
土師質土器皿	18	口径　10.8 底径　6.0 器高　2.5	体部下端から若干内彎しながら立ち上がる。口唇部は丸い。	ロクロ使用の水挽き成形、底面は回転糸切り後スノコ状圧痕。	完形　褐色胎土焼成　良好
青磁椀	19	台部径 4.0	台部は断面コの字状で直線的、体部は半球状。	ロクロ使用の水挽き成形。	¼欠　淡青灰褐色
灰　皿	20	台部径(5.0)	台部は断面コの字状で直線的、体部は半球状。	ロクロ使用の水挽き成形。	⅘欠　淡黄灰褐色



1…3号古墳、2～4…8号土墳、5•6…30号土墳、7•8…3号周溝

第121図　古銭拓影図

古銭（第121図）

古銭は、土壙の他、方形周溝墓あるいは古墳跡から8枚出土している。この内、古墳跡出土のものは明らかに攪乱部分より出土、第3号周溝墓出土としたものは遺物分布の検討から第63号土壙出土と改めた。出土古銭の内、銘の明らかなものは、2の天禧通宝(北宋銭1017～1022)、紹聖元宝(北宋銭1094～1097）各1枚と永楽通宝銭（明1408）2枚他、元宝と読めるもの1枚が出土している。

8については元豊ないし元祐通宝と思われる。以上、出土単位は2～3枚の北宋銭ないしは、永楽銭であるが、古銭では明確な年代が把えられない現状であるが、一様最も後出な永楽銭を基準に15世紀以降の所産と考えられる。用途は土壙内出土のものは、2～3枚が単位ではあるが六道思想に根ざした追善供養の一環として理解したい。

5 表採遺物（第122、123図）

掲載した埴輪および土器は、今回調査対象となったバイパス路線部分に近接ないしは広義の古凍遺跡に含まれる範囲から出土した資料である。

東松山市古凍字根岸裏出土埴輪（第122図）第2図周辺遺跡の図中Dとした箇所より出土した。発見者の中山角治氏によれば、工事による深掘りにより多量の土器群が出土したが、残念なことながら工事関係者により完形体を含む多くの埴輪が持ち去られ四散してしまったとのことである。

掲載した資料は、幸いにも散逸をまぬがれた埴輪を中山氏が採集、今日まで保管されていたものである。

1　人物埴輪（男子）頭部のみ、現存高19.5㎝を計る。頭髪は、高さを押えた低い上げ美豆良で装着も入念にナデつけられている。顔は丸顔、目および口は鋭い刀子状のヘラにより切りぬかれている。眉および鼻は、「T」字状の粘土塊を貼付後丁寧なナデ調整が加わる。耳の部分は、径5.5㎝の円形にくり抜き、更に幅1～2㎝の粘土帯を貼付し、ナデ調整により整える。目あるいは、鼻すじの通っている点、鋭さが感じられるが、総体的には温和な作りといえる。色調は橙褐色。胎土には多量のパミス、酸化鉄を含む。焼成良好。

2　人物埴輪（男性）頭部のみ遺存。1と同様の作りの規模と考えられる。頭髪も上げ美豆良と考えられるが、両端は欠失している。表面はヘラあるいは指で良くナデ調整をおこなっている。耳の部分は外側から径4㎝弱の穿孔がなされるが、その後の処理は認められない。輪積み痕は内面が顕著。色調橙褐色。胎土良。焼成良。

東松山市今泉字古吉海道出土遺物（第123図）第2図周辺遺跡⑵の図中Oとした箇所より出土した。遺物が採集されたのは東松山市教育委員会により実施された野本東部土地改良総合整備事業に伴ない調査された地点に近く、所謂柏崎古墳群と古凍古墳群の中間点に位置する。採集されたのは、元比企郡川島町町立中山小学校校長石川正一郎氏で、自宅付近で行なわれた工事により出土した一括資料を採集し一時自宅で保管されていたが、教材として利用することを考えられ、その全てを中山小学校に寄贈されたとのことである。

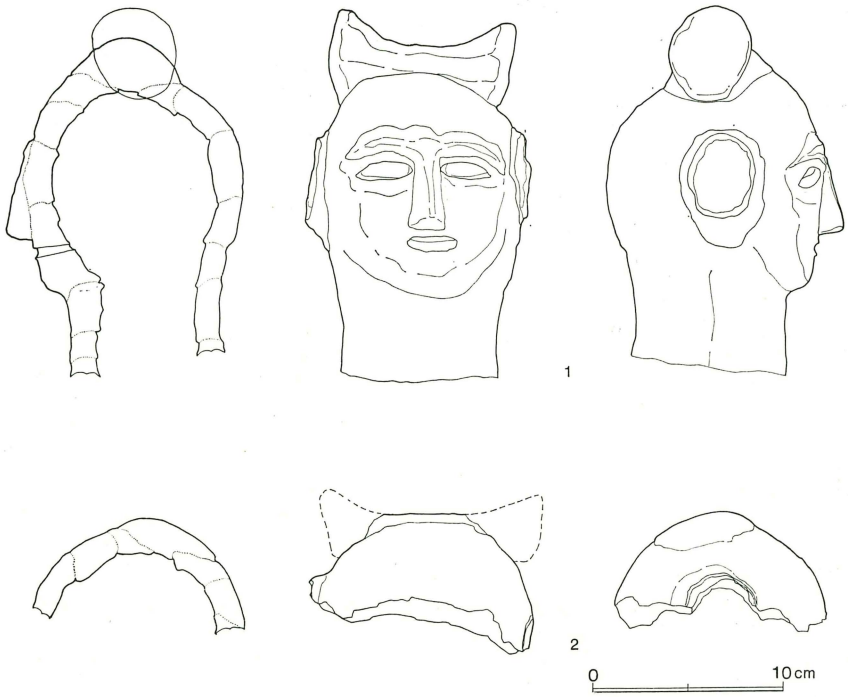
出土遺物の内訳は、古墳時代前半のものと、後半代のもので、後者は埴輪を伴なうことから、後期古墳の存在が考えられ、先行する五領期の住居跡との重複が考えられる。

6　人物埴輪（性別不詳）顔面の左半分が遺存。表面は扁平な作りで、顎は三角形状にとがり、額は広い。眉および鼻の部分は「T」字状の粘土帯を貼付したものと考えられるが、鼻の部分は欠失している。目と口は鋭い刃子状のヘラでくりぬかれている。外面整形は、ヘラによる入念なナデで、指によるナデ調整も加えられている。内面は木口による刷毛ナデ後、ナデ調整。色調は暗橙褐色。胎土は粗。焼成良。

7　普通円筒埴輪　第二段の中位以下が遺存。現存高19㎝、底部径10.5㎝を計る。第一段から第二段へは緩やかに開く。透孔は略円形を呈し、径8㎝と大きい。

透孔は、第二段の中央にあり、径8㎝で略円形を呈する。埴輪の径に比して大きいことが特徴的

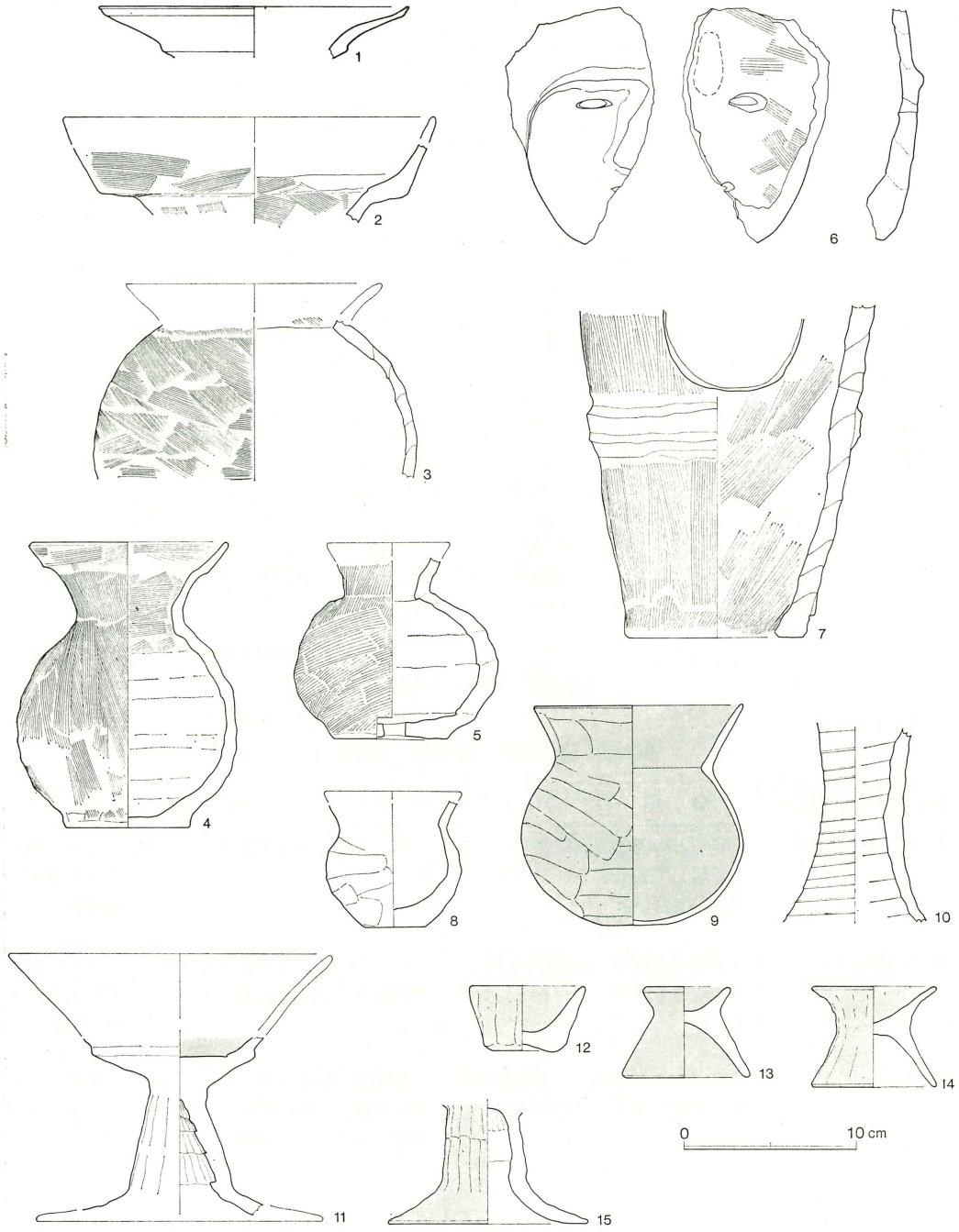
である。突帯は、低い「M」字状で、幅1.6㎝、高さ0.4㎝を計る。手法の特徴は、外面が縦あるいは斜位の刷毛ナデ調整で、刷毛は2㎝あたり12本が認められ極めて細かい。内面も同様、斜位の刷毛ナデ調整のみで、基部調整は認められない。色調橙褐色。胎土粗。焼成良。



第122図　表採土器実測図(1)

第29表　表採遺物（第122図）観察表(1)

器種	番号	法　量(㎝)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
壺	1	口径(18.1)	頸部との境に鋭い稜をもち、強く外傾して突出する口唇部に至る。器壁薄い。	内、外面とも丁寧なヨコナデ調整。	⅔欠　褐色　胎土は緻密　焼成良
壺	2		口縁部は複合で、直線的に開く。頸部は急激につづまり器壁は肥厚、	内、外面とも木口による刷毛ナデ調整後ナデが加わる。	⅔欠　暗褐色　胎土は緻密　焼成良
甕	3		胴部はほぼ球形。内面は輪積み痕を顕著に残す。口縁部は鋭く屈曲。	外面は、斜位に木口による刷毛ナデ調整。入念に仕上げられる。内面は横位のナデ調整。	胴部上半のみ⅔欠　淡橙褐色　胎土良　焼成良
壺	4	口径　11.8 底径　7.2 器高　16.7	口縁部は複合で緩やかに外傾。胴部は下位最大径をもち、略球形を呈する。底面は肥厚し、円板状をなす。輪積み痕は内外面とも顕著。	口縁部部複合部分は横位の刷毛ナデ、頸・胴部は斜位、縦位の刷毛ナデ調整。胴部下位はナデが加わる。口頸部は上半が横位の刷毛ナデ。	口縁部⅓欠　明黄褐色　胎土微砂多量混入　焼成良



第123図　表採土器実測図(2)

器種	番号	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
壺	5	底径　6.7	口縁部へは緩やかに外傾。胴部は下位に最大径をもち、略球形。造りは稚拙。全体的に肥厚し、輪積み痕顕著。底面中央に焼成前の径1.5cmの穿孔。	口頸部は斜位の刷毛ナデ調整。胴部は横・斜位の刷毛ナデ。内面は丁寧なナデ調整。	口縁部上半欠　暗赤褐色　胎土粗　焼成良
壺	8	底径　3.6 器高（8.0）	口縁部は緩やかに外反。胴部最大径は中位にあり、略球形。底面の器壁は肥厚。	ヘラケズリの後、丹念にヘラナデ調整。内面はナデ調整。	口縁部⅔欠　黄褐色　胎土緻密　焼成良
壺	9	口径　12.3 底径　3.0	口縁部は直線的に外反。胴部は整った球形。底面は小さく扁平。器壁は薄く、特に底部は2mmである。	口縁部は横位、胴部は横および斜位の丁寧なヘラナデ調整。内面はナデ調整が丁寧に施される。内外面丹彩。	口縁部⅓欠　暗赤褐色　胎土緻密　焼成良
須恵器長頸壺	10		円筒状の頸部から緩やかに開いて胴部に至る。	右回転のロクロ整形。	頸部のみ　青灰色　胎土緻密　焼成良
高　坏	11		口縁部は直線的に開き、体部端は明瞭な稜をもち、接合部は急激につづまる。脚部は緩やかに開き、裾部は水平に開く。脚部は輪積み痕顕著。	坏部内面はヘラミガキ。脚部はヘラケズリ。裾部はナデ調整。外面はヘラによる丁寧なナデ。坏部内面丹彩。	口縁部上半裾部欠　褐色
手捏ね	12	口径　6.6 底径　4.2 器高　3.6	不対称。特に口縁部はいびつ。底部は上げ底風である。	成形後指による縦位のナデ。内面も同様。丹彩。	完形　暗赤褐色　胎土良　焼成良
器　台	13	口径　5.0 脚部径　7.0 器高　5.3	受部は直線的に開く。端部は丸い。脚部は若干内傾して開く。器壁は肥厚。穿孔はない。	全面ナデによる調整後丹彩。	完形　暗赤褐色　胎土良　焼成良
器　台	14	口径　7.4 脚部径　7.4 器高　5.9	左右対称で整った作りである。口縁部は緩やかに外傾。端部は丸い。脚部は直線的に開く。	全面ナデにより調整。特に受部内面は入念に仕上げられる。丹彩。	完形　暗赤褐色　胎土良　焼成良
高　坏	15	脚部径11.8	若干ふくらみを持ち緩やかに裾部へ移行。器壁は全体的に肥厚。	脚部は縦位の丁寧なヘラナデ。裾部ナデ。内面は横位のヘラケズリ後、裾部はナデ調整が加わる。外面のみ丹彩。	坏部欠　褐色　胎土良

Ⅳ　鑑定報告

1　胎土分析結果報告書

第四紀地質研究所　井　　上　　巌

X線回析分析および電子顕微鏡観察

1　実　　験

1—1　試料

分析に供した試料は第30表胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試験に供する置物試料は洗浄、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する置物試料は断面を観察できるように整形し、⌀10㎜の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1—2　X線回折分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造宏鉱物の同定は、X線回折分析法によった。

測定には理学電機製X線回折装置を用い、X線管球、銅対陰極、フィルター、ニッケル、印加電圧—電流、30KV—15mA、スリット系、1°—0。15㎜—1°の条件で行った。

走時速度は、2°/㎜、フルスケールは800カウントとした。

なお、胎土の分析に先だって、原土と思われるローム質粘土の分析を行った。X線回折試験は原土、電気炉において700°C、900°Cで各々1時間燃焼した試料（同一試料を石英ガラスに定着し、原土、700°C、900°Cと順次実験を行う）の3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化のないことを確かめた上で胎土分析を行った。ただ、900°C以上になった場合の組成については明らかではなく、今後の検討が必要である。

1—3　電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合いについての観察は、電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T—20を用い、倍率は×45、300、700、1500、4500の5段階で行い、写真撮影をした。

45～300倍は胎土の組織、700～4500倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を規察した。

2　実験結果の取り扱い

実験結果は第30表胎土性状表に示すとおりである。

第30表右側には、X線回折試験に基づく粘土鉱物および速岩鉱物の組成が示してあり、左側は各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現

第30表　胎　土　性　状　表（1）

試料	タイプ	焼成	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物および造岩鉱物（mm）										ガラス量	備考
No.	分類	ランク	Ho-Mi-Hb	Mo—Ch Mi—Hb	Mo	Mi	Hb	Ch	Ka(Ha)	Au	Hy	Qt	Pl	Cr(Mv)	(mm)	
Fg- 1	F。	Ⅰ	⑪	⑳	2			4				36	33	(10)		粗粒 Qt Pl 混入淘汰のより粘土（水節）発泡ガラス
2	F。	Ⅳ	⑪	⑳	3			3				180	13			中粒 Qt Pl 混入淘汰の悪いローム質粘土、微小ガラス
3	A	Ⅳ	①	①	3	2	3	3				180	20			粗粒 Qt Pl 混入　〃
4	F′。	Ⅳ	⑪	⑳	2							110	50			〃
5	E。	Ⅳ	⑩	⑰	2	2						180	21			中粒 QP lt 混入、比較的粒径のそろったローム質粘土、微小ガラス
6	F′。	Ⅳ	⑪	⑳	2							166	15			粗粒 Qt Pl 混入、淘汰の悪いローム質粘土、微小ガラス
7	F。	Ⅱ～Ⅲ	⑪	⑳	2			4		3		204	33			〃　発泡ガラス
8	H。	Ⅳ	⑫	⑭	3		3					149	18			中粒 Qt Pl 混入、淘汰のよい砕屑性粘土、微小ガラス
9	F。	Ⅱ～Ⅲ	⑪	⑳	2			5			2	80	20			粗粒 Qt 混入、粒径のそろった粘土、発泡ガラス
10	H	Ⅳ	⑫	⑭	3		3			3	3	250(+)	12			中細粒 Qt 混入、粒縁のそろった砕屑性粘土、微小ガラス
11	E	Ⅳ	⑩	⑰	3	2				2		250(+)	10	30		粗粒 Qt Pl 混入、淘汰の悪いローム質粘土、微小ガラス
12	H	Ⅲ～Ⅳ	⑫	⑭	3		2					250(+)	11			中～細粒 Qt 混入、粒径のそろった砕屑性粘土、細粒ガラス
13	F。	Ⅱ～Ⅲ	⑪	⑳	2			4				250(+)	11			粗粒 Qt 混入、淘汰の悪いローム質粘土、発泡ガラス
14	F	Ⅳ	⑪	⑳	2			3			2	150	6			粗粒 Qt 混入、比較的粒径のそろったローム質粘土、微小ガラス
15	B	Ⅳ	①	⑮	3	2	2				2	250(+)	6			中～粗粒 Qt Pl 混入、淘汰の悪い砕屑性粘土、微小ガラス
16	F。	Ⅱ～Ⅲ	⑪	⑳	3			3			3	117	7	8		粗粒 Qt Pl 混入、淘汰の悪いローム質粘土、発泡ガラス
17	I	Ⅱ～Ⅲ	⑭	⑳	3							70	7			粗粒 Qt Pl 混入、淘汰のよい粘土、発泡ガラス
18	I	Ⅳ	⑭	⑳							2	194	8			粗粒 Qt Pl 混入、淘汰の悪いローム質粘土、微小ガラス
19	F。	Ⅲ～Ⅳ	⑪	⑳				3			3	250(+)	8			〃　葉方状ガラス
20	E	Ⅳ	⑩	⑰	3	3				2		250(+)	10			〃　微小ガラス
21	F。	Ⅳ	⑪	⑳	3			3			2	137	18			〃
22	E	Ⅱ～Ⅲ	⑩	⑰	2	2						250(+)	6			〃　発泡ガラス
23	D	Ⅲ～Ⅳ	⑨	⑰	2	4						220	22			中～細粒 Qt 混入、粒径のそろった砕屑性粘土、微小ガラス
24	F。	Ⅳ	⑪	⑳	3			4				93	13			粗粒 Qt 混入、粒径のそろったローム質粘土、微小ガラス
25	G	Ⅲ～Ⅳ	⑪	⑰	3	2						78	6			中～細粒 Qt 混入、粒径のそろった砕屑性粘土、細粒ガラス
26	D	Ⅳ	⑨	⑰	2	3				3	2	129	11			〃　微小ガラス
27	C	Ⅳ	②	④	2	4	17	2				71	15			〃
28	D	Ⅳ	⑨	⑰	2	3					2	220	15			〃　ローム質粘土、微小ガラス
29	I	Ⅰ	⑭	⑳								36		24(8)		細粒 Qt 混入、粒径のそろった良質の粘土、発泡ガラス

焼成ランク
Mu ……Ⅰ
Mu—Cr ……Ⅱ
Cr—Glass ……Ⅲ
Glass ……Ⅳ
原土……Ⅴ

Mo ……モンモリロナイト
Mi ……雲母類
Hb ……角閃石
Ch ……緑泥石
Ka ……カオリナイト
Ha ……ハロイサイト
Au ……普通輝石
Hy ……紫蘇輝石
Qt……石英
Pl……斜長石
Cr……クリストバライト
Mu…ムラサト

組成分類
Mo—Mi—Hb 三角ダイアグラム
Mo—Ch / Mi—Hb 菱形ダイアグラム

われる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）を㎜単位で測定したものである。

ガラス量は大略$2\theta=10°\sim20°$の範囲にあって、チャートが全体に腫れあがるブロードな現象を示す部分に対する面積で表示し、ガラス量の比較の材料とした。

電子顕微鏡観察によって得られたガラス量と、X線回折試験におけるガラスとを比較対比し、さらにムライト（Mu)、クリストバーライト（Cr)、などの組成上の組み合わせとによって焼成ランクを決定した。

2—1　組成分類

Ⅰ）Mo—Mi—Mb三角ダイヤグラム

第124図に示す様に三角ダイヤグラムを①～⑬に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として⑭に含め、別に検討した。

三角ダイヤグラムは、モンモリロナイト（Mo)、雲母類（Mi)、角閃石（Hb）のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、百分率（%）で表示する。

モンモリロナイトはMo/Ho+Mi+Hb×100で百分率として求め、同様にMi、Mbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の①～④はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第124図に示すとおりである。

Ⅱ）Mo—Ch、Mi—Hb菱形ダイヤグラム

第124図に示す様に菱形ダイヤグラムを①～⑯に分類し、位置分類を数字で記した。記載不能は⑳として別に検討した。

記載不能はモンモリロナイト（Mo)、雲母類（Mi)、緑泥石（Ch)、角閃石（Hb）のうち、ⓐ3成分以上含まれない。ⓑMo、Ch 2成分が含まれない。ⓒMi、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイヤグラムはMo—Ch、Mi—Hbの組み合わせを表示するものである、Mo—Ch、Mi—Hbの各々のX線回折試験のチャートの高さを各々の組み合わせ毎に百分率で表すもので、例えば、Mo/Mo+Ch×100と計算し、組み合わせ百分率を記載したものである。

菱形ダイヤグラム内にある①～⑦はMo、Mi、Ch、Hbの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Ch、Hbのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。①—1と①—2は現在のところ大きな意味はないが、胎土分析の量が増えてくると位置分類上の区分が必要なものとなるかもしれない。

しかし、現在は①として一括して取り扱った。

位置分類についての基本原則は第124図に示す通りである。

2—2　焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト（Mu）は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリス

トバライト（Cr）はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをⅠ～Ⅴの5段階に区分した。

ⓐ焼成ランクⅠ…高温を示すムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広い。

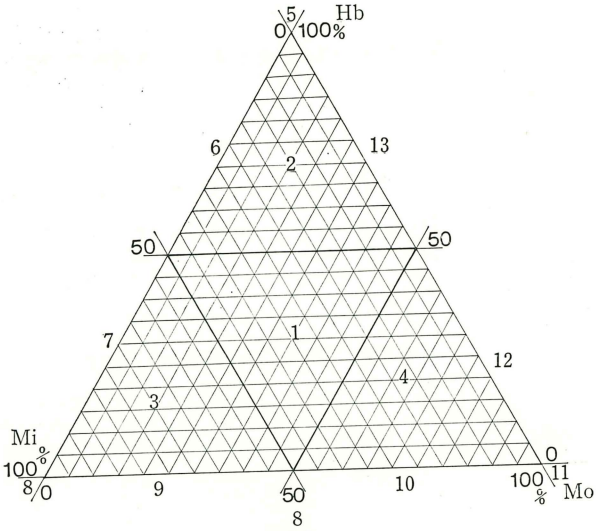
ⓑ焼成ランクⅡ…ムライトとクリストバライトが共存し、単位ガラスの面積が狭くなる。

ⓒ焼成ランクⅢ…ガラスの中にクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が小さく、葉状断面を成し、ガラスのつながりに欠ける。

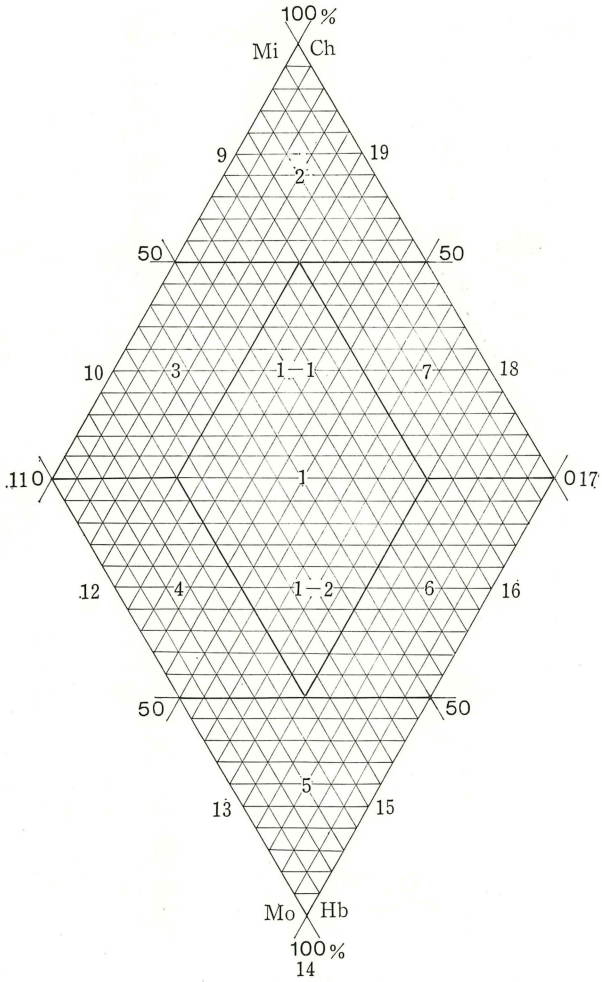
第31表　表原土および埴胎土性状表　(2)

試料	タイプ	焼成	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物 (mm)										ガラス量	備考
No.	分類	ランク	Mo-Mi-Hb	Mo-Ch Mi-Hb	Mo	Mi	Hb	Ch	Ka (Ha)	Au	Hy	Qt	Pl	Cr (Hu)	(mm)	
原土																
吉見-1	F′		⑪	⑳	2				(12)			113	13			
2	F′		⑪	⑳	2				(17)			45	6			
3	F′		⑪	⑳	2				(15)			50	0			
4	F′		⑪	⑳	3				(14)			78	0			
5	D		⑨	⑰	2	4			(10)			84	0			
6	H		⑫	⑭	3		2		(5)			95	22			
屋田-1			⑫	⑬	4							36	20			
2			⑦	⑳		4	4	4		4	5	67	7			
3			⑥	⑩		2	3					42	4			
4	E		⑩	⑰	3	2	3	3	(8)			73	17			
5	F′		⑪	⑳	4				(7)	3		125	36			
屋田											2					
埴輪-1			⑬	⑫	2		3	3				165	40			
2	F′		⑪	⑳	2							186	10			
3	F′		⑪	⑳	2							166	16			
原土																
古凍-1			①	③	4	6	6	5			3	142	28			
2	B		①	⑮	42	8	8	33	6	3	4	138	40			
3			⑫	⑬	4			3	(11)		3	68	8			
4	A		①	①	3	3	3	5	7 (12)			42	0			
5	A		①	①	5	3	3	4	(9)	3		60	19			
6			⑬	⑬	2			6	(6)		4	259 (+)	30			
7			①	⑯	5	4	4	3	(5)			115	30			

第124図(A)

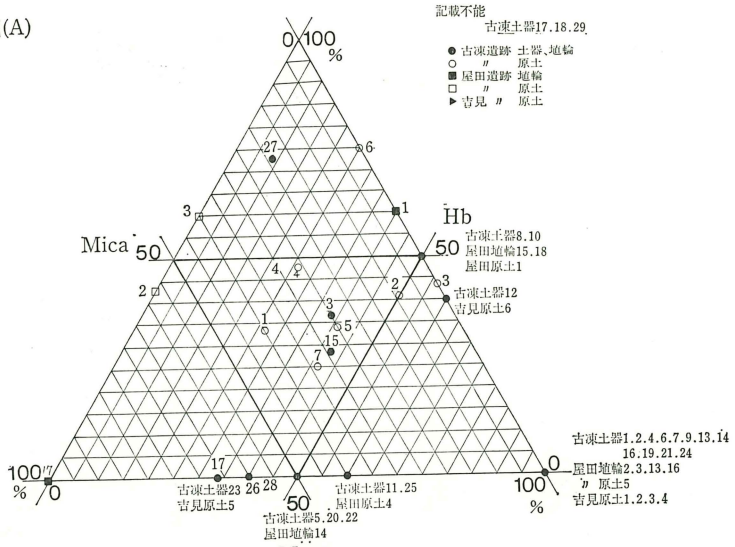


第124図(B)

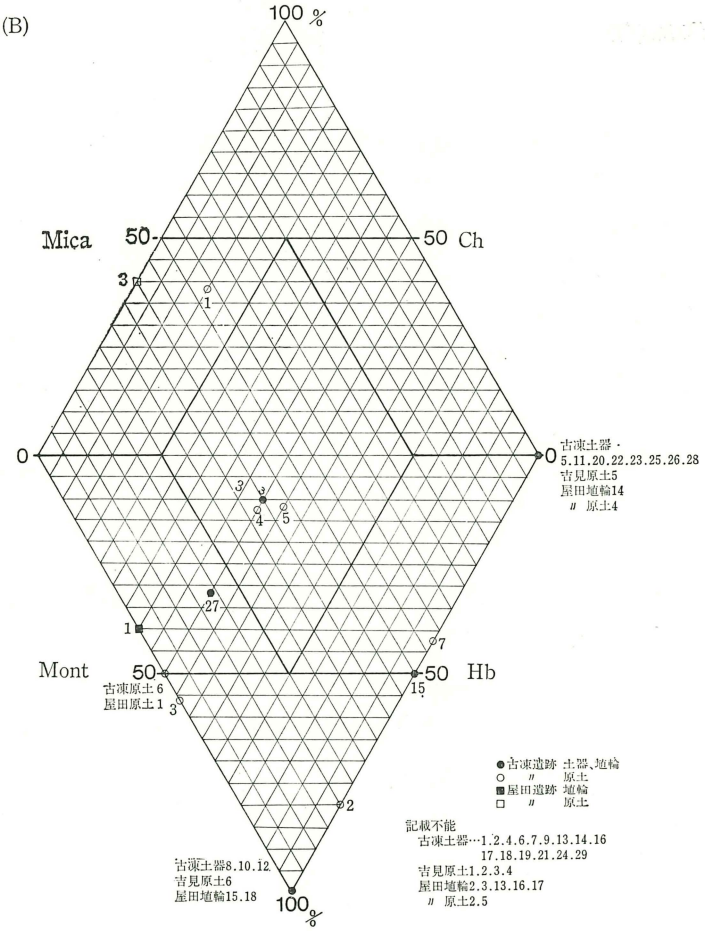


第124図　三角(A)、菱形(B)ダイヤグラム位置分類図

第125図(A)



第125図(B)



第125図 (A) Mo、Mi、Hb 三角ダイヤグラム
(B) Mo-Ch、Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

第32表　胎　土　性　状　表 (3)

試料	タイプ	焼成	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱（物）										ガラス量	備考
No.	分類	ランク	Mo-Mi-Hb	Mo-Ch Mi-Hb	Mo	Mi	Hb	Chl	Ka (Ha)	Au	Hy	Qt	Pl	Cr (Mu)	(mm)	
屋田埴輪																
Ya-13																
13	F′		⑪	⑳	3								111	35		
14	D		⑨	⑰	3	3							98	27		
15	H		⑫	⑭	4		4						95	62		
16	F′		⑪	⑳	2								91	23		
17			⑧	⑳		2			4	3			62	32		
18	H		⑫	⑭	2		2		(3)				68	13		

ⓓ焼成ランクⅣ…ガラスのみが生成し、原土の組織をかなり明瞭に残す。ガラスは微小な葉状を呈する。

ⓔ焼成ランクⅤ…原土に近い組織を有し、ガラスはほとんどできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組み合わせといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第30表の右端の備考に理由を記した。

2—3　タイプ分類

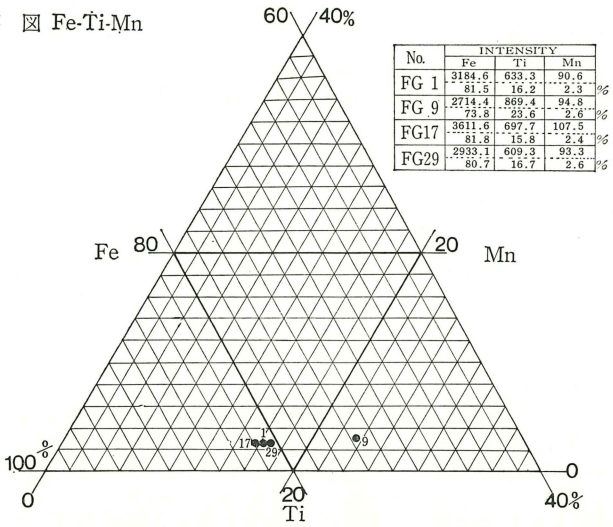
タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイヤグラム、菱形ダイヤグラムの位置分類による組み合わせによって行った。同じ組成をもった土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイヤグラムの位置分類における数字の小さいものの組み合わせから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組み合わせのものは同じ文字を使用し表現した。

例えば三角ダイヤグラムの①と菱形ダイヤグラムの①—1の組み合わせはA、三角ダイヤグラムの②と菱形ダイヤグラムの⑮はB、という具合にである。

各文字の後の（　）内の数字は、三角、菱形ダイヤグラムの位置分類の数字を合計したものである。近い組織を示しながら、位置分類上隣接するタイプ分類に入る場合には、試料数の多いものの類似としてA′などとダッシュをつけて分類した。

なお、タイプ分類のA、B、C等は便宜上であり、今後試料数の増加に伴って統一した分類名称を与える考えである。



No.	INTENSITY Fe	Ti	Mn
FG 1	3184.6 / 81.5	633.3 / 16.2	90.6 / 2.3 %
FG 9	2714.4 / 73.8	869.4 / 23.6	94.8 / 2.6 %
FG17	3611.6 / 81.8	697.7 / 15.8	107.5 / 2.4 %
FG29	2933.1 / 80.7	609.3 / 16.7	93.3 / 2.6 %

第126図　Ｆｅ—Ｔｉ—Ｍｕ

3　実験結果

3—1　タイプ分類

土器胎土は第30表胎土性状表に示すように、第125図三角ダイヤグラムＡ。菱形ダイヤグラムＢ、の位置分類焼成ランクに基づいてＡ～Ｉの９タイプに分類される。

古凍遺跡の発掘現場および周辺露頭で採取した原土は第125図、（Ａ、Ｂ）に示すように①—①、あるいは⑫—⑬、⑫—⑮の位置分類に位置する。古凍遺跡の土器胎土は⑪—⑳のＦタイプが最も多く、次いで⑩—⑰のＥタイプが多い。これらの胎土はいずれも現地の原土とは組成の異なるものである。原土と同じ組成を有するものはＡタイプ１個、Ｈタイプ３個と少ないのが特徴である。

土器胎土29試料のうち大半は粗粒の石英（Qt)、斜長石（Pl）を混入するローム質粘土で構成され、ガラスは微小で原土の組織をよく残す焼成ランクの低いものが多いのが特徴である。

Ａタイプ……Fg—３（古凍原土—４・５）

モンモリロナイト（Mont）、雲母類（Mica）、角閃石（Hb）、緑泥石（Ch）の４成分を含む粗粒の石英（Qt）、斜長石（Pl）を混入する淘汰の悪いローム質粘土によって構成される。

ガラスは微小で原土の組織をよく残しており、焼成ランクはⅣと低い。

Ｂタイプ……Fg—15（古凍原土—２）

モンモリロナイト（Mont）、雲母類（Mica）、角閃石（Hb）の３成分を含み、緑泥石（Ch）に欠ける。

中～粗粒の石英（Qt）、斜長石（Pl）を混入する淘汰の悪い砕屑性の粘土で、とくに石英（Qt）の混入量が多いのが特徴。

ガラスは微小で原土の組織をよく残しており、焼成ランクはⅣと低い。

Ｃタイプ……Fg—27

モンモリロナイト（Mont）、雲母類（Mica）、角閃石（Hb）、緑泥石（Ch）の４成分を含む成分的にはＡタイプに類似するものであるが含有比率が異なり、位置分類と異なるタイプに分類された。

中～粗粒の石英（Qt）、斜長石（Pl）を混入する粒径のそろった砕屑性の粘土で構成される。ガラスは微小で原土の組織をよく残しており、焼成ランクはⅣと低い。

Ｄタイプ……Fg—23、26、28（吉見原土—５、屋田埴輪Ya—14）

モンモリロナイト（Mont）、雲母類（MiCa）の２成分を含み、角閃石（Hb）、緑泥石（Ch）に欠ける。

組成上からするとＥタイプ、Ｇタイプはモンモリロナイト（Mont）、雲母類（MiCa）の２成分を含有するのでＤタイプに類似するが第125図（Ａ、Ｂ）に示すように位置分類で少し異っている。これらＥタイプ、ＧタイプはＤタイプに近いものである可能性も考えられる。

Ｄタイプは中～粗粒の石英（Qt）、斜長石（Pl）を多量に混入する。Fg—23、26 のような粒径のよくそろった砕屑性粘土とFg—28のようなローム質粘土に分れる。

前者は葉片状～微小ガラスが生成し、原土の組織を残しており、焼成ランクはⅢ～Ⅳといくぶん高い。後者は微小ガラスで、原土の組織をよく残し、焼成ランクはⅣと低い。

Ｅタイプ……Fg—５、11、20、22（屋田、原土—４）

モンモリロナイト（Mont）、雲母類（MiCa）の２成分を含み、角閃石（Hb）、緑泥石（Ch）に欠ける。

古凍遺跡および周辺の露頭で採取した原土と組成を同じくし、在地性のものと推察される。

粗粒の石英（Qt）、斜長石（Pl）を混入する淘汰の悪いローム質粘土で構成される。とくに、石英（Qt）の混入量が多いのが特徴である。Fg—22は発泡ガラスが生成し焼成ランクはⅡ～Ⅲと相当に高いが、他のものは微小ガラスであり、原土の組織をよく残し、焼成ランクⅣと低い。

Ｆタイプ……Fg—１、２、４、６、７、９、13、14、16、19、21、24（F′タイプ…４、６）（吉見原土—１、２、３、４、屋田埴輪Ya—2′、3′、13、16……F′タイプ）

Ｆタイプはモンモリロナイト（Mont）、緑泥石（Ch）の２成分のものと、モンモリロナイト（Mont）１成分のものの２つのタイプに分れる。

前者をＦタイプ、後者をF′タイプと便宜上区分する。両者が同じ位置分類に属するのは、⑪—⑳に相当するためで、⑳は図上に記載されないものを意味する。すなわち両者は同じ位置分類に属するがその組成には若干の相違がある。

Ｆタイプはモンモリロナイト（Mont）、緑泥石（Ch）の２成分からなり、粗粒の石英（Qt）、斜長石（Pl）を混入する淘汰の悪いローム質粘土で構成される。

ガラスは発泡しているものが多く、焼成ランクはⅡ～Ⅲと高い。Fg—１だけはムライト（Mu）が生成し、ガラスの面積が広く、焼成ランクもⅠと非常に高い。

F′タイプはモンモリロナイト（Mont）１成分を含み、粗粒の石英（Qt）、斜長を混入する淘汰の悪いローム質粘土で構成される。これらはモンモリロナイト（Mont）と$nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O$によって構成されるものと推察される。ガラスは微小で原土の組織をよく残しており、焼成ランク

はⅣと低い。

Gタイプ……Fg—25

モンモリロナイト（Mont）、角閃石（Hb）の2成分を含み、雲母類（Mica）、緑泥石（Ch）に欠ける。

中～細粒の石英（Qt）、斜長石（Pl）を混入する粒圣のそろった砕屑性の粘土で構成される。ガラスは細粒で原土の組織を残しており、焼成ランクはⅢ～Ⅳといくぶん高い。

Hタイプ……Fg—8、10、12（屋田埴輪Ya—15、18）

モンモリロナイト（Mont）、角閃石（Hb）の2成分を含み、雲母類（Mica）、緑泥石（Ch）に欠ける。

中～細粒の石英（Qt）、斜長石（Pl）を混入する粒圣のそろった砕屑性の粘土で構成される。ガラスは微小で、原土の組織をよく残しており、焼成ランクはⅣと低い。

Ⅰタイプ……Fg—17、18、29

石英（Qt）、斜長石（Pi）を主体とし、主要4成分に欠ける。全体には$nAl_2O_3 \cdot m \cdot SiO_2 \cdot lH_2O$と石英（Qt）、斜長石（Pl）によって構成される粘土であろう。

Fg—17は粗粒の石英（Qt）斜長石（Pl）を混入する淘汰のよい粘土で、ガラスは発泡し、焼成ランクはⅡ～Ⅲと高い。

Fg—8は粗粒の石英（Qt）、斜長石（Pl）を混入する淘汰の悪いローム質粘土で、ガラスは微小であり、焼成ランクはⅣと低い。

Fg—29は細粒の石英（Qt）、斜長石（Pl）を混入する粒圣のそろった粘土であり、ムライト（Mu）クリストバライト（Cr）が生成し、発泡ガラスの面積が広く、焼成ランクはⅠと高い。Fg—29の場合は高温のため原土組成がガラスに変化することによって変っており、Ⅰタイプに入れるには疑問が残る。

No.	挿図 No.	出土遺構	種別
1	26図	1号古墳	須恵蓋
2	29図	1号古墳	円筒埴輪
3	28図	1号古墳	円筒埴輪
4	31図	1号古墳	円筒埴輪
5	27図	1号古墳	円筒埴輪
6	30図	1号古墳	円筒埴輪
7	28図	1号古墳	円筒埴輪
8	28図	1号古墳	円筒埴輪
9	41図	4号古墳	須恵甕
10	55図	7号古墳	円筒埴輪
11	31図	7号古墳	円筒埴輪
12	31図	7号古墳	円筒埴輪
13	30図	7号古墳	円筒埴輪
14	63図	8号古墳	円筒埴輪
15	87図	8号古墳	円筒埴輪
16	61図	8号古墳	円筒埴輪
17	60図	8号古墳	円筒埴輪
18	53図	10号古墳	円筒埴輪
19	53図	7号古墳	人物埴輪
20	53図	7号古墳	人物埴輪
21	44図	4号古墳	大刀形埴輪
22	31図	7号古墳	円筒埴輪
23	118図	7号古墳	吉ヶ谷甕
24	68図	10号古墳	土師坏
25	118図	1号古墳	弥生甕
26	119図	3号古墳	弥生高坏
27	119図	1号古墳	弥生高坏
28	118図	3号古墳	吉ヶ谷甕
29		桜山窯	須恵甕

第127図　ＱＴ—ＰＬ相関図

3—2　螢光X線分析結果について

螢光線分析は次の実験条件に基づいて実施した。Target：Cr、40Kv、10mA、LiF—SiC、FullS—Cale、4000CPs

Fe、Ti、Muについては、Fixed Time 100Sec/3回で実施し、平均値を採用した。

Fe、Ti、Muの各々の強度（intensity）を百分率に換算し、3成分ダイヤグラムに記載した。

各試料の№および諸元は第126図、Fe—Tj—Mu三角ダイヤグラムは記載してある。螢光分析はFg—1、9、17、29の4試料について実施した。第126図に示すようにFe—1、17、29は組成上非常によく似ており、同じ原土による胎土と判断される。

Fg—9はFeの量が他のものと比較して、6～7％低く、Tiの量がその分多くなっている。図でも明らかなようにFg—9はFg—1、17、29とは組成上異なっており、土器胎土は異なるものと判断される。

Fg—1、29は微量のzr（ジルコニューム）、Fg—9、17は微量のzr（ジルコニューム）、Sr（ストロンチューム）、Rb（ルビジューム）が検出されている。

Zr、Sr、Rbの3成分について比較するならばFg—1、29が同タイプ、Fg—9、17が同タイプとなる可能性があるが確証はなく、今後の試験結果にまたねばならない。

3—3　石英（Qt）—斜長石（Pl）の相関について

第127図Qt—Pl相関図はX線回折試験によって得られた石英（Qt）と斜長石（Pl）の強度高を単純にグラフ化したものである。

実験はEullscall 800 Countに条件設定したものであり、この条件下におけるチャートとの強度高をミリメーター単位であらわしてある。

石英、斜長石は砂の主成分であり、土器製作過程で粘土中に混入される。

砂における石英、斜長石の量比は後背地の地質および運搬過程における流速などの条件によって変化し、ある地域においては大まかにある一程の比率を有するものと推察される。

ある地域におけるある比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各集団における技術上の問題である。例えば同一集団において使用する粘土は若干異なっても砂の粘土に対する混合比はある一定の量比にあると考えられる。すなわち、各集団における土器焼成温度は燃料の相違燃焼のさせ方など異なっていたであろうし、燃料の原材料となる木材の相違、いいかえれば、植生によっても異なったであろう。

粘土に対する砂の混合比は各集団が維持した土器焼成温度と密接な相関をもったであろうと推察される。すなわち、維持しえた土器焼成温度において良質の土器を焼きあげるために、粘土の機質と砂の混合比を経験的に決定したものであり、砂の混合比は純然たる土器焼成上の問題であると推察される。

第127図Qt—Pl相関図には古凍遺跡出土の土器および埴輪と屋田遺跡出土の埴輪が記載してある粘土に対する砂の混合比による分類ではⅠ～Ⅴの5つのタイプに大別される。

Ⅰグループ……Fg—9、17、24、25、27、Ya—14、16—18（Fg—24、25、27は土器、他は埴輪

石英（Qt）は65～100、斜長石（Pl）は5～30の範囲にある。個体数は8個あり、比較的集中度がよいのが特徴である。

Ⅱグループ……Fg—4、Ya—13、15（埴輪）

石英（Qt）は90～110、斜長石（Pl）は35～65の範囲にある。

個体数は3個と少なく、バラツキが大きい。

Ⅲグループ……Fg—8、14、16、21、26（Fg—26は土器、他は埴輪）石英（Qt）は115～150）斜長石は5～20の範囲にある。個体数は5個で、全体にバラツキが大きい。

Ⅳグループ……Fg—2、3、5、6、18、Ya—2、3

石英（Qt）は160～195、斜長石(Pl）は5～20の範囲にある。個体数は7個で全体に集中度がよい。屋田の埴輪、古凍の埴輪が含まれており、砂の混合比の類似性は高い。

Ⅴグループ……Fg—10、11、12、13、15、19、20、22（埴輪）石英（Qt）は250～300以上あり斜長石（Pl）は5～15の範囲にある。

石英（Qt）の量は斜長石（Pl）と比較して圧倒的に多いのが特徴である。

その他……Fg—1、7、23、28、29、Ya—17

Fg—23、28は石英（Qt）が220、斜長石（Pl）が15～20の範囲にあり、1つのグループを形成する可能性は高い。

他のものは集中度がなく、Ⅰ～Ⅴのどのグループとも離れており、異なる混合比を有する。

砂の混合比より、土器および埴輪はⅠ～Ⅴの5つのグループとその他に区分できた。

前記の前提条件に基づいて考察するならばⅠ～Ⅴの各グループは各々別の集団によって製作されたものであり、その他、1個1個もまた別集団を意味するものであろう。

各グループが同時代の別集団を意味するが、同一集団の時間の相違を意味するかは別に土器、埴輪の形態、出土層準による時代の決定との対比によらなくてはならない。

3—4　まとめ

古凍遺跡における原土は①—①Aタイプと①—⑮Bタイプの2つであり、これらに対比されるものはFg—3、Fg—15の2個のみであり、これら2つの胎土のみが在地性と判断される。古凍遺跡で出土した、土器、埴輪は試料数29個に対して、9タイプに分類される。最も多いタイプはFタイプで、個体数は12個に達する。このタイプはF′タイプも含まれているが、F′タイプはFg—4、6の個で他のものはすべてFタイプである。

F′タイプに類似するものは吉見原土—1、2、3、4、屋田原土—5、屋田埴輪Ya—2′、3′、12、16と多数存在するのが特徴である。

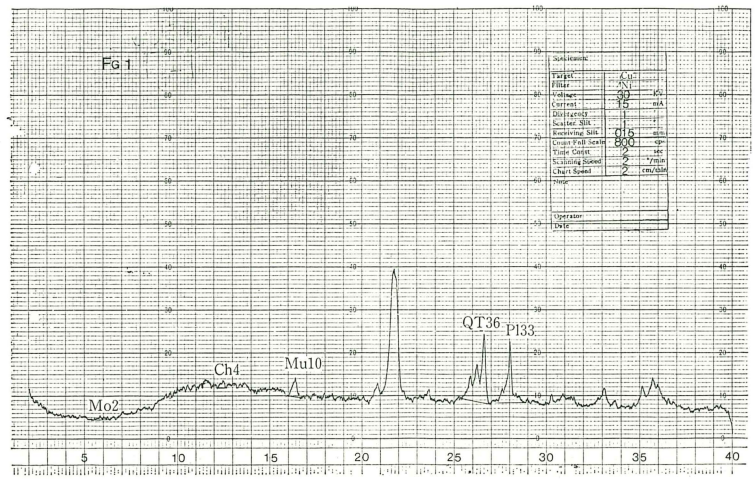
Eタイプは個体数4個で屋田原土—4と対比される。

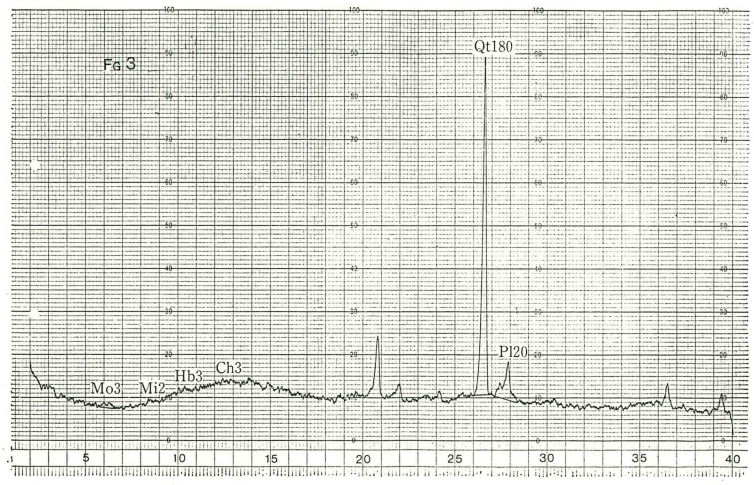
Dタイプは3個で、吉見原土—5、屋田埴輪Ya—14に対比される。

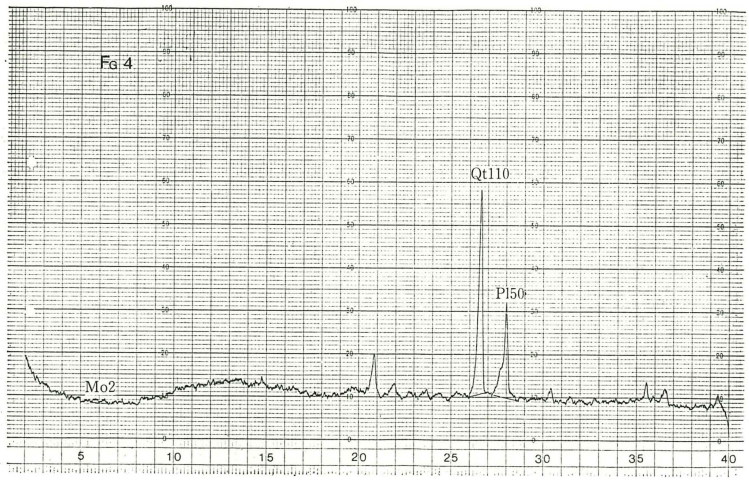
Hタイプは個体数3個で、屋田埴輪Ya—15、18に対比される。

このようにE、D、Hは吉見の原土、あるいは屋田の原土、埴輪に対比される場合が多く、全体に在地性というよりは外来性である。

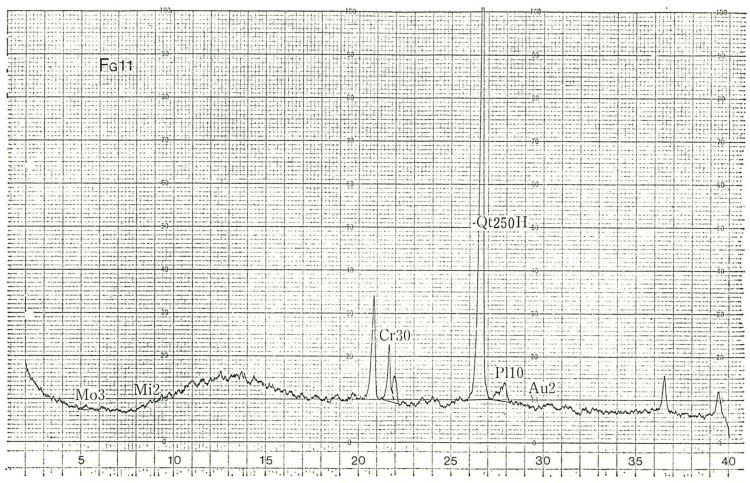
砂の混合比でⅠ～Ⅴも5つのグループとその他に分類されており、種々の胎土をもつものが混

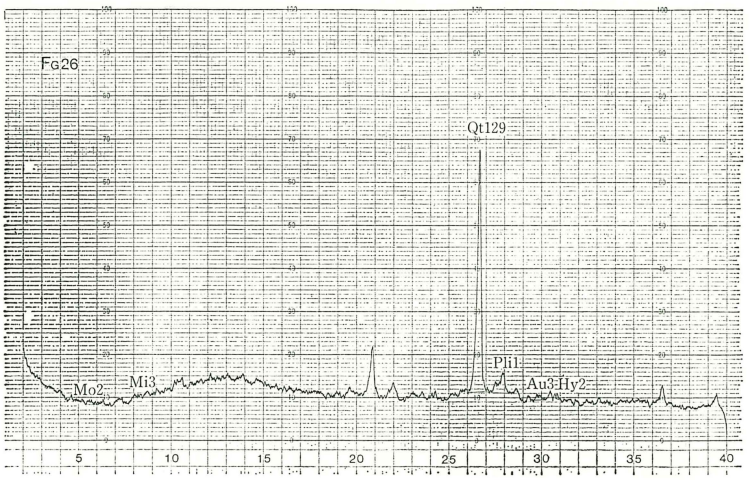






第128図　F G10・12・19





第129図　F G 20・22・28

合している可能性は高い。

螢光X線分析ではFg—1、17、29はFe、Ti、Mhの百分率比が類似しており、同一胎土の可能性が高いがFg—9はこれらと異なる組成をしており異なる胎土であろう。

2　古凍根岸裏遺跡試料珪藻分析報告

（鑑定者　パリノ・サーヴェイ株式会社　伊藤良永）

埼玉県埋蔵文化財調査事業団殿より、東松山市古凍根岸裏遺跡試料の珪藻分析の御依頼を受けました。このほど、分析が終了いたしましたので、その結果を報告します。

1　試　　料

分析試料は、88A地点5点、86A地点2点、85F地点1点の合計10点である。
これらの試料の試料番号、土質、珪藻化石産出傾向等をまとめて試料表とした。

試　　料　　表

試料番号		土質	珪藻化石産出傾向	試料番号		土質	珪藻化石産出傾向
1	88A—5	黒色土	R	6	86A—2	黒色土	C
2	〃　4	〃	R	7	〃　1	〃	C
3	〃　3	〃	R	8	85D—2	〃	C
4	〃　2	〃	R	9	〃　1	〃	C
5	〃　1	黒褐色土	R・R	10	85F—2	〃	R

2　分析方法

原試料15g秤量—H_2O_2処理—沈降法により粗粒砂除去—分散剤を加え粘土粒子除去—L字形管法により細砂除去—稀釈—散布—乾燥—封入（プリュウラックス使用）—鑑定

尚、検鏡に際しては1000倍で、珪藻化石の多い試料については200個、少ない試料については、100個体を鑑定した。

3　分析結果及び考察

分析結果は、検出された珪藻化石総数を基調とする百分率で各試料における珪藻化石の割合を算出し、第131図として後掲した。この中で、産出割合の高い種については、ダイアグラムで表わし第132図として後掲した。

次に、分析の結果、検出された珪藻分析を以下に列挙する。

汽水棲～淡水棲種（B—F）

Hantzschia　amphiorys

Nitzschia　obttisa

Rhopalodia — gibberula

Stepanodiscus　astraea

Amphora oralis

Diploreis oualis

淡水棲種（F）

Achnanthes lanceolata. a. L. uar. rosteata.

Caloneis baeillum, C. schroedexi, Cyclotella comta

Cymbella C. turgidula.

Eunotia pahilio, E. praerupta uar. bidens.

E. p. uar. infeata, E. pectinalis. uar. minor, E. ualida, E. lunaris.

Fragilaria breristriata, F. construens, F. c. uar. uenter,

Frustulia vulgaris.

Gomphonema acumenatum uor. coronata. G. subtili.

G. parrulum, G. bohemicum,

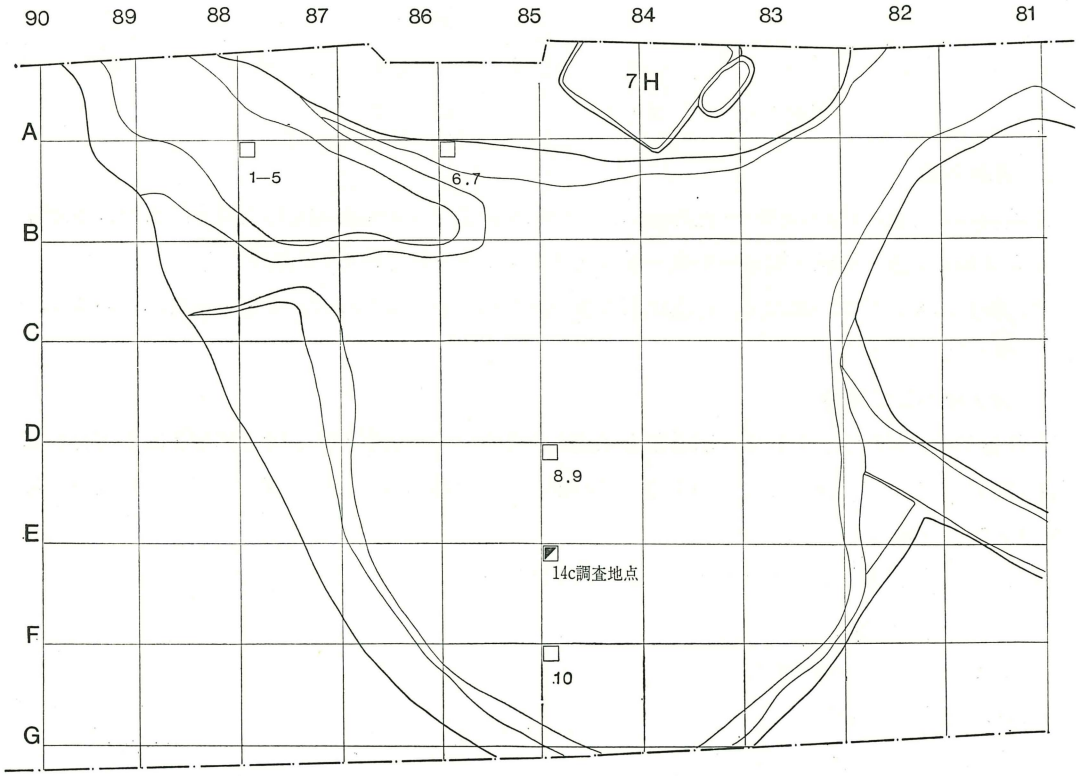
Melosira italica

naricula dicephala. N. d. var. undulata

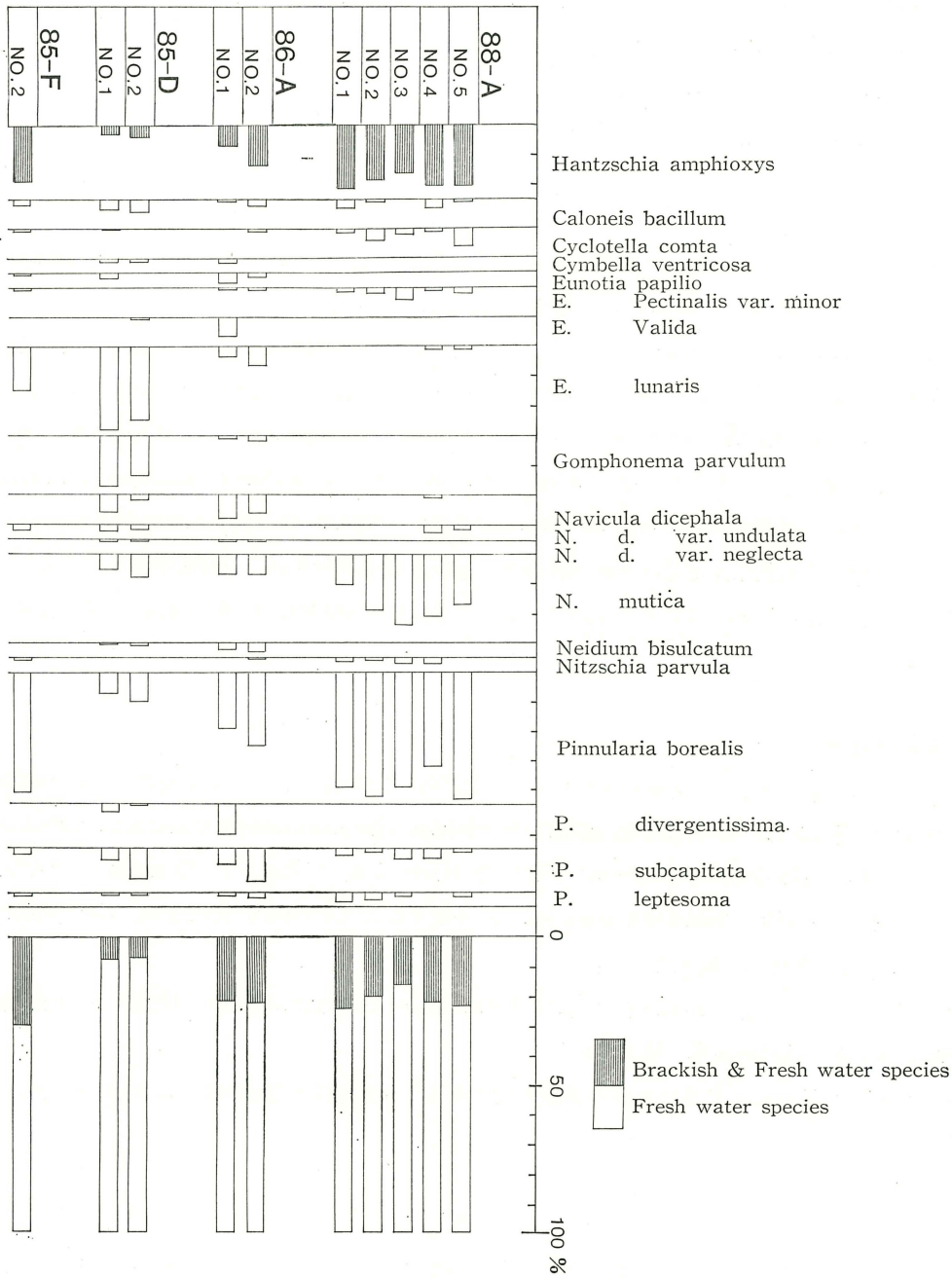
N. d. var. naglacta. N. anglica. N. exigun, N. pupula. var.

rəctangularis. N. menisculus, N. mutica, N. m. uar. N. sp

Neidium iridis, N. bisuecatum, Nitzschia linearis.



第130図　サンプル採取位置



第131図　古凍根岸裏遺跡珪藻分析結果(1)

Nitzchia parrula, N. sp

Pinnularia hemiptera, p. borealis, P. dirurgentissima.

P. subcaapitata, P. molaris, P. leptesoma, Rhohalodia gilba.

Stauroneis ancehs fo. giucilis, S. Smithii, S. anceps

Synedra Uaueherae.

次に各地点別に珪藻群集の特徴ならびに堆積環境について考察する。

（88—A地点）

№.1～№.5までの5点であり、珪藻群集の特徴はいずれの試料も、Pinnula borealis. Hantzchia amphioxys, Naricula mutiea を優占種とすることである。

このうち、Pinnularia borealis は好酸性、付着性の種で山地の湖沼に多いとされる種である。Hantzschia amphiorys は不定性から好アルカリ性で比較的低い水温を好む付着性の種である

また、Naricula mutica は不定性から好アルカリ性の一般水域に生息する付着性の種である。これらの優占種の他に浮遊性の Cyclotella comtu, 好流水性の Caloneis baeillum, Pinoularia sufcapitata, 好湿地性の Eunotia peetinalis uar, minor 等が随伸して検出された。

従って、88—A地点は池沼等の比較的停帯性の強い水域に堆積された堆積物と考えられる。

このことは、他の地域ではあまり見られない浮遊性のCyclotellacomta が高率で、然も連続して検出されたことによる。

（86—A地点）

№.1、2の2試料である。珪藻群集の特徴は2試料共、比較的よく似た構成を示し、Pinnulaxia borealia を優占とし、Rhopalodia gibbirula, Hantzschis amphioxys, Pinnluria subcapitata、好流水性の Naricula dicephala、不安性の N. mutica. 好湿地性の Eunotia Lunaris. E. papilio. 好止水性の Neidium bisuloatum 好流水性の Caloneis bacillum, Gomphonema Rarrulum 等が随伴して検出された。

更に、№.1は好湿地性の Eunotia valida Pinnularia dircegentissima 好流水性のCymbella uentricosa 等が比較的高率で検出された。

従って86—A地点は河川等の流水の影響を受けるような池沼または沼沢地における堆積物と考えられる。

（85—D地点）

№.1、2の2試料であり、珠藻群集はこれまでの地域とかなり異なり、好湿地性で有機酸性水域を好む Eunotia Lunaris と好流水性の Gomphonema parrulum が優占して検出された。

これに次いで88—A地点で優占した Pinnularia borealis、Naricula muticu や、好流水性の pinnularia subeopitata Caloneis bacillum Cymbella uentricosa、それに不定性のRhopalodia gibberula 等が随伴して検出された。

	DIATOMS \ Sample No.	88-A	5	4	3	2	1	86-A	2	1	85-D	2	1	85-F	2
B-f	Hantzschia amphioxys		21.0	21.0	16.0	18.0	21.2		13.5	7.0		3.5	2.5		19.0
	Nitzschia obtusa			1.0		1.0	3.0			0.5		1.5	0.5		
	Rhopalodia gibberula					1.0			8.0	14.0		2.0	4.5		6.0
	Stephanodiscus astraea		1.0												
	Amphora ovalis		1.0												
	Diploneis ovalis								0.5						
F	Achnanthes lanceolata						1.5		0.5	1.0		1.0	0.5		
	A. l. var.rostrata												1.5		
	Caloneis bacillum		1.0	3.0		1.0	3.0		2.5	1.0		4.5	3.5		2.0
	C. Schroederi									0.5					
	Cyclotella comta		6.0	1.0	2.0	4.0	1.5		1.0				0.5		1.0
	Cymbella ventricosa									2.0		1.5	1.5		
	C. turgidula						1.5								
	Eunotia papilio								2.0	3.5			2.0		1.0
	E. praerupta var.bidens								0.5						
	E. p. var.inflata											0.5			
	E. pectinalis var.minor		2.0	1.0	4.0	2.0	1.5		1.0	0.5					1.0
	E. valida									6.5		0.5			
	E. lunaris		1.0	1.0					6.5	3.5		25.5	28.0		15.0
	Fragilaria brevistriata			1.0	1.0										
	F. construens			1.0											
	F. c. var.venter					1.0									
	Frustulia vulgaris								0.5						
	Gomphonema acuminatum var.coronata														1.0
	G. subtile											1.5	0.5		
	G. parvulum								2.0	1.5		13.5	17.5		
	G. bohemicum				1.0					0.5		1.0			
	Melosira italica			1.0		1.0							0.5		
	Navicula dicephala			1.0					6.5	8.0		2.0	6.0		
	N. d. var.undulata		2.0	3.0								2.0	2.5		2.0
	N. d. var.neglecta								0.5	1.0		0.5	1.0		
	N. anglica											0.5	0.5		
	N. exigua				2.0	1.0							0.5		
	N. pupula var.rectangularis		1.0									0.5			
	N. menisculus											0.5			1.0
	N. mutica		17.0	21.0	24.0	19.0	10.7		7.0	7.0		8.5	5.5		
	N. m. var.									0.5					4.0
	N. sp.		1.0	5.0	3.0	2.0	9.1		1.5			0.5	1.0		
	Neidium iridis								0.5						
	N. bisulcatum								3.0	2.5		1.0	0.5		
	Nitzschia linearis					1.0									
	Nitzschia parvula			2.0	2.0	1.0	1.5		0.5						1.0
	N. sp.				1.0	1.0									
	Pinnularia hemiptera								0.5	1.0					
	P. borealis		43.0	32.0	39.0	42.0	39.5		25.5	19.5		10.5	7.5		41.0
	P. divergentissima									10.0		0.5	2.5		
	P. mesolepta					1.0									
	P. subcapitata		1.0	4.0	4.0	1.0	3.0		14.5	7.0		14.0	5.5		3.0
	P. molaris											0.5	1.5		1.0
	P. leptesoma		1.0		1.0	2.0	3.0		1.5	1.0		0.5	0.5		1.0
	Rhopalodia gibba		1.0												
	Stauroneis anceps fo.gracilis									0.5					
	S. Smithii												0.5		
	S. anceps											1.5	1.0		
	Synedra Vaucheriae				1.0										
	Σ Brackish & Fresh water species		23.0	22.0	16.0	20.0	24.2		22.0	21.5		7.0	7.5		25.0
	Σ Fresh water species		77.0	78.0	84.0	80.0	75.8		78.0	78.5		93.0	92.5		75.0
	Σ DIATOMS (N)		100	100	100	100	66		200	200		200	200		100

第132図　古凍根岸裏遺跡珪藻分析結果(2)

従って、85—D地点は88—A地点と堆積環境が異なり、小川等の流水が流れ込む湿地における堆積物と考えられる。特に、この試料で優占したE—Eunotia Lunaris は水苔等の蘚苔類の多い湿地を好む種といわれている。

（85—F地点）

№.2の1試料である。珪藻群集の特徴は、88—A地点と近似した構成が見られ、Pinnularia borealis と Hantzschis amphioxys、他に85—D試料で優占した Funotia Lunaris が多産した。

これ以外には、割合が少なかったが不定性のRhopalodia gibberula, Caloneis baeillum, Naviculadicephala var uadulata Pinnula riasubeopitata 等が検出された。

徒って85—F試料は池沼または沼沢地に堆積された試料と考えられる。また、湿地的環境も合せて推定される。

4 考 察

今回の分析は、台地上に形成された古墳時代の溝の調査である。特に、88—A地点は溝の中央に位置し、そこから遠ざかるにつれて、86—A地点（88—A地点から約15m）、85地点（88—A地点から約30m）、85—F地点（88—A地点から約39m）が存在する。

分析の結果、88—A地点は浮遊性の種や、好沼地性の種が多産することによって停帯性の強い水域（例えば池沼等）が存在したと考えられる。然し、中央部から遠ざかるにつれて浮遊性の種や好沼地性の種は減少して行き、85—D地点では好湿地性の種が卓越することから、湿地における堆積環境が示された。

86—A地点、85—F地点は88—A地点の中間的な、いわば沼沢地～湿地の環境であったと考えられる。特に、86—A地点の場合は河川等の流水の影響が考えられる。

参考文献

1982 埼玉県教育委員会 寿能泥炭遺跡発掘調査報告書 自然遺物編

3 古凍根岸裏遺跡試料 14C年代温定報告

（測定社団法人日本アイソトープ協会）

1 試料

試料は4号墳周溝内と思われる地点（85—F）より採取された。ローム直上の土壌（暗黒色土）試料1点である。

2 測定結果（報告書）

昭和57年8月3日に受取りましたC—14試料1個の測定結果がでましたのでご報告します。

コード	依頼者のコード	C—14年代
N—4611	4号墳85—F№.1	1350±70才B.D.（1310±70才B.D.

Ⅶ 結 語

路線内という限られた範囲の調査であったが、密度の濃い遺構分布と古凍古墳群の性格の一端を改めて再確認できた調査といえる。遺構はおおむね弥生時代の終末から古墳時代初頭に至る方形周溝墓群と古墳時代後期の古墳跡群、中・近世の遺構により構成されるが、総じて遺物量は少ない。

1 弥生終末古墳時代初頭

遺構は方形周溝墓７基の他住居跡４軒が確認されたが、遺存の悪いことに加え無遺物に近い遺構（住居跡）も多数存在する。

方形周溝墓は調査区南端（台地の東縁）に群在する一群と、調査区北端（台地中央）に位置する一群が大きく隔たって位置する。この２つの周溝墓群はそれぞれ異った内容をもって存在する。南の一群は一辺12～20ｍのやや大形の規模のもので統一されており、箇々の中軸線の示す方位もほぼ北を指向し、近接して立地するなど計画性、企画性が読みとれる。これに対し、北の一群は１辺８ｍ前後のやや小形の周溝墓により構成される。中軸線は大略南北を指向するものの整然とした配置は認められない。Ｃ区あるいは東松山市教委により調査された事例からかなり広範囲に密度の濃い分布が想定される。しかし、この２つの周溝墓群がどの様な変遷をもって成立したのかは遺物の欠落から明確に仕難いが、南の一群について言えば鍵の手状でブリッジを有する第１号周溝墓を初現とし、順次第２、３号周溝墓の成立が考えられるが、その変遷に要した時間は極めて少なかったものと思われ、北の一群についても同様のことがいえる。主体部の検出はなかったが、覆土の埋没が内区から始まる事実を考えれば、低位墳丘の想定は容易であり、すでに削平されたものと考えられる。

相互の周溝墓の分布については、階層差により箇々の墓域が成立したのか、または異った共同体の個有の墓域が設定されたのかは判断しかねるが、遺物に量的、質的差異が認められないことを考慮に入れれば後者の解釈がなりたつ。

出土遺物は、第１、３、５、７号周溝墓で確実に伴なう事例がある。第３、７号周溝墓から台付甕が、第５号周溝墓からは高坏および壺が出土している。台付甕は、口縁がくの字状に屈曲、胴部が球形を呈し、口唇部への刻みが消失していることなど、ほぼ同時期の所産とみて差しつかえないものと思われる。この様な形態的特徴をもつ事例は、五領遺跡を始め、籠田遺跡、鶴ケ丘遺跡、打越遺跡等かなり普遍的な出土様相をもつ土器である。これらは、刻みをもつ台付甕の伴出がなお認められる場合が多く、多分に弥生的性格を残している。所謂前野町期の段階に含まれると思われるが、一様最終段階としておきたい。第５号周溝墓出土の大形高坏は、形状から台付甕を指向して製作されたものと思われるが、胎土は極めて良好であるのに加え、体部下端に稜を持つなど高坏を目的とした部分も認められる。また、調整の刷毛ナデは、あたかもタタキ技法を模した様にもみえる。いずれも台付甕と同様の所産時期と考えられる。

2　古墳時代

古墳跡11基、住居跡３軒が検出された。古墳跡はすでに墳丘を消失しており、埋葬施設の形態、葺石の有無については不明である。

古墳分布は、南群（５基）と北群（６基）に分布が分かれるが、周囲の現存古墳を包括して本古墳群の全容を想定すると、東西150ｍ、南北300ｍの長楕円の占地が考えられ、中央は広場として大きな空間が存在していたことが理解できる。また、径30ｍ前後の比較的大形の古墳は、南半部に集中して分布しており、長楕円の短径線上に第４号古墳と東端に位置する大形墳（２図Ｊ）が対峙する形で存在する。

住居跡群はＡ区の南端から南西にかけて、古墳群と重複して占地するが、古墳群が後出であるため削平を受け、かなりの数が消失したものと考えられる。特に第７号住居跡の場合は、第４号古墳の墳丘下で検出されたことから先後関係を把握できる資料として重要である。

ここで、古墳跡の変遷を考えてみることにする。Ａ区（南群）では、墳丘下で検出された第７号住居跡の出土遺物について、特に坏形土器に関して注目したい。坏は２形態存在し、１つは内稜を持ち口縁部は鋭く短かく外反する椀状のものと、須恵器模倣坏である。（舞台遺跡で註視された鬼高Ⅰ式土器は、特に比企地方の特異性を指摘する資料として高い標価を得てきた。端的には、須恵器模倣坏が本地域にそのまま導入されず、和泉的な色彩を色濃く残した平底の椀形態から稜を持つ椀状の坏の段階まで特異な発展を途げたと思われる。）これらの土器は、鬼高Ⅰ式を５世紀の第４四半期とした場合、２形態が混在することから明らかに後出であり、５世紀末ないし６世紀の第１四半期前葉が妥当と思われる。第３号古墳跡は、破片であるがＭＴ15併行の高坏の出土が、第１号古墳跡は埴輪の形態、須恵蓋から６世紀の第３四半期以降と考えられる。以上から南群の先後関係は、（第７号住居跡）→第３号古墳跡→第５号古墳跡？→第４号古墳跡→第１、２号古墳跡の順に一様整理できるものと考えられる。

同様にＢ区（北群）についても先後関係を呈示してみたい。第８号古墳跡出土の坏形土器は、模倣坏と椀状のものとが存在し、第７号住居同様の理解が成り立つ。さらに埴輪についても言えることで６世紀の前半代に位置付けることができる。第７、10号古墳跡も同様であるが、第８号古墳跡が第Ⅰ段階と第Ⅱ段隔の埴輪を混在するのに対し、第７、10号古墳跡は第Ⅱ段階のみであることから若干後出と考え次の様な先後関係が想定される。第８号古墳跡→第７、10、９号古墳跡

次に、古墳間の空間あるいはブリッジの設定方向について観察してみることにする。南群を中心に考えると、第１、２、３号古墳跡の共有する外区に向ってそれぞれブリッジが設けられているが第４号墳では、南側の周堀と付属施設が接する部分に緩やかなスロープが削り残されている。これは明らかに墓道を意味するものであり、墓前祭祀が長く営なまれたことを物語るものといえる。

内部主体については、削平により知るよしもないが、付近に石材の露呈、検出をみない事と、周堀内区に痕跡を止めない事から一様竪穴系（粘土槨、木棺直葬）の可能性が高いことが考えられる。

円筒埴輪

円筒埴輪は、普通円筒埴輪、朝顔形埴輪が存在するが、後者の明確な例は第１号古墳跡出土のもの１点に過ぎない。また、検出された11基の古墳跡は墳丘を完全に消失しており、埴輪本来の樹立されていた状態を呈するものは皆無であり、単に個々の古墳に帰属するか否かを認識する操作のみが可能である。明らかに埴輪の樹立が想定できるものは前述の通り、第１、４、７、８、10号古墳の５基であるが、ここでは円筒埴輪を規定できる諸特徴をそれぞれ抽出し検討してみることにする。

プロポーション　形態的変化を把握する材料としてまずそのシルエットが第一義的な位置を占めることは言うまでもない。より有効な方法として次の様な計測値を求めることが考えられる。

①　普通円筒埴輪の口径：底径：器高の比を各々の古埴跡毎に求める。

②　凸帯の貼付位置を基準に、底部から第一凸帯中央間：第一凸帯から第二凸帯間：第二凸帯から口唇部端の比を古墳毎に求める。

以下、古墳毎に①、②の計測比を比較すると、

第１号古墳跡	27図—１	①	3.0：2.0：5.0	②	4.2：3.4：2.4
	27図—２	①	3.3：1.8：4.9	②	4.2：3.5：2.3
	28図—２	①	3.4：1.7：4.9	②	4.5：3.4：2.1
	29図—１	①	3.8：1.5：4.7	②	4.4：3.5：2.1
第７号古墳跡	55図—１	①	3.4：1.7：4.9	②	3.9：2.7：3.4
第８号古墳跡	60図—１	①	3.4：1.6：5.0	②	4.1：2.5：3.3
	60図—２	①	2.7：2.2：5.1	②	3.2：3.4：3.4
	61図—１	①	2.7：1.7：5.6	②	2.8：2.6：2.4：2.2
第216号土壙	87図—１	①	3.6：1.6：4.8	②	3.7：3.0：3.3
	87図—２	①	3.4：1.7：4.9	②	4.0：2.7：3.3
第10号古墳跡	68図—２	①	3.6：1.5：4.9	②	3.5：2.6：3.9

結果は全容を把握できるものが11点と少ないことから、かなりデーター不足であることはまぬがれないが、①の結果では器高の比は一定しているものの口径と底径の占める比率に大きな差が存在することがわかる。整理すると、口径＝底径×２、口径＞底径×２、口径＜底径×２に分けられるが、各古墳毎のまとまりは認められず単なるバラエティーとして把握できたに過ぎない。②については、古墳毎に比較的まとまりのある結果が得られた。

ⓐ　第二段が極めて短かく、第一、三段の占める比が大きなもの……第８号古墳跡の一部、第10号古墳跡、第216号土壙

ⓑ　凸帯の間隔がほぼ均等に貼付されているもの……第８号古墳跡の大半、第216号号土壙

ⓒ　第三段が比較的長く、順次その比を減じるもの……第１号古墳跡の全て

以上の様な結果を踏まえて、伴出土器の在り方を加味して考える時、明らかに形態変化はそのまま時間的推移として置きかえることが可能である。つまり、①では明確にし得なかったものの②ではⓑ→ⓐ→ⓒという流れを追うことができる。ⓑ→ⓐについては各々の古墳に統一を欠く面があるが、多分に埴輪工人の系譜が複数存在しているものと考えられ、Ⅵ—１の胎土分析の結果からもう

なづける事実と思われる。

第８号古墳跡出土の箆描き記号を有する円筒埴輪は、全て第一凸帯より上を残すもので全容を窺えるものはないが、同様の箆描き記号をもつ例として児玉町長沖第15、25号墳出土資料と対比してみたい。本跡出土資料は上記の制約から双方第三段のみを比較してみると、プロポーション、凸帯の形状（C_1ないしC_3）、器質、刷毛等極めて酷似する。

刷毛調整　例外なく全ての埴輪の内外面に認められるが、施紋順位、施紋方向、使用木口の材質、施紋範囲等の特徴を個々の埴輪について観ていくと、古墳跡間の共通項あるいは全く異った系譜の埴輪を合わせもつ古墳跡を抽出することができる。

a　上から下へ右廻転の斜位の刷毛ナデが内外面に施紋。基部調整（横刷毛）が認められる。刷毛は10本／２㎝のやや荒く深く施紋されるものが多い。（第８号古墳跡出土のものに限られる。）

b　右廻転の斜位の刷毛ナデが内外面に施紋。基部調整は認められず、内面は部分的に指によるナデ調整が加わる。刷毛は12本／２㎝のやや荒く浅い施紋。（第８号古墳跡）

c　外面は縦位、内面は口縁から⅔ほどが斜位の刷毛ナデ、第一段は指によるナデ調整。刷毛の始まりは凸帯の貼付位置に当たる場合が多く確認しにくい。（第７号古墳跡）

d　外面は縦位、内面は第三段の部分が斜位の刷毛ナデ、以下は指によるナデ調整。刷毛の始まりは凸帯の貼付位置に相当し確認できない。口縁部上位に一条の横位甕ナデが認められる（第１号古墳跡）

その他の特徴は、観察表でも逐一規模、形状を明記した通り、プロポーション、刷毛調整同様多くのバラエティーが存在する。これらの特徴は、古墳毎に集約される場合が多い。たとえば、埴輪凡例の項で示した凸帯の形状、規模、口縁部の形態等はプロポーション、刷毛調整のバラエティーにほぼオーバーラップする形で存在している。ここでは、時間的な制約から箇々の特性に立ち入ることを避け、前述の２項目を軸に諸種の特性を加味してまとめとしたい。

第Ⅰ期　３条凸帯の中形、２条凸帯の小形埴輪により構成。形態は底部から口縁部までほぼ直線的に立ち、口縁部端で外反する。口唇部は内側に突出する。成形は極めて細かな単位で積み上げられる。外面調整調整は基部調整の横刷毛後、縦あるいは斜位の刷毛ナデ。内面は斜位の刷毛ナデ。

凸帯は、突出度の高い断面台形で、各段をほぼ均一に区画。貼付後のナデ付けは認められない。透し孔は円形である。（第８号古墳跡）

第Ⅱ期　２条凸帯の小形埴輪が中心。形態は、底部から緩やかに開き口縁部端で外反、低くどっしりした作りである。成形は基部の上に幅広の粘土紐を２～３段積み上げて一気に作られる。外面調整は１次調整の縦刷毛のみで基部調整は認められない。内面は斜位の刷毛ナデ後、部分的に指によるナデ調整が加えられる。

凸帯は、突出度の高い台形あるいは弱いM字状をなす。貼付後は両端をしっかりなで付けられる。

形象埴輪（人物埴輪、太刀形埴輪）が出土（第７、10号古墳跡と第８号古墳跡の一部）

第Ⅲ期　全て小形の２条凸帯の他は認められない。形態は、口径が大きく、口径＞底径×２のものと、全体的に細みで口縁部まで緩やかに移行する２形態が存在するが、第一段が極めて長く底径

の小さなことは共通している。外面調整は１次調整の縦ハケのみで内面も口縁部周辺のみ斜め刷毛の他ナデ調整で仕上げられる。

凸帯は低い台形でM字状をなす。突出度は極めて弱い。透し孔は円形であるが作風は粗雑である。（第１号古墳跡）

本跡出土の円筒埴輪は、上記の様に３期に分けられるが、ここで実年代を想定すると、第Ⅰ期は、稲荷山古墳の年代観を参考に６世紀の第１四半期、第Ⅱ期は桜山の第Ⅰ段階に相当するものと考え、６世紀の第２四半期、第Ⅲ期は桜山の第Ⅲ段階に相当し、６世紀の第３四半期以降と思われる。

引用・参考文献

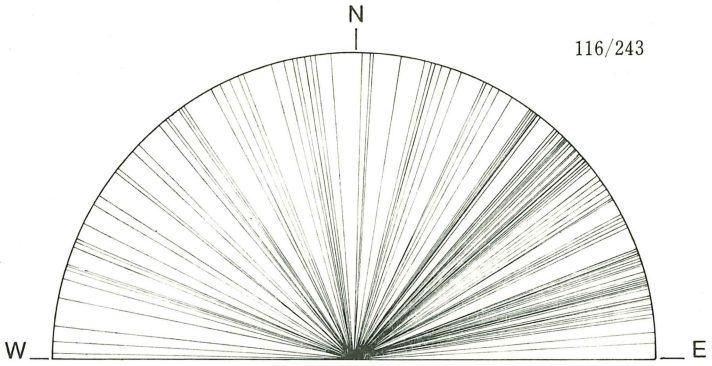
群馬県教育委員会　1980　『塚廻り古墳群』
埼玉県教育委員会　1980　『埼玉稲荷山古墳』
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982　『桜山窯跡群』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第７集
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983　『三ヶ尻天王・三ヶ尻林（１）』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第23集
鴻巣市遺跡調査会　1981　『生出塚遺跡』　鴻巣市遺跡調査会報告書第２集
児玉町教育委員会　1980　『長沖古墳群』　児玉町文化財調査報告書第１集
飯塚武司　1984　「北武蔵における埴輪生産の展開」『法政考古学』第９集

3　中世・近世

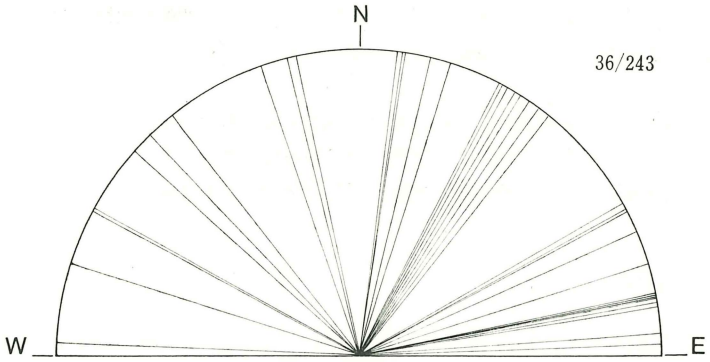
検出した中・近世の遺構（主に中世と考えられるが）の構成は、土壙、井戸跡、溝状遺構、土間状遺構の４者による有機的な組み合わせにより成立するものと考えられるが、大半は無遺物に近く同時性を指摘する材料に乏しいのが現実である。しかし、稀かではあるが、紀年名の明らかな板石塔婆の出土や、一遺構より一括して出土した瓦質内耳土器などから大略の上限とそれ以降の時間的推移を追うことは可能である。

遺構の中心をなすのは、243基の検出をみた土壙と17基を教える井戸跡である。まず、土壙について概括してみると、その分布は調査区全域で認められるものの、やはり井戸跡、溝跡の分布域に集中することが指摘でき、出土遺物の傾向も瓦質内・外耳土器、石臼など日常雑器の出土頻度が極めて高い事実がある。一方、やや分布の相な台地縁辺、あるいはA区土壙集中区の外縁部、B区の南半部では古銭、古瀬戸皿（煤付着の燈明皿使用のもの）など追善供養に用いたと思われる遺物の出土が顕著であることなどから墓域的な色彩の色濃い部分といえる。（古銭については、２ないし３枚を単位に検出される場合に限られるが、所謂六道思想を基調とするものの、あくまでも６枚を一単位とすることを厳格に守らなければならない風潮が、この地域にどの程度浸透していたのかは不明である。）以上の様に、生活領域と墓域的な領域に区分されるが、特に４号古墳跡の北側に広がる土間状の部分と井戸跡そして土壙の在り方は、ややまとまりをもった居住（館）施設の存在を予測するに十分な遺構の在り方といえる。

土壙については、その形状が方形、円形、隅丸方形、楕円形、長方形、不整方（円）形等多彩であるが、円形、長方形のものからは染め付けの椀、極めて浅い瓦質内耳土器の破片が出土すること



土壙主軸方位(方形・隅丸方形・不整方形)



土壙主軸方位(楕円・不整楕円)

第133図　土壙主軸方位集成グラフ

から近世以降の所産と思われる。隅丸方形、楕円形に集約される中世代の土壙の主軸（長軸）方位は、第133図に集成した通り、特に強い集中は認められないものの、北東、北北東の間に全体の½が集まるなど明らかに一定の意識概念（墓壙としては北枕の慣習）が介在していたものと考えられる。その点では、グラフを別に表示したが、大要では隅丸方形、楕円形プランの両者共同質の性格を有していたと做すことができる。

井戸跡は、他の遺構を切って穿たれる場合が多く、全容を把握できるものは少ないが、開口部がロート状で途中から円筒状に掘り込まれるものが主体で、梯子状の掘り込みは認められない。分布は、64～80グリット列に群在しており、開口部が4ｍ前後、深さ3ｍ弱のやや大形で画一的なものである。遺物は、多量の瓦質内・外耳土器、石板塔婆など良好な出土状態をみた第3、8号井戸跡が含まれている。

図示した出土遺物の内訳は、第14号土壙（第112図10、12）、第15号土壙（第112図11）、第39号土壙（第112図4、6、7）、第41号土壙（第112図1、2）、第44号土壙（第112図3、第113図1、2）、第71号土壙（第111図1～3、7）、第110号（第111図4～6、8）、第3号井戸跡、第8号井戸跡の9遺構から出土したものが全てである。その内容は、瓦質内・外耳土器、古瀬戸皿、板碑、

土師質土器であるが、年代観を言求できるものは次の通りである。

板石塔婆　第8号井戸跡の底から出土した板石塔婆は、長禄2年の銘と、禅門道中の法名が刻まれている。長禄2年は、西暦1458年に当たり室町時代の前葉に相当する。（この時期の板石塔婆は供養塔から墓標的な性格のものへと移行した時期とされている。）

瓦質内・外耳土器は、内耳、外耳、鉢形の3形態が存在するが、最も出土頻度の高い内耳土器は、浅い所謂焙烙状のものと、深い鍋形の存在が考えられる。ここでは、この2者について分類が可能と考える。

内耳土器については、近年該期の調査事例の増加からようやく編年的研究の域に達した感がある。しかしながら、遺構と遺物が遊離した出土例や、中世の編年的基軸となりうる古瀬戸、あるいは紀年銘を有する遺物との共伴例が比較的少ないことから十分な説得力をもつ内容には到っていない。

その様な中で、中島倉司氏による一連の論攻はこの方面における研究に多大な影響を与えた。

ここでは中村氏の成果を参考に、形態分類を試みたが、次の3タイプが抽出できた。

A　体部は緩やかに開いて立ち上がり、口縁部は屈曲して更に大きく開く。口唇部は比較的フラットな作りである。（グリッド出土一括　120図—12、15）

B　体部は緩やかに開いて立ち上がり、口縁部はふくらみをもち内彎して口唇部に到る。口唇部は丸い。（8号井戸跡　95図1、4）

C　A類とほぼ同様の特徴を有するが、口縁部が比較的狭く体部との境が明瞭でなく漸移的である。（3号井戸跡　93図—5、71号土壙　111図1～3、7）

以上の様な分類を中村氏の編年案にあてはめれば、第Ⅱないし Ⅲ段階に置けるものと思われ、14、15世紀の所産ということになる。一方、栃木県内の内耳土鍋の編年案では、焙烙と内耳鍋の用途分化が定着したのは第Ⅲ期（16世紀代）と考えられており若干新しい年代観が与えられている。また、口辺部、口唇部の形態変化に着目した藤巻幸男氏は、庚塚遺跡の調査事例から、口唇上面が水平で、内側がやや肥厚し、口辺屈曲部に強い稜をもつものを（A）類とし、口唇が内傾し稜の弱い面をもち、口辺屈曲部はなだらかで弱い稜をもつものを（B）とした。藤巻氏は、内耳土器の初現を内耳鉄鍋の模倣に求め、内耳鉄鍋により近い（A）類が先行し（B）類を退化形態と理解した。

本跡出土例をあてはめると（A）→（B）→（C）の順にそのまま置き換えることができ、極めて有効な視点といえる。本跡出土の内耳土器所産時期については、遺構を異にするが15世紀代の古瀬戸および15世紀中ばの石碑の出土からほぼ同様の年代観を与えても差しつかえないものといえ、（A）～（C）の時間幅についてもさほど大きなものとは考え難い。今後、良好な共伴例を待って再考すべき問題であろう。

引用・参考文献

岩淵一夫　「赤塚遺跡」　栃木県埋蔵文化財調査報告書第36集　1981
五十嵐至ほか　「元島名遺跡」　高崎市文化財調査報告書第6集　1979
中村倉司　「内耳土器の編年とその問題」『土曜考古』創刊号　土曜考古学研究会　1979

中村倉司　「埼玉県の中・近世考古学」『土曜考古』第４号　土曜考古学研究会　1981
藤巻幸男ほか　「庚塚・上・雷遺跡」　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1980

図　　版

遺跡遠景（東方市野川から）

遺跡遠景（西方滑川から）

図版 2

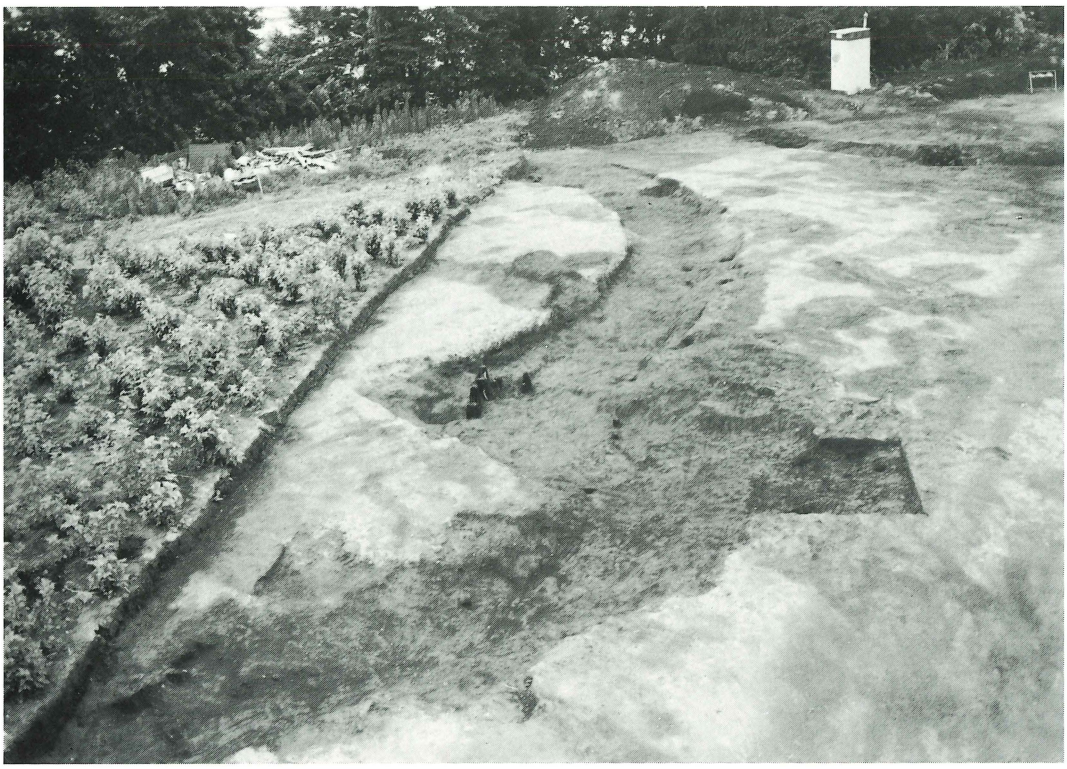
B区全景

C区全景

図版 4

第 3 号方形周溝墓土層断面

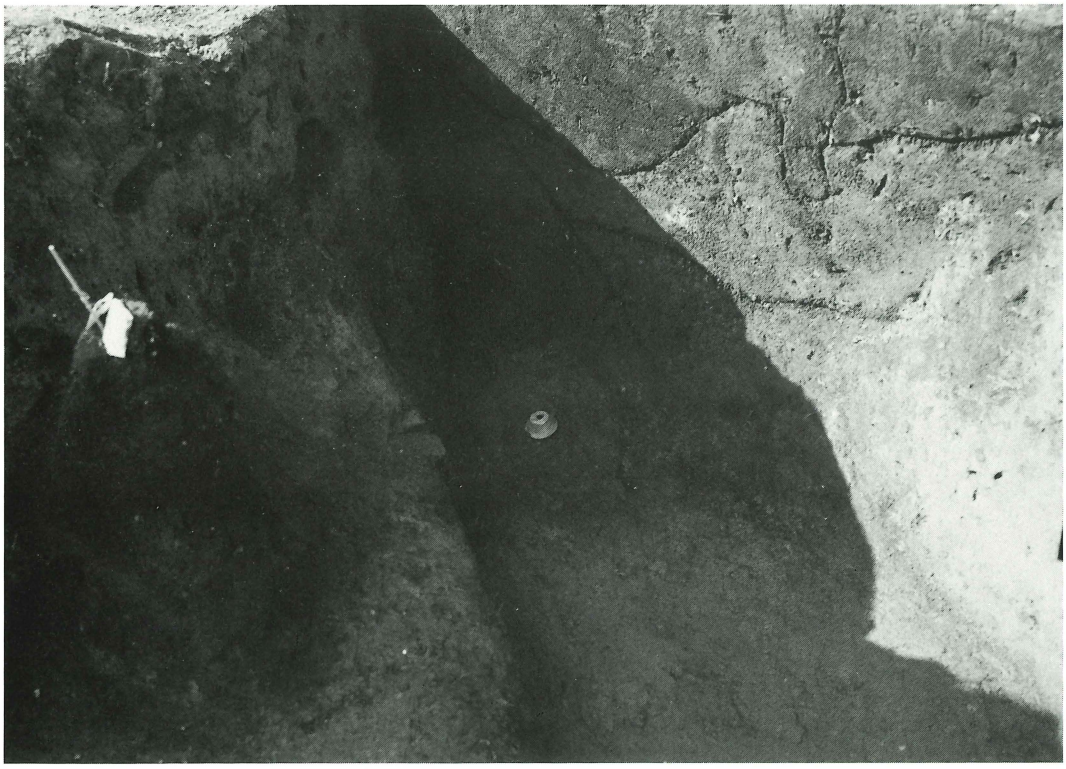
第 3 号方形周溝墓遺物出土状態



第 1 号方形周溝墓全景

第 1 号方形周溝墓遺物出土状態

第 5 号方形周溝墓遺物出土状態



第 6 号方形周溝墓紡垂車出土状態

図版 6

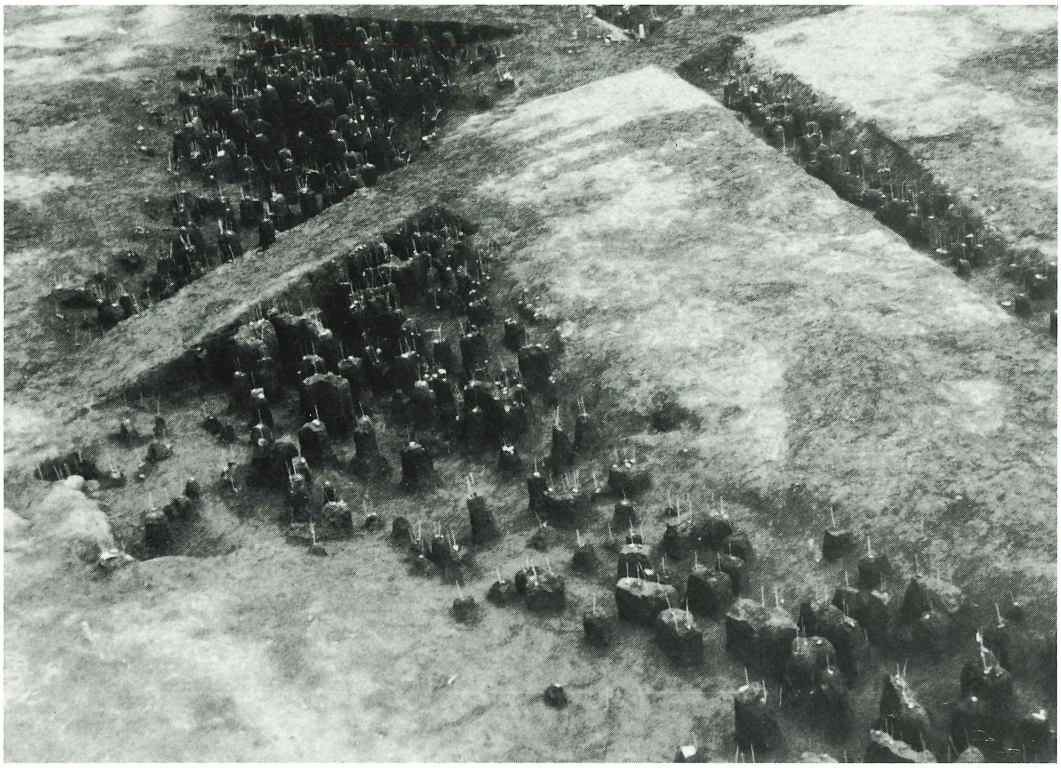
第 5 号方形周溝墓遺物出土状態

第 7 号方形周溝墓遺物出土状態

第 1 号古墳跡遺物出土状態(1)

第 1 号古墳跡遺物出土状態(2)

図版 8



第 3 号古墳跡遺物出土状態

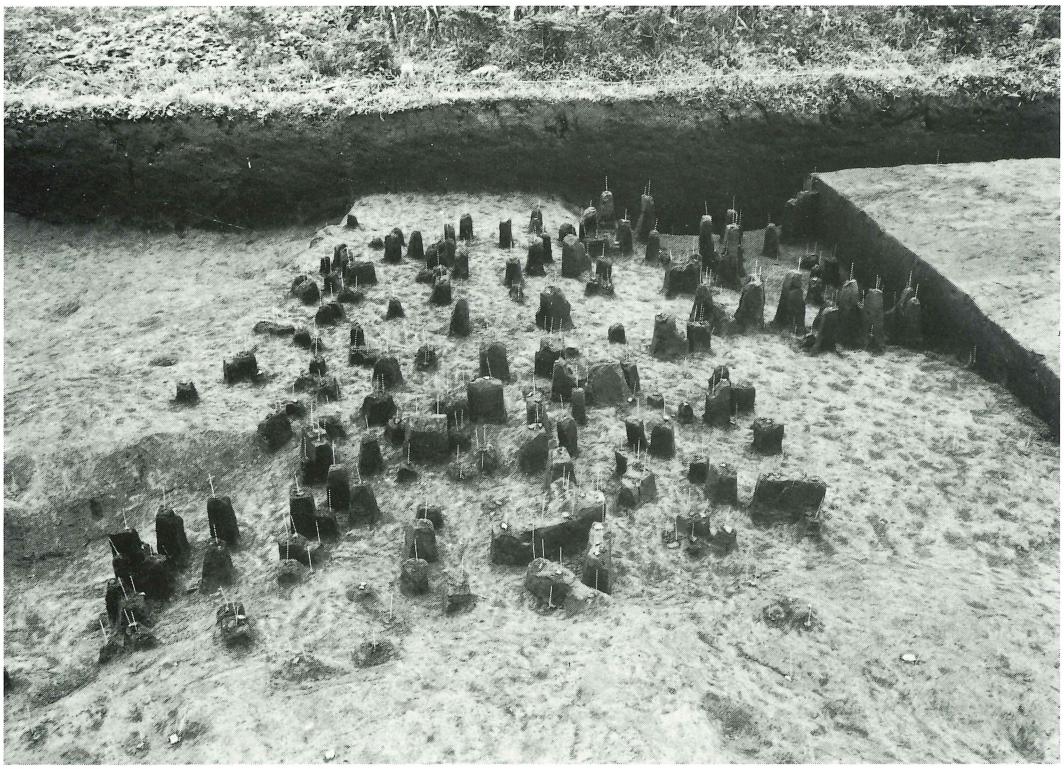
第 5 号古墳跡遺物出土状態

第 4・5 号古墳跡全景

第 4 号古墳跡全景

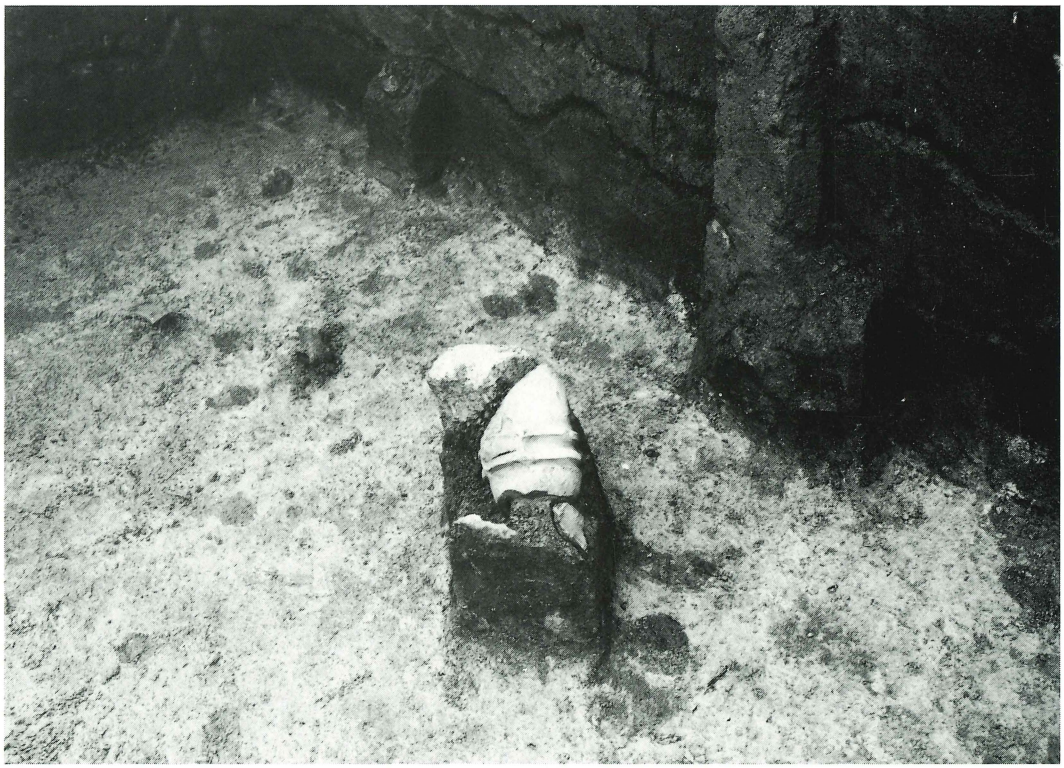
図版10

第４号古墳跡前庭部土層断面



第４号古墳跡遺物出土状態(1)

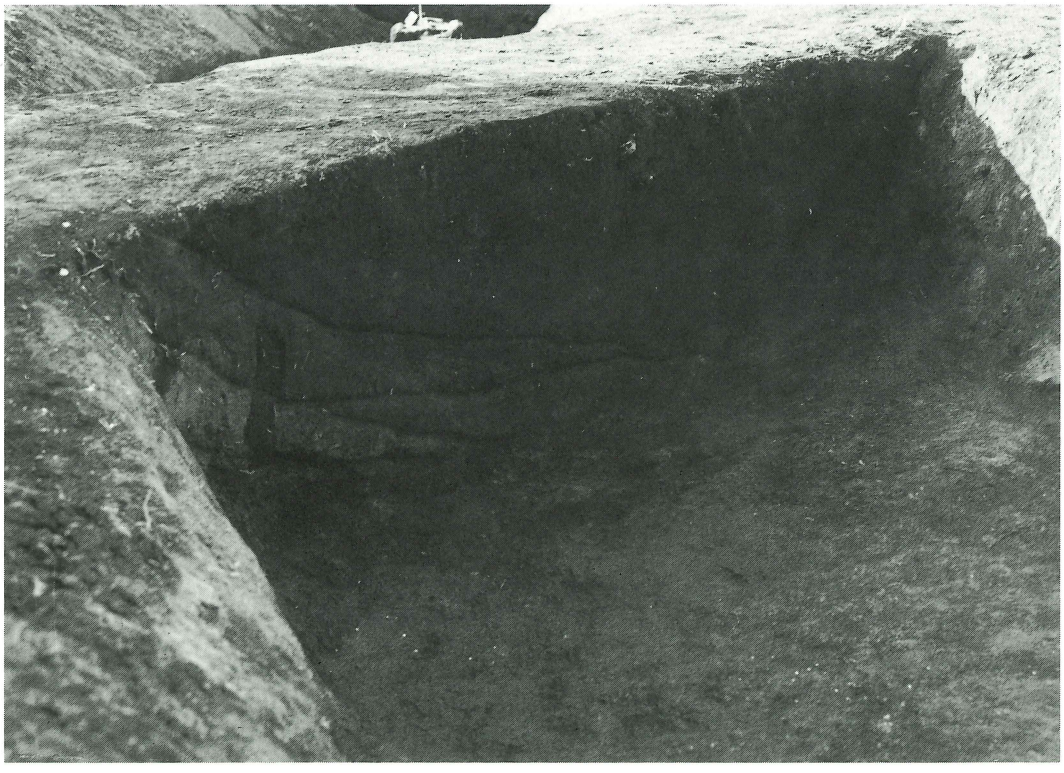
第 4 号古墳跡遺物出土状態(2)



第 4 号古墳跡遺物出土状態(3)

図版12

第６号古墳跡全景



第６号古墳跡周堀土層断面